

3e
MA



* 0033520000 *

0033520-000

361-Ma81-8ウ

社会学新講

松本潤一郎・著

日光書院

新版

昭和22

AGA

33 7.18

23659

361
MA81
8

松本潤一郎著

社會學新講
(新版)

日光書院版



序

世界史的大轉換を來たさんとしてゐる、現下の全人類生活上の革命期に當つて、所謂歴史的必然性をもつて展開されたこの地球上の大動亂に際會しつゝ、我國が、不幸一敗、地に塗れたことは、國民としてわれわれの深く深く、痛惜に堪へない次第である。敗戦日本の、軍事的、政治的、經濟的、文化的崩壊は、はじめな舊日本の死屍を、まのあたり横たへる。しかも世界的動搖の唯中において、戦後の經營は、まだまだ目鼻がつかず、時艱の推移は、昨日から今日へ、今日から明日へと、益々、重大性を加増する有様であつて、國民の容易ならざる責務が遞増しつゝある。しかし、敗戦日本國民は、そのことにもめげず、雄々しく立ち上がらなくてはならぬ。過去の錯誤を是正して、將來のために、復興を誓はなくてはならぬ。國家再建の正しい方向に、荊棘の途を切り開いて行かなくてはならぬ。

現代國家が、複雑な社會的諸要素と關聯を、そのうちに含むことは、國家再建の問題においても、ひとり、現實各方面においてのみならず、思想上において、復興を策し、外國諸國と相伍し、親善を期するといふことにあるべきであらう。例へば、學術の點においても、しかりであつて、

それも、ひとり、自然科学の分野ばかりでなく、社会科学の領域において、そのことを實現しなければならぬ。これが、社会科学の方面の問題として、殊さら急務であることについては、本書の緒論をもつて、當てたのであるから、いま、反覆を差し控へる。要するに、學術研究の道もまた、窮極において、社會・國家の存在・發展に對する、正しい寄與に存することを思へば、學徒の、この敗戦時局下の、挺身の熱意の如きも、決して、卑しめらるべきものであるまい。いな、國家再建、國際親善社會の樹立については、思想上の部署を受けもつ、學徒の負荷は、いたつて、大なることを思はなくてはならぬ。

特に、社会科学中、中樞に位置する研究たる意味において、社會學が如上の要請に應へて行くべきものであることを、指摘せねばならぬ。殊に、そのことは、社會即國家と見做される我國の場合において、しかりだといはなければならないが、しかも、社會學で、正面からわが國家のことを論ぜず、社會を經由して、國家の問題にいたるのは、どうしたことであるか。人は、或は、輕率に、この點を、我國社會學の研究者に、責めることがあるであらう。しかし、この誤解は、二つの先入見に煩はされてゐるのである。その一つは、あたかも、名木名草といへども、植物學者の手によつて、名もなき一木一草とともに、先づ、植物一般として觀察され、その結果、かへ

つて、名木名草の眞に尊重さるべき所以を明らかならしめ、さらには、それを培養・増殖する確實な方法まで、發見して來る如く、社會學者もまた、國家に對して、それが、優れた社會であることを認めつゝも、その優れた社會であることを認めるところの、まさにその理由から、これを社會的一形態として、爾餘の諸社會との對質によつて、その眞に優れた點を顯現しようとする。しかるに、通俗の先入見は、實に、この點の理解を缺くのである。

誤解の第二の原因となる先入見は、社會學が、如上の科學的觀點に立つ結果として、諸社會の一般理論を重視するとともに、一面において、國家の理論も、また、特に、わが國家の理論も、これを特殊研究として、大いに開拓しようとする、研究手続きに對し、なんら知らうとせず、素人考へとして、植物學者に向つて、何故、藥用植物だけを、早く、研究しないかというて、せき立てる如き態度に出てゐることである。科學の道には、自づと研究上の順序があり、準備が要り、しかして、何よりも、先づ、諸障礙が撤去されねばならぬ。我國は、就中、從來困却してゐたこの方面の眞に科學的研究機構を、整備し、充實すべく、思ひ切つた措置を講じなければならぬ。二三の先入見の如きは、いふに足りない俗見であるが、これにつけても、われわれは、國家再建、國際親善社會樹立のために、社會學の重要性を、反覆、力説する必要を感ずる。

次に、いささか、本書の改訂について、一言したい。われわれは、本書に先き立ち、社會學の體系的著述たる意味をもつて、改訂社會學原論、集團社會學原理、並びに、文化社會學原理の三部作を公にし、また、これらの著述において説いた要旨を、簡単に講述した社會學要綱を刊行してゐる。これらの諸著によつて、われわれは、現在世界的に到達されてゐる社會學、特に、理論社會學の全問題を、われわれ自身の構想と研究を中心として展開したのであるが、しかし、その後の我國內外の情勢は、わが社會の現實的に處理すべき幾多の大問題を提起して來てゐる。この情勢のもとにおいて、われわれ國民が、最も直接的に、國家的要望に應ふべきはもちろんであり、理論・研究の如きもまた、當然、その様に沿ふところがなければならぬ。こゝに、われわれ自身の得難き體驗をも盛り上げ、現時の情勢に對する國民的態度を基礎づける願ひをもつて、社會學の全理論を、この書において講述したのである。しかるに、戦局の推移は、さらにさらに、重大なる結果を招來するにいたつたのであつて、舊形態をもつては、新狀態に、十分、妥當しないことを發見し、新らたに、加筆訂正して、その缺を補つたわけである。

敗戦の慘禍は、われわれ一身上にも、多くの不幸をもたらしてゐる。東京並びに郷里の居宅は罹災し、藏書の全部を烏有に歸し、宿病を重らせ、この山間地方に疎開生活を長引かせつつある。

著者として、特に遺憾極まりないのは、昨年中公刊の準備成つた戰爭中の論策をあつめた『戦時文化政策論』（文松堂）、並びに、著者が、昭和十八年度、東北帝國大學の講義に當てた『文化理論と文化政策』（培風館）の兩著を、一は製本後に、一は印刷中罹災せることである。後者の如きはデラ刷りの首部と尾部とを、完全に喪失し、手許にトルソーとして殘骸を留むるのみとなつた。著者は、なほ、幾多、既發表、未發表の研究論文をも焼失したが、とりわけ、衷心愛惜を感じるのは、著者が年來銳意し來たつてゐた『社會進動論』千枚に上る原稿の喪失である。これは、昭和十三年度の京都帝國大學における講義内容に始まり、爾來、訂正に、加筆に、最も心血を注いだものであつた。著者は、さきの三部作を體系的に、完成する意圖のもとに、この進動論を發表しようとしてゐたのであるが、いまは、その完成の望みなきを思ひ、長歎息するのみである。たゞ、著者の社會進動に關する理論の要旨が、幸ひに、本書第九章のうちに、述べてゐるのは、ひそかに著者の喜びとするところである。

昭和二十一年 秋

信州の疎開先にて

著者

目次

緒言 戦後社会科学.....二三

戦後と日本精神の發揮.....(二三) 似而非社会科学の流行.....(二四) マルクス主義の誤謬.....(三五) 正しい意味の社会科学.....(三五) 社会科学の國家的必要性.....(三六) 自然科学と社会科学.....(三八) 社会科学の效用.....(三九) 強い意志と正しい信念.....(三〇) 近世の自然科学.....(三一) 現在と將來の社会科学(三二) 社会科学への志向.....(三三)

本論.....三五

第一章 共同生活.....三七

目次

第一節 個人と社會……………三七

○「社會的動物」……………(三七) 孤立人の生活の困難……………(三八) 孤立の結果現象……………

(三八) 共同生活……………(三九) 社會の恩惠……………(四〇) 個人の報恩作用……………

(四一) 個人と社會の依存關係……………(四二) 社會學……………(四三)

第二節 社會の來歴……………四三

東西社會と古今の社會……………(四三) 社會進化論の非なること……………(四四) 人類の

生誕……………(四四) 原始部族……………(四五) 部族の内容……………(四六) 部族から民族

へ……………(四七) 部族聯合の手續き……………(四八) 部族聯合體……………(四八)

第三節 つづき……………四九

後期部族と前期民族……………(四九) 現代民族の成立……………(五〇) 國際社會の發生……………

……………(五一) 技術の發達……………(五二) 認識の進歩……………(五三) 集團的對立の變遷

……………(五四) その結論……………(五五) 現在の展望……………(五五)

第四節 國家と民族……………五六

國家と社會……………(五六) ヘーゲルとサンシモンの觀察……………(五七) 國家概念の

批判……………(五七) 國家の社會學的概念……………(五八) 國家の重要性……………(五九)

民族の概念……………(六〇) 高度段階の民族……………(六一) わが大和民族……………(六二)

第二章 社會集團……………六三

第一節 接觸と交通……………六三

社會集團……………(六三) 全體社會と部分社會……………(六四) 集團の基礎關係……………(六四)

接觸と交通の理論……………(六五) 接觸・交通と集團……………(六六) 接觸・交通の集團

的意義……………(六七) 全體社會と接觸・交通……………(六七) 交通機關の發達と國際社

會の出現……………(六八)

第二節 集合、聚落、社會圈……………六九

- 三つの根本的集團形式……………(六九) 直接的接觸形式……………(六九) 集合……………(七〇)
- 集合の特徴……………(七三) 社會圈……………(七三) 社會圈の特徴……………(七三) 兩型の中
- 間形式……………(七四) 聚落……………(七五)

第三節 家族、隣接集團、群集、村落……………七五

- 家族……………(七六) 大家族と小家族……………(七六) 家族の集團的・特徴……………(七六)
- 隣接集團……………(七七) 隣接集團の特徴……………(七八) 〇群集……………(七八) 村落集團の
- 特徴……………(八〇) 村落の過去と現在……………(八〇)

第四節 都會、地方、公衆、全國……………八二

- 都會……………(八二) 都會集團の特徴……………(八三) 地方……………(八四) 府縣ブロック
- の問題……………(八五) 〇公衆……………(八五) 公衆の意見……………(八六) 全國……………(八七)

全國と民族と國家……………(八七)

第三章 社會過程……………八九

第一節 生活原動力……………八九

- 生活原動力の問題……………(八九) 慾望・本能關心……………(九〇) 原動力の探求……………
- (九〇) マクドゥガル説とその批判……………(九一) 本能の淨化……………(九二) 原動
- 力の分類……………(九三) 分類表……………(九四) その説明……………(九四) 相互作用すな
- はち社會過程……………(九五)

第二節 生活環境……………九六

- 環境の重要性……………(九六) 自然環境……………(九七) 自然環境の影響……………(九七)
- 精神生活への影響……………(九八) 社會の自然環境への反作用……………(九八) 文化環境
- ……………(九九) 高度社會における文化環境の壓倒的支配……………(一〇〇) 外部社會の環

境性……(101) ヴィーゼの人間行為に関する公式……(101)

第三節 社會過程の諸方面…………… 101

精神的相互作用……(101) その意味……(103) 行為の觀念……(104)

直接的社會行為(言語、政治、法律、教育等)……(105) 間接的社會行為……(106)

イ、對物行為(技術、生産、經濟、消費等)……(106) ロ、超越行為(宗教、認識、道

徳、藝術、娛樂等)……(107) 行為の相手と關係者……(108)

第四節 模倣と傍觀者…………… 107

模倣作用……(109) 模倣の事實……(110) 1. 衝動模倣……(111)

二、合理的模倣……(111) 三、優勝模倣……(112) 模倣作用の批判…… (113)

傍觀者……(113) 傍觀者の存在意義(114) 傍觀者の役割……(114)

社會生活と社會關係……(115)

第四章 社會關係…………… 116

第一節 その性質…………… 116

相互作用の結びつき……(116) 一方的行為……(116) 分裂現象……(117)

完全な相互作用……(118) 社會關係現象……(119) その三大種類……(119)

その理論……(119) 人間生活の三大種類……(121)

第二節 基礎的關係諸現象…………… 121

敵對現象……(123) 反撥現象……(123) 抗爭現象……(123) 直接的敵對

(鬭争)と間接的敵對(競争)……(124) 生存競争説の批判……(125) 上下現象

……(126) 制壓現象……(127) 承服現象……(127)

第三節 つづき…………… 126

搾取と指導……………(二二八) ニーチェ 説の批判……………(二三九) 和合現象……………(二五〇)
 協力現象……………(二三三) 親和現象……………(二三三) 親和現象の功過……………(二三三) 協力
 現象の効果……………(二三三) クロボトキンの相互扶助説の批判……………(二三三)

第四節 社會的距離……………(二三四)

基礎的社會關係間の關係……………(二三四) その推移……………(二三五) 社會的距離の問題……………
 ……(二三五) その觀念……………(二三七) 基礎的社會關係内の距離……………(二三七) その標
 準……………(二三六) 社會的距離の短縮化……………(二三九) その順序……………(二三九)

第五章 社會團結……………(二四一)

第一節 團結關係……………(二四一)

積極的團結關係……………(二四二) 全體社會と部分社會の關係……………(二四三) 一時的團結
 ……(二四三) ◯ゲマインシャフトとゲゼルシャフト……………(二四三) ゲマインシャフト……………

……………(二四四) ゲゼルシャフト……………(二四五) ゲマインシャフト團結とゲゼルシャフ
 ト團結……………(二四五) 共同社會と利益社會……………(二四六)

第二節 ゲマインシャフト(共同社會)……………(二四七)

その團結關係……………(二四七) 反感と同情……………(二四七) 共屬感情と一體感……………(二四八)
 ゲマインシャフトの原因條件……………(二四九) ギディングス説の批判……………(二五二)
 強化條件……………(二五二) 我國の一體感的團結……………(二五三)

第三節 ゲゼルシャフト(利益社會)……………(二五三)

その團結關係……………(二五三) 協同提携關係……………(二五三) 利益交換と共同利益の實現
 關係……………(二五四) ゲゼルシャフトの原因條件……………(二五五) 補足性の認識……………(二五六)
 信頼と誠實……………(二五七) ゲゼルシャフト團結の活用……………(二五八) それに對する心
 構へ……………(二五八)

第四節 集團構成……………一五九

- 構成原理としてのゲマインシャフトとゲゼルシャフト……………(一五九) 接觸・交通原理
- ……………(一六〇) それ以上の原理……………(一六〇) ゲマインシャフト、ゲゼルシャフト兩
- 原理の發展……………(一六一) 部分社會の發展……………(一六一) 現實の集團構成……………(一六二)
- 個々の集團の把握……………(一六三) 抽象的集團觀と具體的集團觀……………(一六四) テンニ
- ースの理論の批判……………(一六四)

第六章 社會形象……………一五

第一節 文化の事實……………

- 文化と文明……………(一六五) 文化は生活様式(一六六) 文化の拘束力……………(一六七)
- 制度、慣習、思想、イデオロギーの關聯……………(一六八) 文化の種類……………(一六九) 文化
- と文物……………(一六九) 文化文物間の關係……………(一七〇)

第二節 文化の生成……………一七一

- 文化の發生……………(一七一) 生活條件……………(一七二) 文化生成の原則……………(一七三)
- 個々の手続き……………(一七三) 一、衝動模倣……………(一七三) 二、試行錯誤……………(一七四)
- 三、合理的模倣……………(一七四) 四、雷同現象……………(一七四) 五、指導現象……………(一七五)
- 文化の拘束力の説明……………(一七五) 社會生活と文化……………(一七六)

第三節 文化の變遷……………一七七

- 文化の變遷問題……………(一七七) 變遷機構……………(一七八) 關心の變化……………(一七九)
- 自然環境の變化……………(一七九) 文化環境の變化……………(一八〇) 文化相互間の規定關係
- ……………(一八一) 文化の獨自的進化……………(一八二) 文化混沌期とその安定期……………(一八三)

第四節 文化の集團的性格……………一八三

- その問題……………(一八三) 異集團間の文化種別……………(一八四) 集團の文化性格……………

(一八五) 文化の集團的統一性格……(一八六) その成立手続き……(一八七) 文化
 の時代的性格……(一八七) 全體社會の文化……(一八八)

第七章 社會統制……………一九〇

第一節 集團意識……………一九〇

社會意識……(一九〇) 集團意識の意義……(一九一) 文化の集團的性格との差……
 ……(一九三) 集團意識の發生……(一九三) 集團的全體の内容……(一九四) 集團意
 識確立の條件……(一九五) 集團意識の諸方面……(一九六)

第二節 統制原理……………一九六

輿論……(一九六) 社會理想……(一九七) 集團感情……(一九八) 集團意識の本質
 ……(一九九) 社會組織……(一九九) 保守主義、革命主義、折衷主義……(二〇〇)
 統制主義生起の原因……(二〇一)

第三節 統制機構……………二〇一

社會統制の二つの場合……(二〇三) 集團意識の強制の無形態段階から有形態段階
 への發展……(二〇五) 統制機構の二つの内容……(二〇五) 集團意識の側の機構……
 ……(二〇五) 集團總力行使の側の機構……(二〇七) 主體的國家と客體的國家……
 ……(二〇七) 統制の人的機構……(二〇八)

第四節 統制と強制……………二〇九

外的強制問題……(二〇九) 統制を強制と感ぜしめない要點……(二〇九) 政治家の
 任務……(二一〇) その原則……(二一一) 國民の態度……(二一二) 政治家の權威
 と威光……(二一二) 悪い意味の獨裁制と寡頭階級制……(二一三) 文明的政治……
 ……(二一四) 眞の統制……(二一五)

第八章 集團活動……………二一六

第一節 混亂型……………三六

總體的社會過程……………(三六) 社會拘束、社會統制なき集團生活……………(三六) 混亂
 狀態の事實……………(三七) 烏合の衆……………(三七) 自由と平等……………(三八) ルソー、
 クロボトキン、ステイルナー等の說……………(三九) その批判……………(三九) 混亂型の
 集團的地盤(三〇) 國際廣域社會の現状……………(三一)

第二節 自由型……………三七

混亂型の非集團活動性……………(三三) 眞の集團活動……………(三三) 自由型の特徴……………
 ……(三三) 自由型の發生……………(三四) 自由主義の原理……………(三四) 積極的統制
 作用を忌避する自由主義……………(三五) スペンサー說……………(三六) 自由型の特徴……………
 ……(三六)自由型の缺點……………(三七)

第三節 統制型……………三七

全體主義の集團活動……………(三七) その起る場合……………(三八) その理由……………
 ……(三九) 平常の集團意識……………(三九) 非常時の集團意識……………(四〇) 我國現
 下の集團意識……………(三一) 思想的轉換……………(三一) 各國の自由主義……………(三三)
 スペンサー說の批判……………(三三)

第四節 統制主義時代の展望……………三三

現在の國家的集團活動……………(三三) 我國の集團活動……………(三四) その由來……………
 ……(三四) その效果……………(三五) 國民の覺悟……………(三六) 統制に對する心構へ
 ……(三六) 國際社會樹立の事業……………(三七) 將來の東亞廣域社會……………(三六)

第九章 社會進動……………三九

第一節 社會集團の擴大……………三九

社會は進化するか……(三三九) 社會進化論の批判……(三三九) 原始社會……
 ……(三四〇) その聯合體……(三四一) 民族と國際廣域社會……(三四二) 集團擴大
 の原因……(三四二)その理論……(三四四)

第二節 社會過程の調和……………三四五

社會過程に進歩があるか……(三四五) 集團の段階的發展……(三四五) 定初等段
 階の社會過程……(三四六) 敵對關係の克服……(三四六) 上下關係の緩和……
 ……(三四七) 上下關係の和合關係による止揚……(三四八) 和合關係内部の發展……
 ……(三四九) 社會的距離の短縮化……(三四九) 廣域社會への見透し……(三五〇)

第三節 社會形象の充實……………三五二

文化に發展があるか……(三五二) 環境條件への適應的合理化……(三五二) 外社會
 の環境的變化……(三五三) 集團的地盤の變化……(三五三) それに應ずる文化の變

動……(三五三) 文化は進動するか……(三五四) 文化の進動……(三五五) 文化の
 充實傾向……(三五五) 廣域社會の新文化の將來……(三五六)

第四節 進動する社會……………三五六

社會進動の概要……(三五六) 社會進動の分析、團結關係の密接化……(三五七)
 社會關係の親密化……(三五八) 分業化、平等化、自由化……(三五八) 文化の普遍化
 複雑化……(三五九) 文化の洗練化……(三六〇) 社會進動の綜合、叡智の進歩……
 ……(三六〇) 生活の合理化……(三六一) 生活の能率化……(三六一)

第十章 社會運営……………三六三

第一節 國內社會の復興……………三六三

社會學と應用……(三六三) 敗戦と國家再建……(三六三) 個人的、集團的生活設計
 の要……(三六四) 社會生活の道德性……(三六四) 合理的生活設計の方途……(三六六)

生活環境の變容……(二七七) 文化環境の改善……(二八八) 外社會環境の研究……
……(二八八) 生活環境への適應……(二八九) 多數決原理と指導現象の運用……(二九〇)

第二節 國際社會の建設……………二九一

國際廣域社會の展開……(二九一) 廣域社會の理論……(二九二) 帝國主義との相違
……(二九三) 今次大戰の意義……(二九四) 廣域社會確立の根本方策……(二九五)
廣域社會の現状……(二九四) 國際親善社會の完成……(二九五) 廣域社會の將來……
……(二九六) 指導國の責務……(二九六)

第三節 現實政策……………二九六

現實政策と文化政策……(二九六) 軍事政策……(二九七) 政治政策……(二九八)
經濟政策……(二九八) ゲゼルシャフト團結の培養……(二九九) ゲマインシャフト
團結の基礎づけ……(三〇〇) 生活指導……(三〇一) 生活指導の要點……(三〇二)
文化政策への要望……(三〇二)

第四節 文化政策……………三〇二

文化政策の原理……(三〇二) 言語政策……(三〇三) 教育政策……(三〇四)
宣傳政策……(三〇四) 現實政策を支援する文化政策……(三〇五) 文化政策の注意
……(三〇六) 社會研究の必要……(三〇七) 國內文化政策の必要……(三〇七)

参考文献……………三〇九

一、理論社會學……(三〇九) 二、社會學說史……(三一一) 三、文献解題その他……
……(三一九)

緒

言

戦後の社會科學

いふまでもないことであるが、今次戦争の終局によつて、我國は政治上・經濟上のみならず、文化上においても、未曾有の時代を迎へたものといはなくてはならぬ。すなはち、われわれが思想上においても一大革新をはかり、過去に捉はれない、自由なその再建を圖らなければならぬときとなつたのである。しかして、如何に敗戦したとはいへ、三千年に亘つて蓄積し來たつた傳統的日本精神が、この方面において發揮し、眞に日本人の文化・思想を復興し發展せしむべく、中心勢力として作用することが、最も期待されることとなる。われわれが、明治以來の、海外思想の安易なる紹介や、焼直し學問に停滯してゐられないのは、戦争中に得た貴い國民的經驗でもあつたからである。海外思想に學ぶ點があれば、大いにそれを採り入れるべきであるが、自主的検討を加へることこそ先決問題である、これとともに、日本独自の新思想の展開を期するといふことが要請の的となつてゐる。このことこそ、日本精神の、直接、我國戦後における社會再建に寄與するところであると同時に、遠くはるかに、將來ある國民生活に貢獻する使命を完うする

所以である、と思はれる。

以上は、今後の日本思想界に要望される基礎原理であるが、こゝにわれわれは、今日以後の社會科學の研究に關して、この基礎原理を當て嵌めて考察を下して見たい。そもそも、社會科學といへば、我國では、マルクス主義理論の理解であるかの如く、誤解されて來たつたのであるが、この誤解はまことに悲しむべきものであつた。周知の如く、マルクス主義理論は、社會の歴史的變遷が、生産力乃至生産關係の變化にしたがつておこなはれるといふ、極めて偏した唯物史觀の觀點から、あらゆる社會事象と、その推移とが説明し得る、としたのであるが、その立場は、同時に、社會運動を煽動・勃發せしめんとする意圖を藏し、直接、プロレタリア階級の手による社會革命を思想的に支援しようとするにあつたのである。かゝる意圖を持つ以上、その理論が、所謂宣傳に墮することは、當然の結果であつて、その煽動と宣傳に乗ぜられ、各國の思想界が、一般的に風靡されるといふ、一時的現象さへも巻き起されたが、不幸、新思想に對する訓練に事缺いた我國においては、それは、特に甚しい害毒を流した。かくて、思想的國難が、滿洲事變前の我國を襲つたのである。すなはち、當時においては、マルクス主義經濟學者、歴史家、ジャーナ

リストの氾濫を來たし、所謂赤の本が、讀書界を横行濶歩するにいたつた。

しかるに、マルクス主義理論は、それが如何に研究的であり、且つ科學的であると稱しても、學術上、頗る缺陷に富む學說に過ぎなかつたことは、蔽ふべくもない事實である。マルクス主義理論に根柢となつてゐる、唯物史觀そのものが、先づ正確なる社會理論ではあり得なかつた。すなはち、社會の歴史的變遷は、物質的生産力や、生産關係から決定されるといふ以外、他の精神的諸力や、文化内容によつても、ひろく制約される事實が見られる。それであるのに、このことに眼を閉ぢて、社會的・歴史的變遷を、單に物質的角度からのみ解釋しようとするのは、全然偏向した、一方的立場である。何よりも、事實にそぐはない點を、どうするのであるか。われわれは、いま、この問題に關する詳論を避けるが、讀者が、それについて深い理解を求めんとするならば、拙著、『文化社會學原理』中の「文化の變遷」以下の諸章を精讀されたいと思ふのである。

本來いふところの社會科學とは、社會諸事實に關する、眞面目な學問研究であり、特に、科學的なる、正確・嚴密な研究である。そもそも、社會事實は、人間の棲息し、生活するところに示される事實であるが、人間は、いふまでもなく、精神的存在である關係上、社會科學は、人間に

關する科學である人事科學とか、精神科學とか稱するものと、殆んど合一する。これらの科學を、文化科學と呼ぶこともあるが、その理由は、人間や、精神のはたらくところに、文化事象が、展開するからである。しかし、いづれにしても、社會科學の受け持つ領域は、人間社會事實といふいたつてひろいものにわたる關係上、その諸分野を形成する、政治・法律・生産・經濟・道德、宗教・教育・思想などについて、これらをそれぞれ、個別的に、専門的に考究する必要を生じ、政治學や、法律學や、生産・經濟の學や、倫理・道德學や、宗教學や、教育學や、思想研究等がそこに見られる。なほ、その他、これら社會諸事實を全體的に考察する、一般的・綜合的研究要求も感じられ、現代社會學は、まさしく、この要望に應へんとしてゐるのである。

社會科學の必要性は、大體、次の如き理由に基づくものである。この世界のうちに、社會事實と稱する、人間自身に極く身近かい大切な現象があり、それを研究し理解するのが、人間として生活設計を樹てる上に必要この上もないのである。人間を取巻いて自然現象があるのであるが、これは外界の環境であり物質環境として存するものであるが、これに對して社會諸事象は、人間自身作り出だす生活事實として、人間そのものに屬する。いはゞ、内的事實であり、専ら精神現象をなすものであるが、しかも、注意に價するのは、精神現象であるが、恰も外圍の自然現象の

如く一定の規律の下に行はれ、法則的なる點である。われわれは、すでに、自然現象の規律性や、法則性を中心に自然研究を進め、その認識を深めることによつて、普遍的満足を遂げるばかりでなく、それを、われわれ自身のために利用する迄にいたつてゐる。これ、自然科學の效用性であるが、この效用性は、われわれが國家や、民族を成して生活する關係上、個人的たることから、社會的たるそれにいたることを、指摘しなければならぬ。畢竟、自然科學が、國家や、民族のために、役立つ關係は、顯著であるが、研究により認識を勝ち得、進んでは現象を人間自身のためとりわけ、國家民族のために利用し得る關係は、ひとり、自然科學にのみ限定されるものでなく、社會科學にも、等しく、いひ得るところである。前にもいふ如く、社會事實のうちにおいても、規律的・法則的なものが含まれ、すでに、ケトウラーなどは、人間現象は個々に見れば自由であり、無規律的に考へられることが多いが、これを集合的・統計的に觀察・測定すれば、年々の出生率や、結婚率や、犯罪の種類や、經濟的需給關係等に例示されるやうに、みな悉く一定の規律を示し、社會法則の存することを、明らかならしめる、と説いた。このケトウラーの言葉は古いが、彼以後、社會科學は、社會諸事實の規律的法則性を、逐次、闡明し來たつたのであつて、そのうちでも、經濟法則のごときは、今日、何人も疑ひ得ない、確かなものとされて來てゐる。經

濟法則や、それ以外の社會諸法則——例へば、社會學上の集團構成の理論や、政治學上の輿論の法則や、法律學上の國家意志の究明や、倫理・道徳學上の責任・義務觀念や、教育學上の指導・訓練の基準や、宗教學上の神に關する理念や、思想研究上のイデオロギーの解釋等——が、個人としてのわれわれの生活態度を培ふと同時に、國家・民族の賴り得る、政策樹立に貢獻すること大なるもの存することは、否定し難い事實である。

自然現象の認識に關して、自然科學が、専ら、事實觀察に重きをおくことは、社會事實の研究に關して、社會科學が、そのまゝ學んでよいところであらう。近世の始め、ベーコンは、人間諸事實についても、正確な觀察を第一義とすべきであると説いたが、これはまことに貴重な言である。社會研究もまた、事實觀察に出發點をおかなければならぬ。事實觀察を尊重する態度のうち、ひとり自然科學ばかりでなく、社會科學の發展もあり得るのであるが、しかし、事實觀察によつて獲られる知識を整頓するに當つて、これを合理的に遂行することを怠るならば、脈絡ある認識とはなり得ぬ。自然科學は、その點において、遺漏のなかつたことを、賞讃すべきである。そこに、近世黎明期に、デカルトの説いた、正しい推理の要求される所以があり、これを自然科

學においてのみならず、社會科學の研究上採り來つた結果として、今日迄の社會認識が達成された。かくて、自然科學といはず、社會學といはず、事實觀察と合理的推理といふ、二重の根本方法に賴り、自然或は社會の規律性・法則性を究め、眞に信賴するに足る認識を蒐集すべきことが要請される。そこに、單に學問といふ以上の、科學研究の名にふさはしい研究態度が存する。社會科學が、社會經驗を集めた常識や、或は、觀念の遊戯である社會哲學から區別されて、最も眞剣な、眞理の探求者として存する性格なども、まことにその點にあるといはなければならぬ。

いま、社會科學が、社會諸事實の規律性や法則性を、正確な科學的方法と態度によつて捉へて行くならば、その認識の實際生活への應用の如きも、廣汎だ、と考へられる。われわれは、われわれを取巻く外界の自然現象の規律性を明らかにすることによつて、自然界を克服することが出來、これを利用し來つてゐるのであるが、われわれは、いま、われわれ自らの營む社會現象のもつ法則性を把握し、最も身近かな生活關係の理解を遂げるのであるから、それを進んで改善し、向上・進歩せしめることが、可能とされることにならう。社會の規律に無知で、社會生活を送らうとすれば、破綻は必定であり、社會法則を辨へず、社會にはたらきかけることは、徒勞に屬す

るであらう。恰も、航海者が海圖を要し、探検者が案内人を求める如く、一般社會生活者と、とりわけ、社會指導者にたいして、社會科學の研究の不可欠なる所以が、そこにある。多くの爲政者、事業家の失敗した原因は、社會科學的研究の等閑にあつたのである。しかして、生活破産者の群れが、その不幸をかこつ最大理由もまた、概して、その方面の認識不足にあつた、と考へられる。

しかるに、世には、強い意志と正しい信念とさへあれば、社會を指導することも出来、そのうちに生きること容易なり、と稱するものが絶えない。就中政治上の諸問題の處理に當つて、これに類する考へ方を採るものが、少くないのであるが、強い意志と、正しい信念が、如何なる場合においても、必要なることは、言を俟たない。これは、單なる生活者としても、世を率ゐる指導者としても、なくてはならない心構へと、態度であらうと思ふ。しかしそのやうな心構へと態度が、さらに、事實認識から強靱にバックされて、始めて、目的達成の道が、坦々たり得ることを、指摘せずにはをられないのである。屢々、強い意志を、現實社會のうちに、實現せしめて行く方途も、正しい信念を社會諸事實の改善・進歩を具現せしめる手段、方法も、當事者その人の經驗に俟つといはれるが、所謂經驗そのものの眞の意味は、事實に關する認識を指すものであつてみ

れば、事實認識として最も信頼出来る、科學的認識の重要性は、わかつて来るはずである。そして、科學的認識が、自然環境の利用の面に必要視せられる關係上、それが、われわれ自身の營む社會諸事實の改善・進歩の面に、特別要望せられることは、必至であるといふべきである。

人は、近代社會の最大特質として、自然科學の發達をあげる。自然科學の大なる進歩によつて、特にその認識が技術の面にひつく應用を見ることによつて、諸國民の生活や、國家的實力が、飛躍的發展を實現し得たのである。それであるから、這般の大戦中においても、交戦各國が、競つて自然科學の奨励に努め、それから獲られる認識を技術に移して、戦力遞増を企圖したことは、至富であつた、と見做さなければならぬ。果然、大戦の勝利者は、また、自然科學研究上の優勝國であつたのである。我國は、その研究上遅れをとり、その結果、惨敗したとも考へられる。われわれは、今後我國の平和的社會再建の道程において、自然科學の推進方を、極力努力してかゝらなければならぬ。人類自身が、近代期に發見し得た自然科學の認識を、各國にヒケをとらず、益々、促進して行くことにより、國家の實力・威信も亦、回復されるといはねばならぬ。

しかしながら、もしわれわれが、自然科學の研究のみに心を奪はれ、社會科學の認識を忘却す

るなら、これより以上の不幸は、ないであらう。自然科学と、社会科学が、あたかも車の両輪の如く、相伴つて、國運伸長に貢献することを、今日、改めて、再認識するのが緊要である。これまで、自然現象の研究によつて、自然環境の征服と利用の道が開かれたやうに、今後は社會事實の認識によつて、社會生活の改善・進歩が、軌道に乗つて、促進されるであらう。こゝに、近代文明の、自然科学的發展に對して、社會科學的完成があり得るわけであるが、この事實にいち早く目醒め、自然科学の研究とともに特に社會科學の認識の飛躍的發展を實現する國家・民族こそ、隆昌を來たすであらう。けだし、國家における政治組織と、その運営如何、經濟機構と、その能率如何、法律制度と、その施行如何、倫理・道徳性と、その昂揚如何、宗教方策と、その適用如何、教育事業と、その刷新如何、思想對策と、その處理如何等、いやしくも、精神的・文化的な、國內諸問題に關する、賢明なる政策の樹立と、その實行とが、あけて、社會科學の應用部に屬すると、思惟されるがゆゑである。不幸とも、幸ひともいひ得ることは、歐米の文明諸國といへども、自然科学の研究については、十分の關心と助成を拂つて來たにかゝらず、社會科學の認識に關しては、いまだ、深い省察と獎勵とを行ふものとは、思はれないのである。社會再建の重大時機に面してゐる我國は、こゝに、率先してこの方面の開拓に従事し、これによつて今

日、絶對的に要求される、國力回復と、國際社會の繁榮の狙ひとを、達成し、成就すべきであらう。

繰り返していふが、社會科學を、マルクス主義理論その他の、偏向する研究と混同して壓縮するが如きは、事態の認識不足も甚だしい。眞面目な學問たる社會科學は、つねに、偏頗な、一面的理論を排しつゝ、人生或は國家の眞目的に奉仕する性質を持つ。過去を振り返つて見ても、我國國有の國學はもとより、外來思想としての佛敎にしても、儒敎にしても、敢へて社會科學の認識とはいへぬが、皆、人生と國家の現實に役立つ性質のものであつた。これは、それら諸思想のふくむ若干の社會認識の賜物だつた、と稱することが、出来るであらう。正確・精密な科學的研究により、社會内外の諸事象を、分析し綜合し得るところに、適正、妥當な、積極的な對策と處置もつけ得られるのである。社會科學が、今日以後、社會再建と國力回復上、原動力たる役割を果たすであらうことは、いささか、疑ひないのである。この意味から、われわれは、ひろく青年學徒が、社會科學に關して、一段深い關心を拂ふやうになれかし、と敢へて念願しようとするものである。

本
論

第一章 共同生活

第一節 個人と社會

世の中には、個人と社會を、對立させて考へるものが少くないが、これは、大きな誤解だといはなくてはならぬ。人が社會をなして生活するのは、あたかも魚が水に生き、鳥が森に住むやうな不可分關係をなすのである。人は、社會的共同生活を行ふことなく、生き得るものではない。それであるから、古く希臘の哲人アリストテレスが、人間を「社會的動物」と稱したことは、いまもつて名言とするに足りるであらう。もし、社會なしとすれば、人は、一刻たりといへども、安らかな生活を營み得ないのであつて、魚と水、鳥と森との關係以上、さらに一層密な關係が、その間に存するのを、見るであらう。すなはち、萬一、社會をなさぬ孤立人がありとするならば、彼はどうして食料を獲るであらうか、どうして雨露を凌ぐことを得るであらうか、またどうして寒暑を避けることを得るであらうか。もちろん、その場合には、自ら食料を求め、住居をしつらへ、衣服を縫はなければならぬはずである。たとへ孤立しても、當座の用を足すことは出來な

いではないであらうが、長期に亘つては困難が續出するであらう。しかも、満足するに足る生活状態に達する望みは、ほとんど絶無としなければならぬまい、と思はれる。

孤立人の生活が困難をきはめ、不可能に近いのは、人類以外の生物との間の、生存競争から、決定的なるものとされよう。猛獸や、毒蛇の身にせまる危険を、どうして避け得られるであらうか。蟲類、バクテリアの攻撃から、どうして遁れ得られるであらうか。思へば、絶望に近いものがあらうと思ふ。われわれは、衣食住の點においても、生存競争の點においても、同類たる他の個人と、社會生活をともにすることによつてのみ、要求を充たし、試煉に堪へてゐる。殊に、文明の發達進歩の如きは、ひとへに、社會生活のもたらす賜物だと見做さなければならぬところである。人類が、この地球上に始めて生を享けた數萬年前の劫初の昔以來、社會的群棲動物として生活し來つたことは、まことに、ことわりだと考へなければならぬ。

人間の場合、孤立生活は、今日、その本性に逆らふものとさへなつて來てゐる。それゆゑ、たまたま、孤立状態に入ることがあれば、先づ、淋しさを感じ、苦しさを味はひ、さらに、孤立状態が長引くやうになれば、憂鬱症にとりつかれる結果を生ずる。昔、鳥流しが、懲罰手段として用ひられたのは、この點からいつて、理由のあることがわかるが、孤立するものは淋しさと苦し

さから、精神的打撃を與へられるだけのことでなく、それが昂じて行けば、他人戀しさのあまり錯覺や、幻覺といふ如き官能上の障碍を生じ、精神異状に陥り、本物の氣狂ひにまでなつて了ふ、刑務所の獨房につながる犯罪人が、一種の精神病者となることのあるのは、その實例をなすであらう。このことをもつても、人間と社會生活の不可分關係は、察知されるであらうと思ふ。

かくの如く、個人は社會をなして生活するのであるから、他の個人との關係が、つねにつきまとい、「人間」といふ、他人との關係をいひ含めた名稱の意味の深いことが、明らかにされよう。ドイツの社會學者、ヴィーゼが、人間間的 (zwischenmenschlich) といふことを重視したのも道理であるわけである。他人との關係、すなはち他人關係を不可避とする人間生活は、社會生活であつて、この社會生活は、また、よくいはれるやうに、共同生活とも換言出来るであらう。この社會的共同生活を缺けば、個人の生存の如きも、覺束ないのは、すでに述べた通りであつて、よく、人間の幼兒ほど、か弱い存在は、他にない、といはれてゐるが、生れ落ちた當時の幼兒はもとより、少年期に達するまでの兒童は、何一つとして、親兄弟や、周圍のもの、手厚い保護のもとにおいてでなければ、なし得ないと稱してよい。ひとり幼兒や兒童ばかりでなく、少年期や、青年期の子女の如きも、同様であつて、程度の差こそあれ、周圍の保護を與へられて生長す

るに變りがない。それも、物質面の生活がさうあるばかりでなく、精神面の生活上、特にしかりであり、このことについては、少年期、青年期の教育の重要性が、よく立證するところである。しかし、よくよく考へれば、成人の場合においても、事柄は、原則上、同様なことを、發見するであらう。われわれは、いつ、如何なる場合にあつても、社會の經濟力に依存する、物的生活を營むとともに、社會的文化の雰圍氣を呼吸し、精神生活をいとむのである。通常、このことを、國家の恩恵に浴するとして受け取つてゐるが、これは、國家が、社會のうちでも、最も重要な存在をなすからのことである。

つきつめていへば、個人がこの世の中に生れ出ることが、家族といふ社會の存在を前提するのである。祖先や、両親がなければ、わが身も亦、あることを得ない、個人は、生れ出づるや、両親、家族、親類、縁者などの、心からなる保護の下におかれ、やがて、少年期や、青年期の躰けと教育とが始められる。歳とともに、この保護や教育を授ける周圍の社會はひろげられて行き、家庭から近所隣り、學校、市町村といふふうに、社會的主體は次第に擴大するのである。單に物質生活面における、經濟的支援が與へられることだけを、考ふべきでないであつて、醫療、衛生上の保護から、軍事、政治、法律上の保障にいたるまで、廣大無邊の恩恵の手が差し延べられ

てゐるといはなければならぬ。精神生活の面にあつても、宗教、學問、思想、藝術、娛樂等の諸方面に互つて、そのことが行はれる。成人するにつれて、社會の恩恵に對して、個人自らも、また進んで、社會奉仕をしようとする考へを持つやうになり、仕事に勵み、道德をつくす態度に出るが、社會、國家の恩恵は測り知り難いところであるから、如何なる獻身的奉仕といへども、それを償ふには當らないのである。

個人は、幼年期や、少年期において、多くの場合、一方的に社會の恩恵に浴してゐるが、なかには、義務教育を終えるやいなや、實社會に勤勞するといふやうに、少、青年期から、社會奉仕のつとめに入つて行くものもある。しかし、いづれにしても、個人としては、おそかれ早かれ、社會奉仕のつとめに就くのであつて、大體、それは成年期に始まり、壯年期を貫き、現代などでは老年期に及ぶのを通例としてゐる。この成年期から壯年期を通して老年期にいたる、奉仕作用の裏においても、社會からする恩恵作用が、引き續いて行はれるのは、もちろんであるが、しかし、優れた個人の場合にあつては、これまで受けた恩恵にたまさる奉仕作用で、社會に酬めることが、見受けられる。實に、この報恩的奉仕作用の高さによつて、個人の眞の價値が、決定される、としてよからう。

とにかく成年期から老年期に及んで、個人は報恩的社會奉仕の作用に出て、これによつて個人の社會に對する反作用が成り立つわけであり、個人が社會の形成力としてはたらく事實が認められる。この個人と社會間の關係こそ、さきの、社會が個人の存在を得しめ、これを形成する關係を倒置するものであり、個人が社會を形成し、その發展を可能ならしめる新關係といふべきである。個人と社會間には、これら二重の關係が見られ、兩者は、相互依存の密なる關係に結ばれる、といはなくてはならぬ。要するところ、個人と社會は、不可分のな、一つの運命に緊結される、と考ふべきであるが、しかし、社會が個人の存在を得しめ、個人を形成して行く場合にしても、また、個人が社會に奉仕し、社會の發展を實現して行く場合にしても、もしその手続きが宜しきを得ないときには、無用の摩擦や、衝突が起らぬとは斷言できない。自然法則でさへ、時には、われわれの期待を裏切ることのあるのを思へば、われわれとして、よく社會の事實を把握し、その理論の線に沿ふて、妥當の措置をとることが、要請されようと思ふ。この意味からいつて、永く放擲されてゐた、社會研究は、今日、いたつて大切だとしなければならぬのである。

社會の研究を擔當する、社會學 (Sociology) の重要性が、そこに存する。社會學は、社會をひろく研究して、その理論、法則を審らかにしよう、とするのであつて、以下に、現在までに獲得された、その内容を概説するのも、社會學のもつ現代的必要性に應へる趣旨によることなのである。

第二節 社會の來歴

社會は、共同生活のことであるが、社會的共同生活は、すでに生物一般に見られ、人類の場合にいたつて、それが最高度に展開される。すなはち、人類共同生活は、小は家族から、大は、國家や、民族に及んで、今日、無數になされてゐるのであつて、いま、その來歴を尋ねようとする場合においても、その關聯は、複雑、多岐とならざるを得ない。したがつて、個々の社會について、一々、それを説くことは、容易の業でないことになる。こゝには、社會のうち、全體として獨立する全體社會といふものだけを抜き出し、その來歴を説明するに止めたい。それ以外の諸社會は、全體社會のうちに包含される部分社會であつてみれば、全體社會の來歴を示せば、それら部分諸社會のそれも、間接的に把握されよう、と思ふ。とにかく、われわれが、過去を振り返つて、社會の來歴を尋ねることは、社會事實を、時間の流れにしたがつて、深く考察することであり、空間的に、現在の社會をひろく觀察すること以上の、收穫を約束しよう。社會研究は、たゞ

東西の諸社會を題材とするだけでなく、古今のそれをも、考究にとり入れなければならぬ。

いまいふ如く、所謂全體社會の來歴だけを語るにしても、人類社會は人種により、環境によつて、つねに同一經過を現はすものでないことを、先づ認識しておかなければならぬ。つまり、如何なる社會の歴史も、同一變遷コースを示すものではないのであるが、これは、すでに各國の歴史によつて、證明されてゐるであらう。そこで、各國の歴史は、それぞれ個別に研究するを要するわけであつて、社會進化論と稱するやうな、單一的見解の下に各方面の社會の來歴を一筋に綜合するのは、不可能である。曾ては、進化的見解をもつて、諸社會の來歴を、一つの法則で説明しようとする企てもあつたが、その企ての非科學性は、間もなく、暴露するにいたつた。今日では大體からいつて、社會の來歴に標準的なコースを、あげ得られるといふに止まる。左に描寫しようとする全體社會の來歴の如きも、その意味のものである。個々の全體社會は、ある標準的なコースをとりながらも、その細部においては、人種の差や、殊に生活環境の差にしたがつて、限らない特殊性を示すものである。われわれは、このことを忘れることなく、その一般的來歴を點檢して行きたいと考へる。

人類は、この地球に、いつの時代生れ出でたかについては、五十萬年前といふものもあれば、

或は數萬年前と稱するものもある。たゞ、人類棲息のたしかな痕跡は、地球最後の氷河時代、すなはち、今から二、三萬年以前に溯る、とされる。しかして、その劫初の時代、すでに人類は、社會をなしたと推定される。すなはち最小規模の場合においても、家族的團體を構成したと考へられ、普通には多くの家族團體から成るそれ以上の團體を構成したと信ぜられる。かゝる原始團體のうちには、生活資料獲得の點から、定住せずに、移動をつねとするものもあつた。特に、採取經濟、狩獵經濟、就中、牧畜經濟にしたがふものにおいて、しかりであつたが、漁撈經濟、殊に農耕經濟に進んだものは、早くから、一定地域に定着したであらう。よく、原始社會が、水草を趁ふて漂泊すると見做すものがあるが、事實は、決して、さうとは限らなかつた、といふべきである。そして、原始社會は、定着することによつて、村落境の地縁的聚落形態をとるものが多かつたと、推測される。

右の如き原始社會を、ひろく、部族 (Tribe) と稱するのであるが、これはまだ文化の見るべきものを持たぬ初等段階の共同生活であることは、もちろんである。原始社會といふ外、未開社會とか、初等社會とかいはれるものが、これであるが、しかし理智的存在である人間のいとなむそれであるから、經驗と工夫によつてその内容は、徐々ながら、向上して行く。人々は、種々の

道具を發明して實際生活を助け、言語を確定して様々の觀念を作る。こゝに、物質生活のみならず、精神生活もまた開けるのである。その結果として、團體毎に、それぞれ特有の生活様式をなす、文化の芽生えが見られるやうになり、個々に、共同文化をもつことによつて、部族の生活形態が確定して來る。部族は、また、同族的な血縁團體たる意味で發展するが、それは、部族構成員が、長年月に亙り、密な共同生活をいとむ結果、諸家族間に成立つ通婚關係から、全體として血縁關係をもつやうになり、定着である場合に地縁團體をなすの他、血縁團體たる性質をば、有するにいたるのである。部族が、地縁團體たると同時に、血縁團體たる理由がこゝに存する。

これらの點で、部族が、民族團體の前身をなすことが、讀み取られるであらうが、部族は、民族に對して、團體規模の小なること、文化程度の低いこと、並びに、内部諸團體の構成の單純なること等をあげられる。部族は、最大の場合にあつても、一、二萬の人口から成り立つのみであつて、多くは、數千を數ふるにすぎない。そして、部族の有する文化は、普通、人々の肢體の延長たる意味の道具を用ひる技術や、外部との戰爭に備へる政治や、事物間の不思議な感應關係を信する認識などにつきてゐる。就中最後の、神秘的聯想に根を下ろす、魔術的宗教的思想を中心とし、これゆゑ、内部の諸團體の如きも、みな、何がしかの宗教的意味を負はされ、例へば、血

Olan

縁關係の接近する諸家族の範圍の如きは、共同的祖先を祀る團體とされ、氏族 (Olan) の名稱を冠せられる。通婚禁止範圍なども、宗教的禁制たる意味のタブーから規定される。部族内においては、地縁的、血縁的に一層密な諸小團體の區別があるが、そのうち、家族團體の如きは、如何なる場合にも發見される、部分社會の最も尤なるものである。その他、生産、經濟、思想、政治の諸活動のあることに應じて、職能諸團體も、芽生えて行く。且つ、この部族が、外部の他部族の人々を、征服や平和的手続きによつて、その内部に收容するにいたれば、階級的特徴をもつ諸團體が見られるやうになるのである。

以上述べた、部族團體が民族團體へと發展するのが、全體社會の大きな動向をなすのであるが、兩者は、一見、程度の差をなすやうに思はれながら、實際上においては、格段の質的相違を示すのである。殊に、部族形態が、民族段階へ、容易く進展する、と解すべきではない。その手続きは時間的にいつても、長年月を要するばかりでなく、中間に、種々の過渡的狀態を現はすのである。すなはち、部族のうちには、内部の人口増殖から、次々、大きな部族として成長して行き、それにとまひ、文化の向上著しいものもあるであらう。それが、永い歳月を経て、順調に行くなら、とゞのつまり、一部族が發達して、民族的社會を實現するにいたるであらう。しかし、大

多數のものについていへば、かゝる恵まれた發展経路をとるのは、稀れであつて、部族は、内部の人口増殖によるばかりでなく、外部の異部族と、繰り返し、併合統一する手續を経ることから、團體規模を大ならしめ、文化の向上も實現して行くのである。

諸部族間に見る、併合・統一の手續きを、部族聯合 (Confederation of Tribes) と稱するのであるが、この部族聯合の手續きは、多くの場合、決して平和的におこなはれるものではない。先づ、この手續きの現はれるには、諸部族が接觸するを要するのであるが、部族間の接觸の開始は、諸部族間の文化の異質と、利害の衝突を契機として、對立・敵視の關係を惹起し、鬭争現象を反覆させるのである。その結果は、強大部族が、弱小部族を征服し、征服による部族聯合に落ちつくのであつて、その際生ずる新部族聯合體の内部のこととして、新舊諸部族構成員の間に、支配・服従關係が成り立つ。この支配・服従關係は、階級的對立關係であるが、かゝる對立關係が、相互の理解と融和によつて消去せられて行くことが、また、實に、長年月を要するのである。

部族聯合の結果、舊諸部族のもつ異質的諸文化が、新部族聯合體内で對質關係を生ずることも、見易い道理であらう。そこに、特定文化が淘汰されるといふ一面、文化の相互交流による發展の途が開かれるのである。部族聯合は、團體規模の形式的擴大ばかりでなく、文化の相互補充と、

採長補短を可能ならしめ、内容的な文化の向上をもたらす。そして、これらの事實に並行して、内部諸團體も、また、單純狀態から、多元化して行くのである。すなはち、部族聯合體内には、順次に併合・統一し來たつた、舊部族諸單位と、その内部の諸區劃とが、地緣的・血緣的・職能的な部分社會として殘存すること多く、これとともに、新に成立した聯合體内の軍事・生産・經濟・宗教・政治・教育・その他の活動の必要に應じて、幾多の新職能團體が生ずる。社會階級とか、職業團體とかが、如上の殘存、新興兩種の部分諸社會中最も目ぼしい種類だといへるであらう。

第三節 社會の來歴(つゞき)

部族聯合は、たゞ一回限りのものでなく、長年月に亘つて、反復、行はれる現象であるといつたが、その結果に成る部族聯合體は、歴史上、幾重にも、無數の形態を描き出す、と考へなくてはならぬ。そして、それら無數の部族聯合體の形態のうちで、比較的に原始部族の狀態に接近するものは、部族そのものと見做して差支へないのであるが、聯合手續きを繰り返して、團體規模を大ならしめ、文化の向上を來たした種類は、これを民族段階と考へてよいのである。そこで部

族聯合體は、歴史上、長時間に亘つて見られる、無数の存在であるが、これを大別して、原始部族に近い後期部族と、民族そのものに接する前期民族といふ、二つの大きな型に分かたれるであらう。しかし、後期部族對前期民族といふこの分類は、非常に大まかなものであるから、部族聯合體は、個々の特徴にしたがひ、種々の名稱を附されることがある。フラトリー(Phratry)とか、大部族とか、部族國家とか、都府國家(Oikoumene)とか、未開民族とか、初等民族とかいふものが、その例である。そのうち、前期民族に屬するものの特徴は、文明社會と稱し得る程、内容豊富な文化を發達せしめてゐる點にあり、古代埃及、近東諸民族、印度、支那、希臘、羅馬等は、その代表をなすものであつた。

これら前期諸民族では、人々の生活經驗が、知識の啓發を得しめ、かの魔術的・宗教的思想の如きは、徐々に清算されて、實證的・科學的精神が、間斷なく發達するのを見る。この傾向は、交通機關が一段と進歩して、前期民族が、周囲の諸部族・諸民族と聯合し、また、それ自身、内部において人口の増殖を來たし、いよいよ大規模な團體を實現するにいたつて躍進する。この場合においても、事柄は簡單には考へ得ず、また、もちろん、長年月を要することであるが、結局大規模な團體範圍が確定されるところに、高度文明社會としての、現代民族が成立することとな

る。この意味からして、現代諸民族は、前期民族形態の發展したものとへるが、前期民族形態に輪をかけた、非常に廣大な團體たることを、注意しなければならぬ。その内部には、從來の諸段階から殘存する多くの團體と、新段階に必要とされる夥しい數の職能諸團體を含むことはもちろん、實證的・科學的精神に由來する技術的文化を特徴たらしめてゐる。かやうに、科學・技術の興隆があり、自然界の開發・利用が積極化するとともに、廣大な團體範圍の確定から、個人間、また團體間に、仕事の専門化による能率性が高められ、従前諸段階には見られない、高度の分業なども歸結されるのである。

かくの如く、原始部族から部族聯合體へ、部族聯合體における後期部族形態から前期民族形態へ、それから現代民族段階へ、と發展するのが、全體社會の一般的來歴であるが、この一聯の發展手續きの成り立つ所以は、部族聯合の例をもつて示したところの、團體併合・統一の過程である、といはなくてはならぬ。すなはち、二つ以上の部族が併合することで、部族聯合體が生まれ、諸多の部族聯合體が統一されて、より高度の部族聯合體が成り立ち、この併合・統一過程を反覆することから、遂に、現代民族の出現を見るのである。團體の併合・統一から、社會の發展經過の説明されること、右の如くであるが、これが過去における社會の來歴たるばかりでなく、これ

からの社會の展望をも、示唆してゐるのは、注意すべき點である。すなはち、現代諸民族は、交通關係の緊密化から、互に接觸を密ならしめ、これによつて、對立、鬭争の敵對關係を頻繁ならしめる反面、融和・統合の氣運も醸成し來たるのであつて、今日、世界各方面に彷彿たる、國際社會の問題の如きは、今後、愈々重要化する社會發展の動向といはなくてはならぬ。現在なほ茫漠たる國際社會が、民族以上の全體社會として確定を見、確乎たる組織を與へられるにいたれば國家そのものの如きもまた、從來に見ない飛躍的な段階を迎へるわけである。我國が現に直面してゐる、東亞における國際親善社會の建設任務の如きについていふも、それは、以上の見透しをもつて企劃さるべきものであらう。したがつて、この社會發展の法則のもとにおいては、曾てのヴェルサイユ講和會議の民族自決主義の如きは、明らかな時代錯誤を意味し、その失敗に歸したのは、當然と考へなければならぬ。今次大戰のあとをうけた、諸小民族の獨立運動の如きも、むしろ大民族と協力・提携して、國際的新社會の構築に、駈せ參することによつて、眞に軌道に乗るもの、と評さなくてはならないのである。

さて、われわれは、原始部族の有する文化が、人々の肢體の延長たる意味の道具を使用する技術や、専ら外部との戦争に備へる政治や、事物間の不思議な感應關係を信ずる認識に關する、制

度・慣習・思想につきるとしたが、社會の發展は外形的な團體規模に關するばかりでなく、内容的な文化の進歩によつても、また、立證されて來るのを見よう。すなはち、部族の成長、部族聯合の行はれて行くにしたがひ、部族聯合體の夥しい形態や、民族諸段階のうちに、逐次、文化の發達、向上が認められる。これは一般的には、人々が、益々、經驗を積み、生活合理化を行つて來た結果だ、と考へねばならないところであるが、内在的にこれを促進するのは、認識の進歩であり、また、外面的にこれを規制するものは、集團對立關係の變化である。人は、自らも生活上の經驗を生かし、他人の經驗をも汲みとり、次第々々によりよき文化を建設する傾向を示し、そのことは、特に技術の面において顯著なのである。肢體の延長たる意味の、道具を使用する技術が自然力を動力とする、機械の利用を主とするそれに轉じて行くのは、その顯著な事實であらう。

その間、生活經驗は、人々をして、事物の認識上、注目すべき發展を得しめることを、指摘してよいのである。すなはち、最初の時代においては、あらゆる現象が、神秘的な魔術的・宗教的獨斷から、解釋されるのをつねとするが、事物の觀察を重ねて行く間に、現象界に儼然たる規律の支配することに氣付き、その理論を捉へることを考へて來る。人類學者が、未開人類を非科學人をいふ、魔術人(Homo divinus)の名をもつて呼び、文明人類を科學人といふ意味で、技術

人 (Homo faber) とするのは、そのゆるからである。これが、別の方面からいへば、所謂「前論理的」思惟から、論理的な思惟への轉向であつて、このこともまた、長年月の間に、徐々に行はれるのは、いふまでもないが、現代民族の段階にいたつて、確定的なるものとなつて來る。實に現代民族の科學的認識の確立は、すべての生活分野を、その特質たる、理論的把握と應用の對象たらしめる。曾ては、専ら宗教的意味を付せられてゐた内部の諸團體も、いまは、實際上的存在理由を問はれて行くことなども、その結果であるとせねばならぬ。

いま一つ、社會の來歴を回顧して、大まかながら擧げられることは、初歩段階において團體的對立、鬭争の頻繁なことと、その高度段階において、それが減少して來ることである。一概にいふことはできないが、未開社會は、慢性的戰時状態にあり、これに反して、文明社會は、平和状態を常態とする傾向が觀察され、このことが、あらゆる生活面に、異つた影響をもたらすのである。初期部族や、後期部族の諸制度が、多くは、對外戰爭に備へる戰時體制に則り、これに對して、前期民族、殊には現代民族のそれが、例外的なる場合においてのみ、對外戰爭を目標たらしめ、一般的には、むしろ、平和時における、内部の國民的福利増進を旨とすることなども、こゝから説明される。

以上の敘述によつて、全體社會が、つねに、形態的に團體規模を擴大しつゝ、實質的に内部の文化を充實して發展する傾向を結論できるであらう。形態的に、社會は、部族から部族聯合體の長い長い系列を通して民族へ、そして、いまや、民族以上の國際社會へ進出する状態に達してゐる。そして、實質的に認識・技術の前論理的、乃至道具使用の文化段階から、科學的、乃至機械利用のそれに進み、今後、益々、その方向に發達するのは、見易いところであらう、と思ふ。これら國際社會の展開と、科學・技術の發達が、今日、必至の勢ひである以上、われわれも、また、その方面に寄與し、精進することによつてのみ、國民生活の意義づけられるを思はなければならぬ。

文明社會は、例外的にのみ、對外的戰爭關係に入ると、大まかに結論したが、現に、世界諸民族が直面する、國際社會の生成する當初においては、あたかも、曾ての部族聯合の場合に見られたやうな、團體間の對立、鬭争が、ほとんど必至の過渡的過程となるのである。這般の世界をあげての、大戰爭の如きは、國際社會の出現する陣痛の悩みを意味する、不可避なる先行段階と考へなければならぬ。我國が、この段階に、敗れたことは悲痛であるが、隣邦諸民族と相提携して、東亞における國際親善社會の建設と高度の新東洋文化樹立に寄與して行くところに、今後の

國家復興の最大の狙ひが藏されるであらう。

第四節 國家と民族

そもそも、世人は、現代の始めまで、國家の存在は認めるも、社會のそれに關しては、知ることがなかつた。國家以外に社會の存在を意識するにいたつたのは、フランス革命を契機とするといはれてゐる。すなはち、この革命によつて、舊制度 (Ancien régime) の打倒のために、幾度か國家構造は改革されたが、フランス國內事情は、この改革によつても、さしたる變化を來たさなかつた。國家構造は變更せられたものの、内部の實際生活には、見るべき改善が、示されなかつたのである。そこに、古く抱かれてゐた國家觀の動搖する根據があつた。すなはち、すべてが國家に屬するものなら、國家の改革は、内部の積弊を一掃すべきであつたのに、それは革命によつても、舊態依然として殘存するのであつて、そこに、大きな疑問が生ずるやうになつたのである。この疑問に對して、當時の思想家ヘーゲルは、フランス國家が、まだ眞の國家形態を完成してゐない點をあげ、その内部が「市民社會」と稱する、無規律状態にあることを指摘した。こゝに展示されたヘーゲルの社會觀においては、社會なるものが「家族」といふ道德的團體に對する

不道德な反對の存在なること、したがつて、それは辯證法的に、「國家」といふ眞の倫理形態に綜合・止揚さるべき過渡的段階にすぎないといふにあつた。

ヘーゲルによつて、社會が「市民社會」の名のもとに、はじめて取り上げられたのは、事實であるが、それが否定の意味で考察されたのも、また、事實である。しかるに、フランス革命を身をもつて體驗した、他の思想家、サン＝シモンの與へた解答は、それと異なる。サン＝シモンは、國家構造の基礎をなすものが、社會であるとしたのであつて、社會こそ基盤 (Fond) であり、國家はその上に構築される形式 (Forme) に他ならないとした。したがつて、國家形式を如何に改革するも、その改革が社會的基盤に及ばぬかぎり、實際上の積弊の殘留するのは、當然だ、としたのである。さきのヘーゲルの見方に比して、サン＝シモンの説明が眞理をいひ當ててゐることがわかるであらう。そこで國家に對して社會を云々するものは、今日といへども彼の考へ方をそのまま踏襲し、社會をもつて國家の基礎の上に構築される政治構造と見做すのである。

ヘーゲルや、サン＝シモンによる、新たな社會の認識を「社會の發見」と稱してゐるが、しかし、所謂「社會の發見」で得られた、國家以外の社會といふ觀念は、理窟は一應通るにしても、國家を單なる政治構造と見做して了ふ點で、普通一般の國家概念を裏切るものではなからうか。

世上の通念によれば、國家は政治構造をよむ團體なのであり、そのうち、政治構造だけをそれとしてゐなかつたのである。國家を政治構造だけにかぎり、その團體たる方面を社會と見做すところに、サンシモンSancti Simonの説が成り立つが、その見方には無理があらうと思ふ。外國流に、國家を政治構造や、或はそのうち政府のみに限定してふなればとにかく、我國などの傳統的解釋からしても、國家は各種團體のうち、最も優れた團體であり、かゝる優れた團體として、特に政府その他の政治構造を包含する特性をもつものである。

社會と國家の異同と、これら兩者の關係は、右によつて一先づ答へられたが、國家が社會の一つとして有する、その優れた點は、何であらうか。前にいふように、國家が政治構造を包含するのは、その一大特性だといふべきであるが、社會學的には、むしろ、その結果、如何なる他の團體にも認められない、生活範圍の外部を限界づける特質を、あげなければならぬ。これは、具體的にいへば、國家範圍がわれわれ國民の最も確定した生活分野であることを意味し、諸多の團體は、この國家範圍のうちに存し、たまたま、それをはみ出る國際諸團體が発生しても、それに足りない微弱なものであることをいふ。われわれ日常の經濟生活や精神生活が、如何なる範圍を座として行はれてゐるかを顧み、國際労働者團結や、國際聯盟の不安定な事實を見れば、その點は

よくわかるであらう。國際的に力強い團結、例へば、同盟關係とか、通商關係とかをとつていへば、それには、みな、關係諸國が、それぞれ生活範圍の外部的限界性を、自主的に、緩和した場合に他ならないのである。國家が、かくの如き、外部的限界性を特質たらしめる團體であるのは、國家の確立、強化が、如何に、内部の國民各個の存在と生活安定のため必要缺くべからざるものであるかを説明しよう。また、この國家のみの有する特質は、内部の國民生活を統一的にいなませる結果として、生活の一定化、すなはち、生活様式の確定をもたらし、こゝに、制度とか、慣習とか、思想とか、ひろく文化と名づけられるものを生成せしめるのを見るであらう。物心兩方面にわたる、國民文化の存立が、この點から理解されようと思ふ。もちろん、國家以外の團體においても、それぞれ、團體生活のいとなまれるところに、その所産として、生活様式たる特有の文化が、生ぜぬことはないが、國民文化に比すべきような、確定形態が、滅多に他におこらぬ理由がこゝにある。

しかし、國家の團體としてもつ、外部的限界性も、統一的國民文化の所有も、畢竟するに、國家の有する政治構造に基づくことを、思はなければならぬ。政治構造とは、團體が自己の構成員たる人々をはじめ、内部の團體や、文化にたいして、それらを取り締るためにもつ統制手段を

指さす。主権者、議會、政府、官廳、法律制度の存在などが、それであるが、他の如何なる種類の團體においても、國家に見るやうな、これらの諸存在の確定してゐることを認め得ないであらう。しかも團體生活はしばしば多種の構成員や、外部に競争團體があることによつて無規律、不安定に陥り易い點があるのであるから、それを防止し、生活の順調に行はれんことの保障のために統制手段は、常に必要この上ないのである、われわれが、國家において、優れた政治構造の存在することに對して、感謝と敬意を表すべきは、至當のことといはねばならぬ。

次に民族であるが、民族とは、今日、數百萬から數億にもぼる民衆の構成する、共同文化を有する大規模の團體をいふのである。例へば大和民族、支那民族、アングロ・サクソン民族、スラブ民族などといふ如し。かゝる民族が個々に共同文化を有するといふことは、それぞれ、生産・經濟・風俗・言語・宗教・文學等に互り、固有の制度や、慣習や、思想の持主なることを、意味するのであるが、しかし、全體として統一ある政治構造を有することを、條件たらしめないのを注意しなければならぬ。すなはち、民族は、統一的な政治構造をもつていたれば、國家として認められるやうになるのであつて、國家をなす場合にあつても、他と異なる共同文化を有するかぎりにおいては、なほ民族と稱し得られる關係がつき纏ふ。われわれ國民が、日本國家を構成しつゝ、

觀點をかへれば、同時に大和民族をなすことが、その關係を示すであらう。

かくて、國家の重要性を認めるものは、民族の意義にもまた、徹しなければならぬところであるが、こゝに一つ、民族が共同文化を所有する團體たることから、この共同文化の所有が、民族構成員相互を非常に緩和させ、親和の賜物として文化の共同性をますます深めるとともに、構成員間の通婚關係を促進し、人類の統一を結果するといふ事實を指摘しなければならぬ。民族的文化共有と、人種的統一とは、ほとんど並行現象であり、これによつて、長年月に互つて、民族的生活をともにするものの中に、同一人種であるといふ信念と、それに基づく種族的團結力が作用を見るやうになる。この段階にいたれば、民族は、單なる共同文化のみを紐帶とする文化團體でなく、血液を等しうする同一種族のなす血縁團體として、鞏固に發展して行く。民族をもつて、血縁團體なりとするのは、この高度段階の存在を考へるからであるが、その見方も、そのかぎりでは誤つてゐない。たゞ、その事實は、どこまでも、民族的存在からする結果現象なのであるから、民族を最初から、種族的血縁團體ときめてかゝるのは、誤りであらう。現代米國の如きは、いまだ同一種族のなす血縁團體たる事實がなく、人々の間にその自覺の如きも存しないにもかゝらず、彼地特有のアメリカ文化の共有は、すでに、民族形成過程に入つたものと見做さなければ

ばならないのである。

わが大和民族が、三千年の永い歴史を通して、種族的血縁團體の代表型をなすにいたつてゐるのは、もちろんである。我が大和民族の場合にあつても、多少の異種族を吸収し來たつてゐるのは、たしかであるが、もともと同一種族の増殖が中核體をなし、夙に高度民族段階の完成を見たのは何より氣強い事柄であらう。

第二章 社會集團

第一節 接觸と交通

社會を研究する場合、われわれとして、先づ第一に、社會生活の行はれる範圍を考へるのが必要である。社會生活の行はれる範圍といへば、それが團體なることを、誰しも氣づくであらうが、その團體範圍を考へるのが、肝要なのである。われわれは、社會生活の行はれる團體範圍を、ひろく、社會集團 (Social Group) と概念しよう。かゝる團體範圍、すなはち社會集團を考へるなら、それは國家であり、民衆だといふであらうが、國家や、民族の團體範圍は、なかなか廣範圍であつて、それら廣範圍のうちに、都會、村落、家族とか稱するやうな、無数の諸小團體範圍の劃されるのを見出すであらう。それも、ひとり、國家や、民族内部にかぎられるのでなく、國家や、民族の外部に社會生活の延び行くにしたがつて、國際的な團體範圍もまた發見されてくる。宗派や、思想團體や、學會などから國際的カルテル、トラスト、シンヂケート等といふ經濟團體にいたるまで、現代では、それが多數にのぼるのである。國家間の同盟や、通商關係なども、數

ヶ國をアロックとする外交、經濟上の團體範圍をなすものと見做せるであらう。

國家や、民族といふ如き、大規模な團體範圍の形成するものは、全體社會として、それらの内部に特殊の小範圍を劃する村落・都會・家族等々に對して、自ら別個の取り扱いをして行かねばならぬ。すなはち、後の種類は、みな、部分社會であるが、全體社會は、部分的社會に比して、遙かに主要性を認められるがゆゑである。しかし、前にもいふやうに、全體社會たる國家や、民族といへども、現代ではあらゆる社會生活を、その範圍に包括しつくしてゐるものでないことは、國際的諸團體の發展に徴して、明らかなるところであらう。

さて、團體範圍、即ち社會集團として、全體社會とか、部分社會とか、また、具體的には國家、民族、村落、都會、家族等々が數へられるが、それらすべての集團を通して、その範圍が、一定種類の社會生活をいとむ人々をもつて形成されるのは、いふまでもないであらう。人々が、特有なる國家生活や、民族生活や、村落生活、都會生活、家族生活等をいとむうちに、國家や、民族や、村落、都會、家族等々、個々の集團範圍が區別される。しかし、こゝに、社會範圍を形成する人々にあつては、彼等が先づ互に接觸し、交通する關係に立つことが、前提條件をなすことを、指摘しなければならぬ。けだし、人々が相互に接觸し、交通し得るのでなければ、如何なる社會生活も、彼等の間に、あることを得ず、したがつて、如何なるその範圍も成り立たざるをもつてである。互に接觸することなく、交通することもなければ、交際も、取引も、教育も、感化もあることを得ない。そこには、鬭争もないかほりに、相互扶助もなければ、支配・服従といふやうなこともあり得ない。人々の間は、社會的に眞空状態であつて、相互交渉を意味する社會生活は生じ得ない。社會生活の展開は、かゝる相互無關係の状態においてなく、實に、その逆をなす、相互有關係の状態においてあるが、相互有關係の状態は、人々が互に接觸を起し、交通可能なところに、はじめて開ける。そこで、人々の接觸、交通が、社會範圍たる社會集團の、最も基本的關係であることが、分かるであらう。

われわれは、この意味から、社會集團の第一原理をもつて、人々の相互接觸、交通關係なりとするが、接觸といひ、交通といひ、事實は、全く同一現象を指すのである。人々が互に接觸するといふのは、彼等が、極く接近して交通するのを意味し、一方、人々が交通關係にあるといふのは彼等が距離をへだてながらも、なほ、なんらかの手段に頼つて、接觸状態にあることをいふ。すなはち、そこに、直接・間接の差はあるも、ともに、人間間の行爲の傳達關係を指さす點で一致してゐる。一體、行爲は、近ければ言語や、態度や、身振りをもつて、直接、相手の感覺に訴

へられ、行爲に隨伴するところの事物も、媒介なしに手渡し出来るが、離れた場合においては、文字や、使者や、郵便・電信・電話や、ラジオといふ如き通信機關に頼るか、さもなければ、道路・橋梁・船車・鐵道・電車・自動車、航空機といふ如き運輸機關を用ひて相手に近づき、行爲に隨伴する物も、同じ運輸機關によつて運搬することをしなければならぬ。この傳達作用の媒介物たる通信機關や、運輸機關の大切なものは、もとよりであるが、しかし、これらの媒介物は、もともと、言語や、態度や、身振りをもつて、直接相手の感覺到訴へ、また事物の手渡しをなすことを、距離の障壁を克服して、遂行してゆく手段であるに他ならない。こゝに、直接的な接觸關係が、間接的な交通關係と、理論上、同一事實であることが、理解できよう。

さて、社會生活の行はれる集團範圍の基礎に接觸乃至交通關係の必要なることを説いたが、人々の間に、逆に、この種の行爲の傳達關係が生ずるとき、彼等の間に、社會生活が展開し、集團範圍が劃されるといふことが出来る。例へば、路傍の人々が、見世物を取巻いて接近し、接近することと接觸状態に入れば、そこに群集生活がおこり、群集といふ集團範圍が成り立つ。交通關係の發達によつて、遠隔の地に住む人々が、新たに、交通關係に入り來たる場合においても、事柄は同じである。これまで、交通困難の事情から、經濟的取引も、精神的交渉もなし得なかつた

人々であるが、いまは、商取引も思想の交換も、自由に行ひ得られ、交際も、教育も、相互扶助もなすことが出来る。これによつて、鬭争や、競争の事實もあらはれ、支配・服従の現象等も生ずるであろうが、これこそ彼等の間に、社會生活が全面化した證據であると見做されるであらう。そして、この新たな社會生活の展開のあることにより、集團範圍が、その行はれる限度まで、擴張されるといふ事實を見出すにいたる。地方的に局限された集團範圍が、全國的なそれらまで、擴大される現象である。

畢竟、社會生活の行はれる集團範圍は、接觸・交通關係に立つ人々の一團を意味し、接觸・交通關係にある人々の一團は、まだ社會生活の展開する集團範圍をなすといはねばならぬ。そこで社會集團問題は、先づ、人々の接觸・交通關係を基本として考察されてよいのであるが、この意味から事實を考究すれば、次の如き諸事實を明らかならしめるであらう。

最初に、全體社會の集團範圍であるが、その組織の實例である部族や、部族聯合體や、國家や、民族のすべては、いまだ交通機關が未發達状態に止まる間、多く、人々の直接的接觸による集合形態に停止し、それ以上の集團形態をなし得なかつたのである。家族や、會合や、集會といふ如き密集状態がそれであつて、就中部族一般の集團的特徴が、そこに見られる。なるほど、部族内

の部分的社會はこの集合状態を反覆してゐるだらうが、全體として、部族そのものは部落といふ如き形態をとるものであり、決して純粹の集合状態をなさぬ、といふ觀察もあるであらう。だがおよそ部落形態とは、人々がいつでも、容易に、集合し得る關係であつて、換言すれば、人々が日常、直接的接觸を反覆し得る生活範圍をいふものであつてみれば、部族そのものも、實際上はある種の集合状態に止まること、理解されようと思ふ。

そのこととともに、交通機關の未發達段階においては、右にあげた、一種の集合状態たることを眞相とする部落状態以上の大規模なる全體社會の成立の困難なることを、想像しなければならぬ。直接的接觸の可能な範圍が、集團そのものの規模を限定し、かくの如きものとして、部落状態が、部族の集團範圍を代表するのである。部族は、やがて、他の部族と部族聯合をなすにいたるが、それには二つ以上の部族の人々が、直接的接觸の可能な近距離内に接近して來るか、或は、初步的交通機關が發明されて、當該部族間に、間接的交通の道が開かれるかによる。部族聯合體の長い系列を通して、集團範圍が、逐次、擴大されて行くのは、専ら、交通機關の進歩によつて、間接的交通關係が、それに單位となる部族や、部族聯合體間に開けて行くからのことである。かくて交通機關の發達にしたがひ、ますます高度の部族聯合體が形成され、その結果、前

期民族が生じ、前期民族の高度諸段階も、同じ手続きの反覆から實現され、最後に、現代民族が確定されるといふことになる。かくして、民族は、現代交通機關の發達による、高度の間接的交通關係を基礎たらしめてゐるが、發達して止まぬ交通機關の國際的施設は、いまや、世界各地に國際社會といふべき、廣大無邊の集團範圍を實現しようとしてゐる。東亞における國際親善社會が、その一つであるのは、いふを俟たないところであらうと思ふ。

第二節 集合、聚落、社會圈

接觸と交通、つまり、人々の行爲の傳達關係が、集團範圍の基礎に存し、接近した直接的接觸の傳達關係から集合や、部落が生じ、距離のある間接的交通の傳達關係をもつて、擴大された民族集團などの成り立つ所以を説いたが、こゝに、同一事實を檢討して、接觸と交通に基礎をおく社會集團に、三つの根本形式の分かれたるのを示さうと思ふ。

直接的接觸による集團範圍として、原始部族や後期部族内の家族や、集合や、會合等を例示したが、これらは、ひとり、部族的集團内部のことにだけ限定されないことを、最初に認めておく必要がある。すなはち、初期民族や、現代民族のうちでも、家族もあり、集合もあり、會合も見

られ、なほこの他、群集・教室・講演會・旅行團等々があるのであつて、みな、直接的接觸を基礎たらしめる集團なのである。たゞ、部族一般の特徴は、かゝる直接的接觸を基礎たらしめる集團たる以上のものを有せざるにあり、これに反して民族的存在においては、それ以上の間接的交關關係から成る集團種類に富むのである。會て、ルソボンが、現代は群集時代であるといつたのに對し、タルドは反對して、過去においてこそ直接的接觸の群集時代があつたが、現代は、むしろ間接的交通を特徴とする公衆時代であるとしたのは、一層たしかな觀察だとしてよいであらう。しかし、ルソボンの觀察した如く、現代にあつても、群集といふ如き、直接的接觸關係に基づく集團の種類は、なほ夥しく存在してゐるのが事實である。

これを要するに、直接的接觸狀態の集團形態は、社會の全來歴を通して發見されるのであつてわれわれは、それを一括して集合と概念するを得るであらう。家族とか、集合とか、會合とか、群集とか、教室とか、講演會とか、劇場とか、みなしかりである。これら集合と呼ばれる諸集團の基礎は、それに参加する人々の面接的な行爲の傳達關係であつて、相手に對し、直接、言語、身振り、態度等をもつてはたきかけ、相手もまた、なんら間接的な手段によらず、それを五官に感覺し、受容する關係である。能動的傳達者の側は、肉體に具はる表出諸器管によつて精神表

現を行ひ、受動的被傳達者の側も、同じく、肉體的に具はる感覺諸器管を通して、それを精神内部に受け取る。そこに、肉體的表出器管と同じ感覺器管の近接關係、即ち肉體的密集關係が存するのであるが、これら肉體的表出器管も、その感覺器管も、一定の距離を隔てるならば、行爲傳達作用を相手に届かせ、またそれを相手から受け取ることが不可能とならう。音聲は百メートルを隔てれば聞えず、肉眼は一キロの距離においては、相手の態度を辨別し得ない。平均的にいへば、肉體的表出も、五官の感覺も、略ぼ十メートルをもつて、その有效限度とするであらう。したがつて、その限度のうちにおいてでなければ、集合は眞に實際上の意味をもつ集合とはならないのであつて、群集や、集會等の團體規模が、こゝから規定されて來る。そして、それ以上、團體範圍を大ならしめようとするれば、よく講演會や、劇場に見る如く、特殊の音響裝置や、照明手段を必要たらしめるであらう。或は、軍隊などに見る如く、班或は小隊を集合形態として作つておき、それ以上の中隊、大隊、聯隊等の運路には、傳令とか、電話とか、文書等の交通手段をもつてする他はない。集合が、かくの如く、一定規模に制限される結果は、それに屬する人員數なども限定されて來るのであつて、グラハム・ワラスが、群集が、普通、二三十人から、高々、數百人を數へる集團に過ぎないとした、眞の理由が、考へられるのである。

社會圈

（二）交通機関

集合の團體規模の制限といふ事實とともに、集合には、恒久的存続性のないことをあげてよからう。何分、集合は、構成員間の密集關係を前提するのであるから、人々がこの密集状態において永く生活し得るならばとにかく、實際上においては、彼等が、日常必要な仕事や用事のため屢々、その状態から離れることがおこり、その度毎に、集合そのものは、解消せざるを得ないのである。クルドは、群集について、その一時的存在性を注意した學者であつたが、その観客はひろく集合一般に妥當し、その理由の如きも、いま、明らかとなつたのであらう。集合中群集の如きは、所謂群集心理の虜となり、亂暴狼藉をはたらくことがあるが、その取締りとして有効なのは群集の解散の機を狙つて、それに屬する一人々々を説諭し、反省せしめる方策なのである。

さて、直接的接觸をもつてなる集合形式に對するものは、間接的交通による諸集團であるが、この形式を、一般的に、社會圈と稱することを得よう。社會圈としては、前期民族から現代民族にいたるまでの、民族全體が何より好例となるのであるが、その他、地方とか、都會とか、殊に現代都會とかが、その例となるであらう。これらは、みな、交通機關を手段とする行爲傳達關係に基づく集團たる點で一致し、たゞ、その傳達關係の限界や、程度の差にしたがひ、範圍の取り上げ方が違つてゐるだけである。今後において發展しようとする國際社會が、また、社會圈の

廣大な一種類をなすことは、銘記してよいところであらう。國際的交通關係の發達に伴ふ、國際社會の急激なる發展こそ、來るべき時代を表徴するものなのである。なほ、われわれとして注意すべきは、この社會圈の形式を、よく「社會」といふ言葉をもつて簡單に呼び慣らすことであるが、しかし、これを單に、社會といふのはまぎらしいから、われわれは、より正確な、社會圈の名稱をとらうと思ふ。

社會圈は、遠距離に達する通信機關や、運輸機關を媒介たらしめる、行爲傳達關係を基礎とする點からいつて、もはや、團體規模の限定もなければ、それに收容される員數の制限も存せぬ。そのことは、現代都會や、これからの國際社會の例をもつて、推測することが出来るであらう。たゞ、遙かな將來のことをいへば、社會圈が交通機關の發達から如何に無限に擴大されて行くとしても、地球表面以上を掩ふといふことは想像できないところであつて、それは、人類接息地域たるこの世界を限度とする考へなければならぬ。集合形式に對し、社會圈には、以上の特徴が看取されるが、いま一つ、指摘してよいのは、集合の一時的存在性に對し、社會圈が、永續性を有することである。すなはち、社會圈に基礎となる間接的交通關係は、通信機關を手段とする場合は、人々を居ながらにして結びつけ、運輸機關を媒介とする場合においても、人々の間歇的接

觸で事足りるやうにしてゐるのである。この理由からして、人々は安んじて、永く同一社會圈に身を置くことを得るのであつて、結果において、社會圈の恒久性が認め得られることになる。

かくの如く、社會圈は交通機關を基礎に成立する集團形式であるが、交通機關のうち通信機關を手段とする限りにおいては、人々が遠距離において交通するのであるから、直接的接觸關係を基礎たらしめる集合に對し、全的對立をなすが、それが運輸機關を仲立ちとする場合では、人々は、この運輸機關により、相手に接近し、相手との間に直接的接觸を作為する關係であつて、集合形式を反復するまでであつて、對立は根本的とはいひ難くなる。いな、それは、集合形式を時々繰り返す状態であるといつてもよいものであらう。もちろん、このことあるゆゑに、社會圈の集合に對する理論上の區別を撤廢するには及ばないが、しかし、兩者の峻別が少しく緩和さるべき點は、認めなければならぬ。しかるに、この觀點からするとき、かの部落と稱する集團は、興味ある中間形式をなすことが知られ、通信機關による關係でないことはもとよりであるが、構成員自身の日常容易な歩行的移動によつて相手に接近し、相手との間に、直接的接觸を作為する状態なる點を注意するとき、この肢體をもつてする特殊の運輸關係にもとづく部落集團が、一般運輸機關を媒介たらしめる社會圈の種類に、ある一致點をもつことが、わかつて來るのである。し

かし、この一致點は、また、兩者の差異とも考へられるところであるから、集合、社會圈に對し部落の如き集團は、特別型と見て、聚落として分類してよからうと思ふ。かくの如き、聚落そのものは、人々の日常容易な歩行的移動關係に基礎をおくものであるが、人々の日常容易に行ふ歩行的移動距離は、經驗上、大體、半キロと見做される關係上、聚落の標準規模は直徑一キロ以内と計算され、これは、また、事實に合することを發見されるのである。なほ、この聚落が、社會圈に等しい恒久的存在性を立證するのは、その基礎關係が社會圈のそれに理論上一致するところから了解される事柄であらう。かくして、この聚落形式は、原始時代このかた、われわれ人類のいとなむ集團として、最も親しみのある形態をなしたといふことが出来る。

第三節 家族、隣接集團、群集、村落

われわれは、集團範圍として、集合、聚落、社會圈の三つの形式の分れることを説いたが、ここに、實際上且つまた歴史上、重要と思惟される若干の具體的集團種類を取り上げ、その例示を行ふとともに、それら重要諸集團の内容を説明することとしたい。先ず、家族から始めるであらう。

家族とは、男女の夫婦生活を中心に、その他、共同經濟や、子弟教育を行ふ集團であり、そこに生れる子女との間の親子關係も組み入れてゐる。そこで、親子關係のみの場合でも、家族の觀念が樹てられることになる。要するに、夫婦や、親子の生活の行はれる集團であるが、夫婦や親子が共同生活をなすことが人類本來の傾向である關係上、家族の始源は人類そのものとともに古いといはねばならぬ。夫婦や親子が原則として集合形式をとり、生活をともにするところに家族があるが、そのうち、夫婦生活よりも親子生活が、家族の中心をなした歴史的事實があり、また子が子を生む自然の事實にしたがつて、家族の構成員は數世代のものをふくむにいたることがある。その場合、子々孫々の配偶者も、また、入つて来るから、人員は、時々、百、二百に上ることがさへある。これを、大家族と稱する。しかし、餘り多數の員數を擁することになると、夫婦生活や、親子生活を密ならしめることが出来ない點があるので、事情の許すところに、員數の限定がなされ、先づ男系、或は女系にしたがふ家族構成を見、次に、相續者以外のものは、成人するとともに去家する風習を生ずる。大家族は、その結果、小家族に縮少するのであつて、我國現在の家族などは、男系小家族をなしてゐる。

家族は、夫婦生活や、親子生活の行はれる集合形式の集團であることをいつたが、この集團の

構成員は、たゞ同じ屋根の下で共同生活をいとなむばかりではなく、この共同生活が、極く濃密な親愛關係に基づくことは、いふまでもなからう。夫婦や、親子が、親しい感情をもつて相寄るところに、集合的集團形式もまた生ずる道理であつて、家族の家族たるは、かゝる感情的融和關係を本とし、これに加ふるに、經濟の面や、子女教育の面で、意志的協同關係をなすものといはねばならぬ。家族のいまあげた感情融和關係が、家族以上のひろい同族團體にも、程度の差こそあれ發見され、特にわが民族全體の間に、皇室中心にそれが行なはれてゐるのは、家族國家の稱ある所以である。

隣接集團とは所謂向ふ三軒兩隣りの近所仲間であるが、しかしそれが、それだけの範圍に限定されないことは、その實際から知られるであろう。隣接集團は一種の集合ともいへるし、また見方によつては、小聚落とも考へられるであらう。要するに、接近して生活する人々が、直接的接觸や、歩行的接觸關係をもつて、近々しい共同生活を行ふ集團をいふのである。それは、家族と異り、血縁的同族團體たる點は存せず、専ら、地域的接近によつて集團をなすのであるから、集合、乃至聚落の純粹型を示す。しかし、接近して生活する結果、また、接近して生活するだけにかの感情的融和關係も具備することは當然であつて、これは、特に、田舎の隣接集團の場合にお

いて顯著である。都會の隣接集團は、それ程でないが、田舎のそれは、仕事の上において、協同提携關係をも十分ならしめてゐる事實を見よう。農事の手傳ひ、冠婚葬祭の際の協力、商賣上の便宜の提供等がそれであるが、すべて、理論上には、意志的協同關係と稱してよいものである。都會においては、この種の關係は一般に缺如するが、統制經濟の下では、物資の供出、配給などにおいて、この協同關係が増進したのである。

隣接集團が集合、乃至聚落形式の集團であること、これがやがて感情的融和と意志的協同關係を附け加へて、集團的存在を固うする、家族以上の公共的性質の集團をなすことは、これを社會統制に利用しようとする施策を生み出した。封建時代の五人組制度は、こゝに發生の端緒を見たのであつて、これはひとりわが國のみならず諸外國にその例を見るであらう。最近でも、隣接集團を、この意味から活用しようとしたところに、その協同・提携關係の如きも發達させられて來たのである。

群集もまた、集合形式をとる集團であるが、家族や、隣組などと異り、最も純粹な集合性を示してゐる。群集とは、街頭、空地等に蝟集する人々の集りをいふ。群集にあつては、感情的融和とか、意志的協同關係は極少である。これ、群集の構成員が、街頭・空地に、隨時集つて來る雜

多な分子から成り立つことを普通とするからである。しかし、群集の人々も、見せ物とか、出來事とか、共同の興味あるものを取巻いて集ること多く、共同の興味を抱く點において、幾分かの感情的融和關係が芽生えてゐることは事實である。群集は、これらの意味で、積極的行動の集團でないといふが、しかし、なんらかの事件が、群集の人々に刺戟を與へるならば、人々は立ちどころに、之れに反應して、積極的行動に出づるやうな意志的協同關係を生ずべき態勢だけは持つてゐる。通例群集心理と呼んでゐるのは、刺戟に對する反應作用を生じ、すでに積極的行動に出づる意志的協同關係に立入つた群集人の態度についていふ。群集は、集合として、多數のものが密集する集團であり、その状態において、相互刺戟による感情の昂奮と、多數のうちに隠れる責任感の喪失とは、如上の群集態度をいたつて輕率盲動化する。その點こそ、特に群集心理として、指彈されるものとなる。群集に参加する場合において、かゝる輕率なる態度に陥ることを抑制し、自重を要することは、述べるに及ばぬところであらう。

群集が群集心理の虜となつて輕率盲動する場合に、破壊作業が行はれることがいはれてゐる。例へば、革命群集の如き、それであつて、最も警戒を嚴ならしめなければならぬ。群集の前にあげた感情の昂奮性は、冷靜な判斷を缺いて、指導者の鑑別などをも誤らしめ、無責任性の支配す

ることによつて、煽動者のみ幅をきかし容易に彼等の宣傳に乗るのであるから、この點もまた、群集關係の問題として、自省し警戒を要するところである。

村落にいたつて、隣組に見られる半聚落形式が、完全なる聚落形式に進んでゐるのを發見できよう。村落は、聚落そのものの代表型といへるが、しかし、大きな村は、廣表數キロ四方に及ぶことさへあり、かやうなものは、實際上、聚落ではなく、多くの聚落群なることを事實とする。すなはち、その場合では、村落内の部落や、區や、字などといふ單位が、實際の聚落であり、村は、數多の聚落單位を抱擁する社會圈であるに過ぎない。大きな村のこの性質は、町の場合に、さらに顯著となるであらう。町が街區や、通りといふものに分かれることは、それらのものが、聚落單位を代表するからだといはなければならない。しかし、街區や、通りも、廣きに過ぎれば、さらに、一層小範圍の區劃や、丁目に分かれたれ、それらが聚落形式を満足するといふことにならう。

かくて、所謂村落は、聚落形式と社會圈とに跨がる集團だとしてよいが、普通、永い年月、同一村落に住む人々の間においては、自然と感情的融和關係が濃密となり、意志的協同關係もまた發達して來る。いづれかといへば、前者の關係が深められて來るのであつて、これが、人情の醇

朴といふふうに表示されるのである。人情の醇朴といふこのことは、まことに村落の美點であるが、仕事や、業務の上において、相互の提携を十分ならしめる意志的協同關係を確立することは今の村落に大いに要望されてよいものやうである。すべて、意志的協同關係なるものは、ハッキリした目的の下に、舊弊を排し、情實を遠ざけ、諸事萬端を合理的に處理しようとするにあるのであつて、村落集團の實狀は、まだ、その點で十分ならざる場合が多いと考へられる。

田舎の村落も、今日では、全國的な社會圈の構成要素となつて來てゐる關係からして、全國社會の影響を破らざるを得ないであらう。その結果、産業、經濟、風俗、慣習等の都會化や、都會の政治的・經濟的・文化的吸引力による人口流出現象を見るやうになつてゐる。しかし、村落は、聚落乃至極小社會圈として、小規模ながらも、一種の全體社會をなし、それぞれと異なる特殊の文化を有し、これによつて、村落固有の郷土性を實現してゐる。人類生活の天地として、歴史上大きな意味をもつものは、實に、この郷土的村落だつたといはなければならない。

第四節 都會、地方、公衆、全國

村落に鋭く對立するのは、都會であるが、都會にいたつて、大きな村落に見られる社會圈の形

式が、完全に實現される。都會は、社會圈のよい例であり、間接的交通關係が全面的に支配するのを見る。都會においても、家族や、隣組や、群集は存在するから、直接的接觸關係が行はれないのではないが、都會における支配的集團關係はそれではなく、間接的な交通關係に重點のあるのは逸すべからざるその特徴である。間接的交通關係が都會集團の基底をなすこと、かくの如くであるが、交通機關の地方的な、また全國的な發達あることにより、間接的交通關係もまた、實は都會の範圍を立ち越えて、地方とか、全國とかいふ、より大なる諸集團の存立を得しめる。都會は、それらのうちにあつて、一定の濃密な交通網の上に成り立つ集團範圍であるといはねばならぬ。すなはち、通信機關の面における市内電話や、數時間で届く速達便や、新聞の市内版や、ラジオの都市放送や、メツセンジャー・ボーイ等、また運輸機關の面における人力車や、市内、省線電車や、バス、圓タク、ハイヤーや、デパート・商店の配達機構等、みな、都會範圍にのみ施設された交通機關といふべきものであつて、これらを媒介たらしめて、都會特有の交通關係が成立し、それによつて、都會の範圍が劃されるのである。特に、現代大都會が、そのよい例證を提供してゐる。

「都會における、人々の感情的融和關係は如何。少くとも現代の大都會にあつては、その構成員

たる市民は、壓倒的に、外部の地方や、村落からの流入者によつて満たされてゐるのであるから彼等は、一般的には、お互に見ず識らずの他人として、關係し合ふといふべきである。そこで、感情的融和關係は、未發達の状態におかれ、都會においては、むしろ、仕事や、業務上での意志的協同關係こそ、主要であると稱し得よう。たゞ、その關係も、都會全體に確立してゐるとはいひ難い。その内部の官廳とか、會社、銀行組合とか、學校・協會・研究團體とかにおける局限された協同關係はあるにしても、都會をこぞつての全面的な政治・經濟・文化の上のそれは、比較的微弱だといふのが事實である。この欠陥に根ざして都市行政の腐敗や、暴利や、闇取引や、不正や、不道德が横行することがある。都會の村落に比較される諸多の特殊現象は、如上の都會特有の集團關係から、説明されるところが多いであらう。都會では、意志的協同關係が、局部的でも確立してをり、それにふくまれる、合理的な目的追求態度が行はれる結果として、普通、村落に見られる如き、停頓傾向の認められない點などは、その一端であらう。都會生活は、日進月歩であるが、この都會の進歩性を説明する鍵は、都會特有の意志的協同關係の存立にある。しかし都會のこの協同關係が、今日以上全面化するとき、都會生活の暗黒の淨化の如きも、期して待つべきものと考へられる。

地方もまた、都會同様、社會圈の一種であり、一定した交通機關の配置によつて劃される集團であるが、一定した地方的交通機關の配置といふのは、交通機關の種類といふより、むしろ、交通機關の設備を、山嶽や、森林や、原野や、湖沼や、河川や、海洋が、中斷することによって決定されてゐる。郡境や、縣の境界は、多くは、山であつたり、川であつたりすることが發見されよう。例へば、關東地方は、關東平野が、周圍の山脈や、海岸で仕切られるところに開け、四國地方などは、四面、海を繞らすことで限界づけられてゐるのである。とにかく、各地方は、間接的交通關係の一定した限度をもつて成り立つてゐるが、昔は、各地方がこの限度内に、封鎖性・獨立性を大ならしめ、封建割據の風を馴致したのであつたが、いまでは、ひろく全國的社會圈が發達を見せ、その事實は、根柢を奪はれるにいたつた。同時に、昔存した、各地方それぞれの、感情的融和關係や、同じ廣さに亘つた、意志的協同關係もまた、頗に、衰へて來てゐる。要するに、交通機關の現代的發達は、山を越え、川を横切り、間接的交通關係を、縱横に擴張してゐるのであつて、古來のく、の範圍の如き、一度、府縣の規模に整理・統合されたにかゝはらず、今日、事實上の地方單位が、全國を幾つか大きく分ける大地方に進んでゐる實狀は、行政區劃も、府縣といふより、一層擴大させてよい狀勢を促がしつゝある。治安、土木、産業、經濟、教育上等をい

て府縣ブロックが、現に、動きのとれないものとなつてゐるのは、この形勢に對し、對應處置が遷延してゐるからだといつてよからう。

われわれは、公衆なるものにおいて、いままでとは全く異なる、集團種類に接するのである。ここに公衆といふのは、漠然とした、精神上の共鳴團體の謂であつて、定形なき思想團體や、宗教團體の如きものを指す。かの、輿論にいたる一步手前の公論を支持する團體などは、特筆すべき公衆であるが、公衆はすべて、間接的交通團體を基礎としてゐる點に在りては、社會圈と見ることができ、詳しくいへば、一定社會圈内で、選抜された人々の構成する集團だといふことがいへる。そもそも、一定社會圈内には、社會圈の基礎をなす、間接的交通關係はそのまゝとし、その上に、特定人の間に、諸多の特殊的集團が作り上げられるのが、注意される。政黨とか、組合とか、宗派とか、學會とか、協會とかいふもの、みなしかりである。しかし、これらの諸集團は特定の感情的融和關係、或は意志的協同關係により、限界づけられるのである。公衆もまた、その一種であるが、たゞ、他のものに比し、感情的融和關係の點においても、意志的協同關係の點においても、いまだ確乎たり得ず、微弱・漠然たる状態に止まる。社會圈の發達とともに、思想や、宗教等の文化的諸問題に關する公衆の發生は、著しい事實といへるが、現實的な政治方面、

經濟方面の公衆の存在が、就中、注意を喚起するところである。かくて、例へば輿論と稱するものの如きは、その方面の公衆のもつ輿論と公論とが對質され、雌雄を決する結果、確定される、歸一的意見といふ性質のものである。

輿論なるものについては、これをもつて、集團構成員間の共通意見であるとするものがないではないが、それが、先づ、誤りだ。多數人の間に全くの共通意見は、稀であり、もしあるとしても、それは一般生活上の希望とか、慾望とかいふものであり、およそ、輿論の内容たり得ざる、現實生活からかけ離れた種類のものであらう。次に輿論を、多數者の意見であるとするものが少くないが、これもまた誤りである。所謂多數者の意見とは、單に多數人から成り立つ公衆のもつて、優勢なるものが、劣勢なるものを壓倒し、或は兩者折れ合ふことにより、集團全體の輿論が確定されるにいたる。多數は少數に對して、つねに一種の努力であるから、多數から成る公衆の意見が、勝を制することは、想像されることであるが、しかし、必らずしもそれを要せぬ點に輿論の特質を見るべきである。そして、勢力關係によることなく、すぐれた公論内容を輿論に上昇せしめる工夫が必要であり、その方法として、集團構成員に、批判精神と選抜能力とを、涵養

し、賦與することが、如何に緊要であるかを辨へねばならぬ。

全國とは、多く、國家や、民族の集團範圍に一致するが、それらのものが、社會圈たる限りの状態についていふ。そこで、全國は、共同文化の所有といふ點から見れば、また民族をなし、統一的な政治構造を内在せしめる點で觀念されれば、國家をなすといへるのである。全國は廣大なる社會圈であつて、ほとんど間接的交通關係のすべてを傘下に收める集團であるから、理想的な全體社會と認めてよい。共同文化の所有や、同一種族たることによつて、感情的融和關係が全面化するところに、民族として發達し、一方、内部の生活の整頓・秩序づけや、外部に對する對敵防衛を期する點から、社會統制を行ふべく政治構造を作爲し、且つそれを支持する意志的協同關係が成り立つて、國家として完成される。先に民族及び國家について説明したことは、その關係を考慮に入れて、一段、明瞭となつたであらう。

全國から民族へ、民族から國家へといふ順序をもつて、その範圍の社會圈は、逐次、高度の集團性を完成して行く關係が考へられるが、しかし、これら三者の關係は逆に行く場合も多いのである。國家の外地併合により、全國といふ社會圈が確立され、また、民族的な共同文化の所有が全國的範圍を確定するなどは、それであるが、この逆行現象も、實は、既定順位を根本的に覆へ

すものではなくて、全國を喰み出る社會團の發展に伴つて、その潜在的な擴大が行はれ、それにしたがひ、その範圍の共同文化の發育や、政治構造の擴充がもたらされるといふ、大きな筋道の小波瀾であるに止まるであらう。

第三章 社會過程

第一節 生活原動力

人間生活が、社會生活と、不可分關係にあることは、前にも指摘したところであるが、人間生活が、つねに社會生活として行はれる以上、社會生活が如何にして生ずるかといふ、その原動力の問題は、人間生活が、如何にして惹き起こされるかといふ問題に轉ずる。もとより、人間が、一種屬として、造物者から、生くべく運命づけられてゐるのは他の如何なる生物とも變りはないが、それは、一般的解答たるに止まる。生くべく運命づけられた人間が、特に、如何なる具體的な生活原動力を基に、社會人として、生活を營んで行くか、問はれなければならぬ。世に、人生は、慾と戀であるといふことをいつているが、これは、生活原動力を常識的に示したものと見て興味深い、そのことに、もつと、科學的解答をもちたいところに、社會研究上の生活原動力の問題が出て来る。それを、先づ、人間生活の根本原因にまで、掘り下げて見たいと、思ふのである。

人生は、慾と戀とであるといふ、以上の常識的觀察は、當らずといへども、遠からざる眞理を示唆してゐるといへる。生活資料の獲得慾望や、種屬増殖の生殖慾望等を中心に、人間生活は始まるからである。しかし、そのみに止まれば、人生と社會の生活は、單純なはずであるが、それが、つねに、複雑だと稱せられる如く、人生・社會の生活の原動力は、實に、多元的なのである。政治や、經濟や、社會や、道德や、教育や、宗教や、認識や、藝術や、娛樂といふやうな、諸方面の慾望が存在し、それも、それぞれの分野において、さらに細かい種類に分かれたれ、その結果、多種多様の生活現象があらはれて来る。人間生活の原動力は、かくの如く、慾望と見做してよいものであるが、その根源は、本能だといひ得られ、本能がある目的物に結びつく點では、これを、關心とも稱し得るのである。要するに、人間を、心の内部から生活々動へ推進する力、これが、慾望であり、本能であり、關心ともいへるのであり、生活原動力問題としては、人間に如何なる慾望、本能、關心の種類ありやが、尋ねられてよいところである。

人間生活の多様性に應じて、生活原動力にも、それだけの多様性が存するといへば、それまでであるが、生活の多様性の間においても、同一種類の原動力のはたらくこともある。生活資料の獲得慾望から、生産活動も起れば、經濟活動も出て来る。さらに、職業的な藝術、教育、認識

諸活動の如きさへ、現はれて来るのを見るであらう。かうして、一見、非常に距離があると考へられる、生活原動力と生活活動の結びつく關係などもあるのであつて、表向き崇高な、博愛慈善行爲が、實は、卑俗な、個人的賣名動機から出發してゐるなどといふことさへも、起つて来る。そこで、結果である生活々動の種類から歸納して、動機たる生活原動力を推定するのは、危険であるといへよう。むしろ、動機そのものにつき、よくよく分析して、事實の確定を期さなければならぬ。ここに、心理學的分析の必要なることに想到すべきであり、生活原動力の問題が、社會心理學によつて、考究され來たつた理由の如きも、了解されるであらう。

社會心理學者として名高い、マクドゥガルは、人間生活の原動力として、次の十一の本能を數へた。脱走本能、嫌惡本能、好奇本能、鬭争本能、服從本能、自己主張本能、慈愛本能、生殖本能、群棲本能、獲得本能、建設本能等が、それである。本能の種類がそれだけとして、果して人間生活の説明が満足されるや、いなやにより、彼の學說の當否が、決定される道理であるが、すでに、饑餓本能や、狩獵本能や、清潔本能や、放浪本能などが、不足すると指摘するものが出てゐる。人間の本能は、年齢により、男女により、人種により、幾分か種類と、強弱の差があるものであり、例へば、放浪本能などは、青年期に特別強い傾向であり、女子の慈愛本能の如きは、

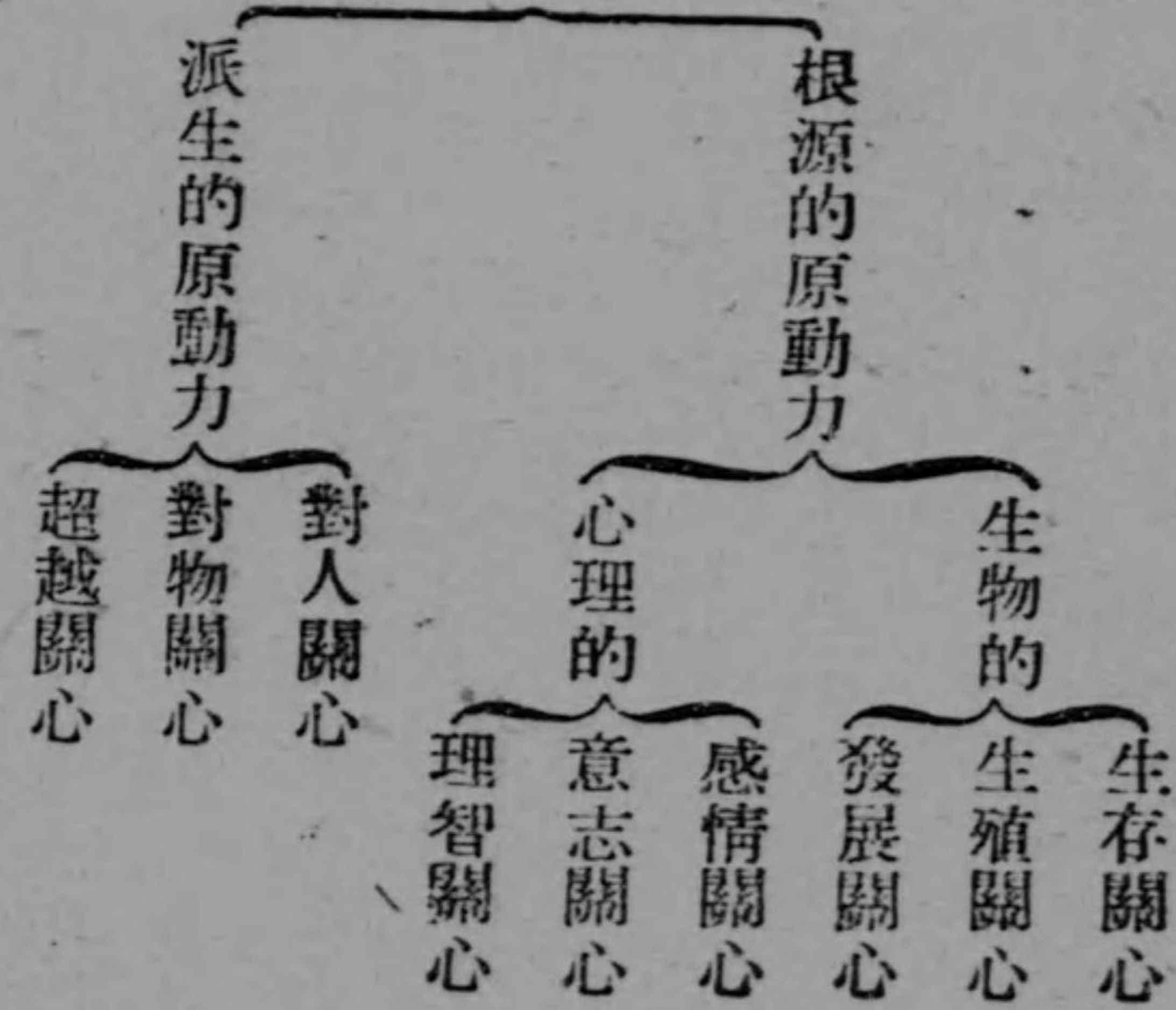
つねに、男子のそれにまさる。いづれにしても、本能なるものは、力強い人間生來の傾向であるから、これを絶対に禁遏するのは、考へものであるといへる。同じく、社會心理學者である、グラハム・ワラスは、禁遏される本能が、精神上、また社會上に種々の禍根となることを説く。彼によれば、精神病、犯罪等が、就中その結果現象だといふのである。

彼のいふ如く、本能が過度の抑制を被るとき、精神病や、犯罪の如き、悪結果を生み出すとすれば、われわれは、不都合なる本能までも、黙認しなければならぬであらうか。もし、しっかりとすれば、社會の道德化も、統制も放擲されねばならないわけとなるのであるが、そのやうな不始末なく、しかも、本能の満足を得しめる便法が、ないではないのである。それは、本能の淨化であつて、すでにいふ如く、一定した生活原動力が、つねに、一定した生活々動の種類によつて満足されるのでなく、種々の種類に流通され得るものであるから、本能をして、不健全・不道德なる種類を避けしめ、可及的に、健全、且つ道德的なる方面に放出せしめる途を講ずることが必要である。生殖本能などは、時に、不健全・不道德な方面に奔流し勝ちのものであるが、それはまた、宗教生活や、藝術生活などによつても、満足される可能性があるのであるから、かゝる轉換を策するならば、本能淨化の目的が達成されるであらう。教育や、感化事業等に携はるもの

の、心すべき事柄だといはなければならぬ。

さて、生活原動力の考察は、マクドゥガル以外にも、數ある試みに接してゐるが、いま、一々、それに觸れずにおかうと思ふ。結局、學者によつて、多様な本能や、關心の種類があげられるのであるが、歸するところ、生理・心理的存在なる人間の生活原動力として、生物たるかぎりでの原動力と、有心者たるかぎりでの原動力と、並に、社會人たるかぎりでの原動力に概括し、さらに、それらの種類を、若干細分すれば、それによつて、社會生活を見透すのに、大體、不十分ではなからうと信ずる。事柄を、生活者の個人的立場から見れば、生物的・有心者の存在たるかぎりでの原動力こそ、根源的だと考へられ、それに對して、社會的存在たるかぎりでの原動力は、派的だと認められよう。とにかく、その意味で、生活原動力の分類を行ふなら、次のやうな表を得よう。

人間生活の原動力



右の表のうち、最終分類項目たる諸關心は、まだまだ、形式的に過ぎるであらう。生存關心に例をとつても、脱走本能や、獲得本能や、饑餓本能等に細分されてよいであらう。超越關心なるものに例をとつても、それは宗教や、道徳や、認識や、藝術、娛樂等、それぞれの慾望から成り立つとしてよい。しかし、前にもいつた通り大體社會生活を見透すといふ標準からすれば、この

程度で分類で、事足る場合が多いであらう。細かなものが必要であれば、關心諸項目につき、一々、細部の分類を施せばよいのであつて、それは、比較的、たやすい仕事であらうと思はれる。

人間生活の原動力の種類が、大よそ、かくの如くであるとして、これらの生活原動力によつて人が生活々動に入るとき、周圍に他の同類の存することを忘るべきではない。人間は、個人として孤立せず、つねに社會をなして生活するのであるから、少くとも、他人と接觸・交通關係を存し、個人の動きは、直ちに、他人に影響を與へ、その影響の反作用が、また、他人の側に生じ、それが、さらに、最初の個人に逆作用をもたらす。個人もまた、十分それを心得て、對人的關心を身につけてゐるのである。その意味から、社會生活は、人々の間の作用の授受 (Give and Take) であるといふべきであらう。作用と反作用、すなはち、相互作用 (Wechselwirkung) と規定してよいのであつて、ジムメルが、社會を相互作用としたことは、まさしく、そのゆゑからである。しかし、社會の意味が、集團といふ團體範圍を指す限り、相互作用の概念は、それには當て嵌まらない。相互作用は、集團範圍のうちに、集團構成員たる人々が、生活々動を行ふ際

の概念である。集團構成員たる人々は、種々の原動力に動かされて、生活々動に出るが、先

人間生活の Wechselwirkung

づ他の構成員たる人々と、少くとも接觸・交通關係をもつことにより、單獨作用に終らず、相互作用たるに立ちいたる。後々においては、相互に感情的融和や、意志的協同關係を結んで、對人關心をあらはに發動せしめ、相互作用を強化するのである。この意味の相互作用といふことに、社會的生活々動は把握されるであらう。われわれは、この社會的生活々動を、ひろく、社會過程 (Social Process) と名づけるであらう。

第二節 生活環境

社會生活は、以上述べた意味で、集團範圍のうちに、集團構成員によつて、なされる社會過程だといふことになるが、集團構成員たる人々が、人間としてもつ生活原動力を動因たらしめ、互に、作用・反作用に出るところに、その生活現象が生ずる。しかし、實際の社會過程は、ひとり生活原動力から決定されるものでなく、周圍の生活環境より、大いに、規制を受けるであらう。同じ獲得本能によつて動機づけられる生産現象でも、平野や、山地や、海濱によつて、狀況の變化がある。生活原動力は、社會過程の原因であるが、それに對する條件として、生活環境が物をいふのであつて、兩者の結びつき如何によつて、社會過程は、具體的狀況を、千差万別たらしめ

るのである。したがつて、社會過程を観察するに當つては、生活原動力だけを研究することでは足りず、進んで、生活環境の觀察を行はなければならぬ。

われわれ人間の生活環境といへば、直ちに、自然環境を考へるであらう。その考へ方は、當然であつて、誤つてはをらない。元々、人間といへども、一種の生物であつて見れば、自然の子であると同時に、自然からする影響を受けとらねばならぬ。人間生活現象が、それによつて、左右されるのはもちろんであつて、そこに、自然の環境的條件性が認められるわけである。雪國の雷鳥が、翼を純白ならしめ、枝しやくとりが、樹枝に姿を似させる例は、周圍の環境に順應する生物的事實であるが、同一事實は、原理的に人間社會過程の上においても、看取されるであらう。大陸作戦部隊は、黄土に擬ふカーキ色の軍服を纏ひ、都會の建築美は、周圍の自然との調和を尊ぶ。しかし、生物擬態の現象は、社會過程の場合にあつては、極く初歩的なものであるにすぎず、この種の消極的順應よりも、積極的な適應の面に、自然環境の、より強力な條件性を見出し得るであらう。

われわれが、寒暑や、雨露を續ぎ、食糧を求めて生活する際に、周圍の自然環境は、決定的條件をなすであらう。我が日本民族が、早くから氣候溫和な、豊葦原の瑞穂の國のこの郷土に、布

帛を纏ひ、農耕生産と、穀食慣習を築き上げて来たことなども、環境的條件から説明してよいものであらう。部族や、民族等の生活現象が、周囲の自然環境から影響を被るだけでなく、これらの集團内部の、各人個々の生活の如きも、みな悉く、身近かな環境條件のもとに、それぞれ、特殊化することは、もちろんである。各人個々の問題として、環境的條件がある結果、集團全體のその総合的歸結現象もまた、もたらされるわけなのである。

自然環境の社會過程に対する影響は、ひとり、衣食住の面に關するだけでなく、精神生活の方面にも及ぶと考へなくてはならぬ。自然の冷酷なるところ、人情も、また、峻嚴となり、自然の溫和な場所では、思想の如きも、とみに穩健となるのは、あまねく立證される事實であつて、宗教が南方熱帯地方に興り、哲學が、北方寒冷地域に榮え、且つ、種々の娛樂が、亞熱帯地方にさかんなことを見れば、氣候などが、精神生活に深い關係をもつことは明瞭であらう。氣候以外、居住地の地味や、土地の高低や、鑛産資源や、生物狀況等が、物的生活面に大影響を及ぼし、精神生活面にも、支配を與へることは、看過できない。我が國が、農業に適した、地味肥沃な平野をば、山嶽重疊する間の河川流域と、長い海岸線地域に有する、島嶼的地形であり、鑛産資源に缺けるも、動植物の増殖と繁茂に適した郷土であることは、所謂島國根性の狹隘性や、科學技術

の後退性といふ缺點を示しながらも、美的情操や、一方に偏せぬ中正な物の見方や、自然と生物を伴侶とし、それに溶け込んで行く思想傾向などを培つたのである。

しかし、自然環境のもとに、人々は、受動的立場にのみおかれるのではなく、自然環境に能動的に作用し、その利用をはかる點を忘るべきではない。技術や、生産の積極的活動などが、それである。技術によつて、人は自然物を加工し、同じく生産によつて、自己のために、それを利用するのである。しかし、そのやうな作用は如何に積極的に見えても、所詮は、自然法則をとり入れその應用をなすにあるのであるから、自然環境の條件性は、つねに、潜在的に、はたらいてゐる。

自然環境に適應して加工し、開發することが、いまいふやうに、技術と生産であるから、それらは、根本的に環境順應的であり、環境の影響は、常住、行はれて來るのである。社會の高度化するにつれ、自然環境の支配は、一見、減少するやうに見えるが、その點の影響は、止むことがない。そして、自然環境の支配や、影響あるところに、社會過程を自然環境よりのみ説明しようとする學説が、地理學的社會學の名のもとに、生じたことも、偶然ではなかつたといへるであらう。

自然環境の社會過程に對する條件性は、かくの如く、根本的であり、且つ重要なものであるが、その環境が、自然環境にだけ止まると思惟するところに、地理學的社會學の誤謬が現はれる。社

會對する環境は、決して周圍の外在的な自然環境ばかりではない。人間自身が、社會的に作り出す、文化と稱する、一種の内在的な、しかし、最も大切な存在があるのである。その文化もまた、環境的決定性を發揮すること、あたかも、自然環境の如く、しかも、社會が初等段階より高度段階に進むにしたがひ、文化環境の方は、蓄積に蓄積を重ねて、尨大な量になつて行き、その影響・支配が、著しく増加して來る。一體、人間が、この世の中へ生れて來る場合を考へるならば、彼を取巻く自然環境の存することはいふまでもないが、その他、集團毎に、特質的な、文化事物の存在することが認められる。政治・制度や、生産・經濟慣習や、時代思想や、家族精神等から、衣食住の風俗、慣習等にいたるまで、みなそれであり、それらが、生活條件となつて、彼の保育や、躾けや、教育がなされる。長じて、獨立生活をなすやうになつても、それらのものから受ける影響・支配は、いたつて大きいといはねばならぬ。

文化と稱するものは、畢竟、制度や、慣習や、思想、イデオロギー、等の形態に分かれる人々の生活様式をいふことになるが、それぞれの集團毎にそのやうな文化事物が蓄へられてをり、それが、集團構成員たる人々の社會過程を、感化・影響する。簡單にいへば、條件づける作用を行ふのであるが、この條件性のあることにより、文化が、人々に對して生活環境をなすと見做され

欠
P101-102

びつく。そこで、社會過程の種類を上げようとする場合においては、それが、また、人間生活の諸方面をも代表するであらうことが期待される。しかし、社會過程といふ面から、それを分類するときは、當然、社會的觀點が支配せざるを得ないのは、もちろんである。さて、個人は、つねに、他の個人と集團を構成して生活する關係上、如何なる場合にも、他の個人に作用を及ぼす關係に立ち、その作用を受けとる他人の側においても、最初の個人から作用を與へられて反動する、その作用がまた、彼に止まる反響作用としてでなしに、最初の個人へ逆作用することが多い。ここに、社會生活をもつて相互作用となす、ジムメル以來の見方の正當性を認められよう。そのことも、すでにいつたが、そもそも、人間が精神的存在なる結果、精神を俟たない人間生活々動は、例外であり、大多數のものは、精神の參加あるものと見なければならぬ。そこで、精神的な作用が、社會生活の特徴となるのであつて、精神的作用・反作用、すなはち、精神的相互作用を社會生活の本質と認めてよいのである。

社會過程を精神的相互作用と認めることは、それが、單に、精神そのものの間の相互作用であることを意味してをらない點は、注意すべきである。個人の精神は、肉體的表出運動に媒介されて始めて、他人に傳達されるものであるし、また、他人の側にあつても、最初の個人から、精神表

出の肉體運動を受けとる際、それを直接精神にとり入れ得ず、肉體的受容器を通してのみ、感覺し得るのである。社會生活は、この意味をもつて、肉體的相互作用とすら、考へ得るわけであつて、政治・生産・經濟等の現實生活から、教育・宗教・道徳・認識・藝術等、特に文化的と考へられる諸活動にいたるまで、この觀點から捕捉することが、大切である。結局、人間生活は、精神的たると同時に、肉體的でもある。社會過程も、その意味で、精神參加的な肉體間の相互作用であると解釋しておかねばならぬ。

かくの如く、人間の外面的な肉體行動が、内面的な精神態度の參加を伴ふ點から、こゝに、行爲といふ觀念が樹てられて来る。社會生活は、畢竟、人間行爲の相互作用なることをつねとするが、その行爲の行はれる場合に、社會的觀點から、二つの大きな種類が、あげられるであらう。一は、顯はに他人を相手とし、行爲の作用が、直接、他人を目がける種類であつて、他は、直接他人を相手としてゐないが、他人との間に集團關係をもつところから、間接的に、行爲の作用が他人に波及する種類である。人間行爲が社會的であることは、一般事實であるが、その關係の顯はである

前者に屬し、これに反して、認識や、藝術

生活は、後者に入るであらう。相手のない政治・教育活動はないが、認識・藝術生活の如きは、一應、單獨作用と認め得られるからである。しかし、認識・藝術生活の種類も、實際においては、他人との間に、協力、批判、鑑賞、競争等の關係を伴ひ、間接的ではあつても、他人を一種の相手たらしめてゐる。他人は、その場合、關係者といふ立場におかれるのである。

そこで、社會過程の基本的種類をなすものとしては、

第一に、

一、直接的社會行爲

をあげる。この直接的社會行爲に屬するものとしては、先づ最初に、精神傳達の言語行爲が考へられる。言語は、音聲、態度、身振り等から、話し言葉である口語や、書き言葉である文語にいたるまで、内容は複雑である。あらゆる社會生活がこれらの言語行爲を伴ふのは、ももちろんであつて、言語現象は、社會生活と、その廣さを等しくしてゐる。政治行爲は、社會統制作業であつて、これは、特に、國家における統治や、行政作用に、よく示されてゐるが、國家以外の他の集團でも、大なり小なり、同様の事實の行はれるのを注意したい。要するに、政治行爲は、集團本位の建前をもつてする、その内部の取締りや、整頓作業であるといへる。法律行爲とは、右の

政治行爲に對應する、被統制者の側の、統制遵奉作用であつて、この法律行爲もまた、國家を構成する國民の義務的行爲として顯著である。なほ、こゝにいふ法律行爲は、法律學上の觀念より遙かにひろいのであるから、國家以外の他集團の統制遵奉作用を、すべてふくむ。法律行爲を、社會學的觀點から、かくの如く、ひろく取上げるのは、かへつて、國家の場合の、狹義の法律行爲の眞意にも徹することとなるであらう。教育行爲は、集團のもつ文化内容を選択し、これをまだ構成員として十分の資格をもつにいたらない分子に授與し、彼等にその適格性を賦與するものである。制度や、思想は知育によつて授け、慣習は訓育や、技術教育によつて與へる。教育が決して知育のみに走つてならないことは、この觀點からして、明瞭であらうと思ふ。

二、間接的社會行爲

一見、純然たる個人單獨の行爲であつて、相手を缺くやうに見える種類である。この種類の行爲は、直接、物質を相手とするか、或は、超越的な價値物を目的とするかに分かれ、それによつて、對物行爲と、超越行爲に分けて説明するのが、便宜である。

イ、對物行爲 物的事物にはたつきかける作用であつて、先づ、技術行爲が、それとしてあげられる。物質のもつ性質・形態を變化せしめる作用であつて、土地や、礦物や、植物や、動物等

に對してなされる積極的作業である。かゝる作業は、普通、われわれ人間生活への利用の意味からなされ、それにしたがひ生産行爲と稱される。土木、鑛業、農業、畜産、工業、製造業、醫術等、みな、しかりである。また、技術や、生産行爲を行ふ場合、今日では、科學知識を基にするが、昔は、たゞ、經驗に頼り、最も古くは、呪術に訴へて、そのことがなされた。秘傳とか、魔法とかいふことが、それであつた。生産活動が、現下國民の一大要務なることを思へば、われわれとして、最も進んだ科學知識を基に、積極的増産に寄與することが必要であつて、科學研究の重要性また、こゝに存するわけであらう。經濟行爲は、技術や、生産行爲の如く、事物の性質・形狀を變化するといふのでなく、たゞ、事物を運搬、交換して、人に對する關係を變へる作用をいふ。理論的には、事物の實用價値を作る作用であるといひ得るであらう。次に、消費行爲であるが、これは、生産や、經濟行爲の最後目的をなすものであつて、事物の使用による滅却作用であるのはいふまでもない。生産・經濟・消費の三者は、互に密に連繫するから、廣義の經濟行爲として、綜合されることもまた、屢々である。

ロ、超越行爲 これとしてあぐべきものは、眞・善・美といふ如き價値を追求し、或は、それを實現しようとする作用であるが、聖なるものへの憧憬たる意味で、先づ、宗教行爲が考へられ、

次に眞・善・美のそれぞれを相手とする、認識行爲、道德行爲、藝術行爲等を數へる。認識行爲にも、獨斷的な神がかりの説や、應説的解釋なども存するが、經驗事實について、それを批判論理的に把握するのが、科學的認識であつて、これが、最も頼りになる認識種類である。道德行爲は、善を追求し、實現する意味では、超越行爲と認められるが、善の内容が、社會的に作られてゐる慣習と、それに關する思想であることが多い點からいへば、慣習遵奉行爲だといへるであらう。約束を違へないのは、道德行爲であるが、約束を違へぬ慣習と、約束を尊重する意志のあることが、この道德行爲を規定する點を考へなければならぬ。藝術行爲は、いふまでもなく、美の鑑賞と、その創作とである。素人は、たゞ美を鑑賞するのみであるが、玄人は、その美を發見し提供する。終りに、娛樂行爲は、行爲自體のうち、満足の秘められる特殊作用であつて、感情的慰安活動だといへるであらう。この娛樂は、生活の緊張を和らげる効果があるが、他の生活々勤が、もし、全面的に、娛樂的に遂行されるなら、負担感減少し、能率が大いに上るであらう。この意味から、仕事や、職業が、各人の性能・趣味に應じて選ばれ、周囲の事情も、勤勞、事務を快適ならしめ、それを娛樂的、吸引力的ならしめるのが望ましいのである。

さて、右に述べた對物行爲は、人間以外の物質を、直接相手とするものであつても、副次的に

は、つねに他人を關係者たらしめてゐるのを見よう。これを生産行爲について見れば、生産者は事物の加工や、栽培を行ふものであるが、それを行ふ際、同僚と協力することもあれば、技師の指圖にしたがつてなす場合もある。その點は、超越行爲をとるも、同様であつて、例へば、宗教行爲を、僧侶の説を聞いて行ふこともあれば、同志と協同でなす場合もあるのである。あらゆる對物行爲も、間接的に、社會的行爲をなすことは、必然だといひ得るであらう。

第四節 模倣と傍觀者

社會的行爲をいとなむ集團人の生活において、模倣作用が、特に特筆すべき現象をなすといへる。すなはち、如何なる人々の間においても、相互に模倣現象が、看取されるがゆゑである。模倣とは、人が、相手や、關係者の態度や、動作や、精神や、思考をそのまま自己に取り入れて、人眞似する現象をいふ。猿の人眞似といふことがいはれてゐるが、猿が模倣に長ずるのは、猿が人間に近いがゆゑであつて、人間は、さらに、猿よりもすぐれた模倣動物だといへよう。その模倣現象が、社會的行爲に附帶するのであつて、社會生活は、模倣を除外して、考へ得ぬとさへ思はれるのである。それであるから、タルドは、すべての社會事實が模倣から成り立ち、模倣を外

にして社會生活の理解が出来ないことを指摘してゐた。たしかに、模倣は、あらゆる社會的行爲に附帶する點から、また、それ自體、一種の社會的行爲をなす點からも、社會過程の重要現象だと見做さなければならぬ。

模倣は、先づ、子供の間に行はれる著しい現象であることを見よう。婦女子の場合においてもまた、しかり。けだし。子供や、婦女子は、成人・男性に比して、自主性に乏しく、他人に依存して生活することが多いからである。したがつて、同じ理由から、未開人は文化人に較べて、一層模倣的であり、地方人が都會人を模倣し、下級の階層が、上層階級を模倣し、後進國が、先進國を模倣する事實の如きも、示されて來る。しかし、他面を以て、成人や、男子でも、他人の長所を學び、他人の賢い仕事を眞似る事實の存することも、閉却してはならぬ。文明人も、未開人の生活のうち、已れに適するものは、進んで採り入れるではないか。都會人も、地方人の美點は、學ぶに吝かではないはずであり、上層階級も、下級階級を、絶體的に、模倣せぬといふものではないのであつて、その點は、先進國が、後進國のよい點を採用するのを辭さないことにおいても、同じであらう。要するに、模倣現象は、程度の差こそあれ、あらゆる社會生活に附帶する普遍的事實であつて、深く注意するところがなければならぬ。

しかしながら、模倣の現象については、その種類を分かつことが、何より必要だと考へられるのである。模倣は、人眞似といふ點では、みな同じ現象であるかのやうに見えるが、模倣を行ふ際の意味の點で、種々の場合が突き止められるであらう。いま、それを區別して説明したいと思ふ。

一、衝動模倣　これは、ほとんどなんらの思考をまたず、われ知らず行ふ模倣の種類である。欠伸や、喫煙の傳染といふ如きは、極端な例であらうが、遽か雨に、人の雨傘を開くを眞似し、劇場の失火に、人のあとを追つて、皆の者が出口へ殺到するなどが、それである。これは、結局關心と環境とにおいて等しい人々が、同一行動に出づる現象であつて、最初の一人の行ふ行爲が他の人々の行爲の刺戟となるに他ならないのである。

二、合理的模倣　前のものが、衝動的・無反省的であるのに對し、この種類は、最も十分な判斷を伴つてゐる。すなはち、他人の長所を見て、わざと眞似する場合であつて、合理性を中心としてゐる。他人の賢い遣り方をとり入れる、先にあげた成人や、男子の模倣や、それに類する採長補短の場合は、みな、しかりである。これも、根本的には、關心と環境とを等しくするものの間で行はれるのであるが、衝動模倣と異つて、合理的判斷を伴ふ點で、進歩、發達の要素をふく

むであらう。

三、優勝模倣 なんらかの點で、優勝者であると認められる相手を模倣する種類である。地方人が都會人を、下級階層が上層階級を、また、後進國が先進國を模倣する、先にあげた諸事實がその例である。それもまた、根本的には、關心・環境を等しからしめるものの間にも行はれることが多いのであるが、しかし、それにかゝわらない場合さへもあり得るであらう。優勝模倣の動機は、優勝者に対する從屬感情であつて、この從屬感情は、信頼感として説明されよう。模倣するもの側における、模倣されるものに對する信頼感を基とするのであるから、ある場合には、大多數の偉力に對し、また、ある場合には、少數指導者に對して、この模倣現象が起るのである。雷同現象と、指導現象とが、その關係から區別されるであらう。

さて、模倣現象に、以上あげた如き種類のあることは、模倣が、決して單純な現象でないことを明らかならしめると同時に、模倣に關する一般的批判の不可能であることを、知らせるであらう。われわれは、衝動模倣の如き盲目的作用を嚴に戒しめ、また、優勝模倣の如き依存的態度をも、深く警戒せねばならぬ。そして、正しい生活關心を出發點として、所與の環境に適合する行爲を、自主的に工夫するのを、第一義としなければならず、この點からいふとき、われわれは、

合理的模倣についてだけ、力を入れなければならぬ。衝動模倣は、動物的現象に過ぎない。優勝模倣は、人間性に根ざすが、たゞ外見上の優勝者に引ずられたり、大多數の愚昧な行動に靡いたりするやうであつてはならぬ。眞の指導者や、適格性をもつ行爲を鑑別し、それにのみしたがふ毅然たる態度が、肝要なのである。

右の模倣現象とともに、人々の社會生活には、つねに、他の集團人が、傍觀者として見守る事實のあることを附言しておきたい。つまり、社會生活者には、外からの觀察者がつき纏ふといふことであつて、この外からの觀察者、すなはち傍觀者の態度や、行動も、一條の社會的行爲をなすのであるから、生活當事者もまた、傍觀者への關係を行爲のうち盛り上げ、傍觀者に對する社會的行爲をなさざるを得ないこととなる。傍觀者は、立場々々によつて、監視人とか、審判官とか、批判者とか、第三者とか、局外者とか、種々の名目を付せられるが、その特徴は、行爲者に對し相手乃至關係者といふ如き、必然的關係を有するものでないにもかゝらず、行爲者の行爲に對して干渉し得る可能性をもつところからして、その行爲を人道、或は公義に服せしめる外的牽制作用をいとなむ點にある。このことは、行爲者のあらゆる種類の行爲に亘り得るが、とりわけ、親愛行爲が溺愛に墮したり、支配行爲が、搾取と化したり、また、鬭争行爲が、殘虐化する

るやうな場合に、顯著に發動するのを見よう。

すなはち、傍觀者は、目にあまるそれらの行爲を、オブザーヴァーの立場に立つて、人道精神や社會的正義の觀點から、監視し、批判して、規律を紊すことを防止しようとするのである。傍觀者のこの立場は、彼等が、行爲者の如く、事柄に直接利害關係をもたないことから、多くは公平であるといへるが、しかし、彼等が自由の境地にあることは、その立場の無責任に流れ易い欠點をも示すであらう。したがつて、有能にして責任をもつ傍觀者、例へば専門審判官といふ如き種類において、われわれは、最も頼りになるその役割を認め、これに反して、「世間の口」といふやうな、能力なく、且つ無責任な傍觀者の場合には多くのものを期待出来ない。しかも、行爲者は、傍觀者の監視や、批判を顧慮しなければならぬ立場におかれるのであるから、社會生活の適正化を狙ひとする觀點からいへば、各方面に、有能、且つ責任ある監視者、批判者を配すること、これとともに、社會教育による大衆の資質向上を策することが、必要であらう。

デイルタイ、マイノック、ジメル、マクス・ウェーバー等は、道德律が、行爲者に對する傍觀者の監視的役割から生成されることを指摘した學者であつたが、われわれは、彼等の觀察の正當性を認めると同時に、以上の政策的觀點を忘れてはならぬ。なほ、國內の道德律が、傍觀者の役

割から生じて來る如く、國際正義の觀念や、國際法といふ如きも、同じく、傍觀者の役割から促進されるといふことになる。こゝでは、行爲者も、傍觀者も、國家であるが、軍事的外交的行爲をいとなむ國家に對し、傍觀者として第三國が存することが決定的なものとなる。ヨーロッパ中世時代に、地中海沿岸の諸國家が、代る代る、行爲者に對して傍觀者の役割を演じた結果、現行國際法の濫觴が見られた事實は、最も雄辨に、事實を立證するであらうと思ふ。

模倣あり、傍觀者あること、かくの如くであるが、社會生活が、他人との關係・交渉の生活であることが、こゝにおいても、また、よく認められるであらう。しかし、模倣の現象や、傍觀者の役割は、どこまでも本來の社會的行爲に附帶する事實であるにすぎない。本來の社會的行爲こそ、直接・間接の差はあるも、他人を相手、或は關係者たらしめるので、さきにいふ如く、行爲者と、それらの相手・關係者との間に、かの相互作用が成り立つのである。社會過程においてひらく社會關係の認められるといふ所以がそこにあり、社會過程が社會關係の現象であることが考へられるのである。

第四章 社會關係

第一節 その性質

社會過程は、集團をなす人々の相互作用であるといつたが、それは、そのやうな人々の生活行為が、直接たると、間接たるとを問はず、他人を相手とする作用であるところから来る。そのことは、屢々述べたことであるから、いま、繰り返して説明するを要せぬであらう。こゝに、新たにとり上げて行きたいのは、社會過程が相互作用であるといふことが、實際上において、それ以上の一層深い意味をもち、甲の行為が、他人たる乙に作用を及ぼし、この乙の行為が、また逆に甲に影響を仕返へすに止まらず、その際の甲の行為と乙の行為が、個々別々の意味でなされるのではなく、互の作用・反作用が一聯の緊密な關聯形態をなし、相互扶助とか、取引とか、鬭争競争とか、支配・被支配とかいふやうな綜合現象を提示する事實である。

およそ、甲の行為は、社會的行為として、同じ集團内の乙といふ相手に向つてなされるのであるが、その際、乙の方で、なんらそれに氣づかずにをることも、稀ではなからう。甲の呼びかけ

に對して、乙が不注意であることや、甲の呼びかけが届かないといふ如きこともあつて、反作用の欠ける場合もあるであらう。戀愛現象などについていつても、片思ひのあり得るのは、そのよい例證であらう。と同時に、甲の呼びかけに對して、乙は、それと知るも、故意に黙殺する場合もまた、起こり得るのである。これは、駈け引きといふべく、取引の申し込みに對して、知らぬ顔をするやうな例をもつて知られよう。前記二つの場合、甲の行為は、一方的行為としてのみ止まるのである。この一方的行為は、實際の社會生活にかなりひろく見出されるのであるから、社會生活を、つねに充實した意味で、相互作用とすることは、許され得ない見解であらう。

かくの如き一方的行為があるとともに、また、次のやうな場合が出て来る。甲の呼びかけに對して、乙は、それを受けとらないのではないが、その意味を、誤解から、穿き違へる。例へば、取引の申出を、挑戦であると誤り、應戰態度をもつて反作用する類である。この場合も、乙の不注意や、周囲の障得などに起因するが、一方的行為の場合と異り、乙の反作用があるといふ點に新しい特色がある。しかし、乙の側が、故意に、そのやうな態度に出ることもまた、決して少くないのであつて、取引の申出に對して、駈け引きから、わざと、應戰といふかけ離れた反作用に出る、甲の出鼻をくじくといふことなどが、その例になる。外交上の策略などに、よく用ひられ

る手である。かかる場合においては、一方の社會的行爲に對して、相手の反作用行爲は起ころも、兩者は、意味上、適當に結びつかないのであつて、外形上は相互作用をなすも、眞の充實した相互作用に立ちいたらない。すなはち、それは、一方的行爲の幾つかが、表現上連結されただけであるから、われわれは、これを分裂現象と認めなければならぬ。取引の申出に對し、應戰態度をとられたのでは、それを統一的に取引現象ともいへないし、さればといつて、鬭争現象とも斷じがたい。取引にもあらず、鬭争にもあらず、双方の要素を不完全に具へる、不十分な相互作用なのである。

しからば、完全な意味における相互作用とは、如何なる場合をいふのであるか。それは、甲の取引の申し出にたいし、乙がそれを諒承した上、その申し出にそふやうな反作用、すなはち甲の願望と期待に副ふ反作用として、取引の申し出を應諾する行爲に出る場合である。こゝに、取引現象といふ、完全な形での相互作用に接する。尤も、この場合にあつても、甲の取引の申し出に對して、乙はそれを謝絶するといふやうな場合もあり得、この乙の謝絶は、取引現象を遂に成立せしめないものであるが、しかし、この場合でも、取引に關する談合といふ相互作用だけは、成り立つたと見なければならぬ。談合現象は、相互作用の完全な形のもとに行はれ、たゞ、その後の

取引現象が起こらないだけであるから、謝絶の場合も、一種の相互作用と見做してよいのである。

さて、いま例示した談合現象や、さらに進んだ取引現象の如き、完全な形をもつ相互作用が、社會生活のうちに、ひろく行はれるのは、容易く看取できるであらう。相互扶助とか、協力とか、鬭争・競争とか、支配・被支配とか、みな、悉く、そのやうな事實である。われわれは、この種の完全な形をもつ相互作用を、社會關係現象とするであらう。この社會關係現象が、實際の社會生活中に占める部分は、廣汎であるから、社會生活は、また、社會關係現象であるとの見方がとられるが、大體上、この見方は認めてもよいはずである。社會關係現象のこの重要性にしたがつて、以下、その主内容を分析したいと思ふ。

社會關係現象に、基本的種類として、敵對現象と、上下現象と、和合現象の三つを分かつ。先づ最初の敵對現象とは、當事者互に相手との間に、對抗的な相互作用を行ふものである。例へば、鬭争とか、競争とかいふ現象が、その例である。次の上下現象とは、人々互に相手との間に、表面上平和的な、しかし不平等の相互作用を行ふものである。例へば、一方が支配し、他方が服従する如き現象である。最後の和合現象とは、人々互に相手との間に、眞に平和的な、且つ平等の

立場における相互作用を行ふものである。例へば、相互扶助とか、取引現象とかが、それである。しかるに、社會關係現象は、これら三大種類以外に分類され得ず、あらゆる社會關係現象は、そのいづれかの種類に包含されるのであつて、この點からいふとき、社會生活は、概括的ながら、敵對關係か、上下關係か、和合關係か、それらいづれかに分屬すると見做してよいのであつて、人間生活もまた、同じく、それら三大方面に分かたれるとしてよいであらう。

しかしながら、最も主要な點は、社會關係現象が、何故、右三大種類に分たれるかの説明を與へることであつて、その理論を簡單に示すであらう。集團構成員たる甲と乙とが、相互作用を行ふ場合に、甲の乙に對する態度と、また乙の甲に對する態度として、それぞれ、相手を肯定するか、否定するかの問題が存する。こゝに、相手を肯定、或は否定するといふのは、相手の存在や態度や、主張等に亘つて、相手の立場を容れるか、いれないかをいふのである。相互否定の場合、事實は對抗的となり、互に相手を排斥しようといふのであるから、なほ一種平等的といへるであらうが、敵對現象をなすのである。鬭争や、競争の諸現象が、その例となるのは、すでに述べた通りであるが、みな、互に相手の存在・態度・主張等を否定することをもつて成り立つ。これに反し、相互肯定によつて成り立つ場合、事實は平和的であるのみならず、一方的勢力がなんら

たらかない點が、全く平等的であり、これを和合現象と認めるのである。相互扶助・取得現象の如きが、それであることは、前にもいつた。相互扶助にしても、取引にしても、當事者は、互に相手の立場を認めてゐるのは明らかであらう。かくの如く、相互否定と、相互肯定とによつて、敵對現象と和合現象の兩現象があるが、こゝに、一方は相手を肯定するのに、相手たる他方は、逆に、相手たる一方を否定するといふ場合がある。普通ならば、これによつて、社會關係現象は生じて來ないはずであるが、しかし、一方の勢力がはたき、嫌がる相手を、いや應なしに引摺り、その意圖するやうな、社會關係現象を生ずることがある。この場合、一方の肯定的態度に對し、他方の否定的態度は改められ、この方もまた、肯定的態度に變改させられるわけである。強大者の意圖にしたがひ、弱小者が不當の取引を強ひられ、その結果として、搾取現象が起るが如き、それである。これは、本質的には、肯定と否定が結びついて起る現象と考へてよいのであるから、最初にあげた二つの種類と、全然、趣きを異にし、明らかに、第三型をなすものと認めなければならぬ。これを、上下現象、すなはち支配・被支配現象となすのである。

社會關係現象は以上の如く、否定と否定、肯定と肯定、それから、肯定と否定の組合せによつて、三大種類に分かたれる以外、他に否定・肯定の組合せがあることを得ないところから、それ

ら三者につきると考へなければならぬ。社會生活は、要するに、敵對、和合、上下の三大現象に分割しつくされて、餘すところないであらう。人間生活もまた、それにしたがひ、敵對生活か、和合生活か、支配・被支配生活かの諸型に分かたれるのは、それから來る結論である。

第二節 基礎的關係諸現象

敵對現象は、人々、互に相手を否定し合ふ現象であることをいつた。鬭争・競争諸現象がこれに入り、戦争、格闘、スポーツ競技等、みな、それに配屬する。この敵對現象において、注意すべきは、當事者相互が、感情の對立關係によつて相手を否定するか、或は意志の對抗關係によつてそれを行ふかの點である。一は、理性の判断によらざる、盲目的な毛嫌ひや、反感に基づくものであり、他は、豫じめ一定の目的を抱いてをり、この目的に相手が邪魔となるところから、否定があらはれるものである。野蠻人間の鬭争は、感情の衝突によること多く、文明人の間のそれは、意志の疎隔に發することが専らである。前者を反撥現象といへば、後者は抗争現象とするところが適當であらう。兩者は、敵對現象の根原的區別となる。

反撥現象は、感情的に相手を憎み、相手を排撃しようとして惹き起こされるのであるから、

排撃現象をなすことはもちろんであり、相手の人格、少なくともその一部を除去しようとして破壊・驅逐の作用を演ずるのは當然であらう。相互排撃が、この現象を特徴づけるのである。しかして、如何に永く集團生活をともにするものの間においても、この現象は生じ得るが、就中接觸、交通を開始せるばかりの初對面のもの間に、相互理解や、生活調整の缺けるといふ理由から、頻發する事實がある。反撥現象はその性質からいつて社會生活中最も不幸な現象といふべきであらう。

抗争現象は、同じく排撃、排斥現象であつても、當事者それぞれ、一定の目的のもとに、相手を否定する點が、反撥現象と異なる。金儲とか、地位の獲得とかを指すものが、他人がそれを妨げ、邪魔をするところから、利害上對立して、この現象が生ずる。したがつて、會社、組合、協會、學術・藝術諸團體において、目的追求意志の強い結果として、この抗争現象のよく發生するのを、看過してはならぬ。抗争現象は、反撥現象と等しく、相手を否認・排斥する事實であるから、それと同じく、相手の人格、少くともその一部を破壊・驅逐する作用を行ふが、一定目的下にそれがなされることは、濁汰、削除作用であると思ふべきである。すなはち、目的觀念さへしつかりしてみれば、その効果に期待がもてるがゆゑである。世には、敵對現象全體をたゞ無價

値の如く思ふものがあるが、抗爭現象に屬するものが、部分的に有意義なることを認めておかねばならぬ。要は、目的觀念を正しくして、その上に成り立つ抗爭現象を容認すべきである。抗爭現象のある種類は、かゝる觀點から、再批判してよいであらう。

敵對現象を通じて、直接的敵對と、間接的敵對の二つの型の區別のあることを、注意しておきたいと思ふ。格闘、決闘、戦争、論争の類は、みな、直接的敵對に屬し、これに反して、經濟競争や、運動競技の如きは間接的敵對に入る。ひろくいはれてゐる生存競争などもこれに入らう。一般に、前者を闘争とし、後者を競争とすることを得るであらうが、競争形態が、闘争形態に比し、慘酷性を少なからしめるを氣付くであらうが、これもまた、相手を排斥する作用であることに變りはないのである。闘争形態の場合では、力が、直接、相手の排斥にはたらくのであるが、競争形態の場合、力はなんらか業績の作爲に向ひ、これを通して、間接的に、相手の排斥がなされるのである。かくて、競争形態にあつては、中間的に、業績作爲がなされる關係上、アダム・スミスは、競争そのものの社會的有效性を主張したのである。彼の觀察は興味があるが、しかしこの問題においては、業績測定の標準こそ重要なりといはなければならぬ。すなはち、社會的に見てよい業績を高く、しからざるものを低く測定するのが肝要であり、これが反對となるならば、毫

もよい結果は得られぬであらう。經濟上の自由競争が、現在、惡結果を生ずるといはれることもどこかに標準の狂ひを來たしたからのことなのである。なほ、競争形態の多くのものは、常住間斷なしに、しかも相手にさへ匿されて行なはれる性質をもつから、われわれは、つねに、多くの他人と競争關係にあるのを忘れず、日夜、業績強化の工夫を怠るべきではない。國家の如きは、その標準を公正ならしめ、競争の結果として、國運發展の契機たらしめなければならぬのである。

さて、敵對現象のもつ、社會生活内の地位について、ダーウィン主義者は、これが、先づ、生物界の普遍的な生活原理であるとなし、したがつて、人間社會生活もまた、所謂「生存競争」によつて支配されると見た。かゝる見方は、常識的にも、存外ひろくおこなはれてゐるのである。このダーウィン主義の説は、生物生活の一面を觀察することにより、人間生活をも、その眼で律せんとしたのであるが、ダーウィンその人が、その見方をとるのを、躊躇したのは、興味ある點であり、生存競争説は、ダーウィンの意志に反して、流布されたのである。人間社會生活を、生存競争のみとする點で、ダーウィン主義は、偏した見方であるといはねばならぬ。且つ、この説が敵對現象を、一般的に是認するのは、その要素をなす、反撥現象の慘酷性を許し、抗爭現象の善導

まで等閑に附する悪結果を來たさう。かくては、社會生活の改善や、國民生活の向上を期し得るものでない。社會生活の一部に、敵對現象のたしかにふくまれることを認めつつ、そのうち、面白からぬ反撥現象を、やゝ見所ある抗爭現象にまで高めるやうな用意を怠つてはならぬ。

上下現象としては、政治的支配や、家長的支配や、その他、教育的指導や、統率・嚮導諸現象をあげ得るであらう。あらゆる和合現象についていふも、ある程度に、上下現象の要素を見るのである。夫婦友人等の場合にあつても、それらしいものは存する。けだし、純然たる肯定・肯定の理想型よりも、一方の否定的關係が、實際には、屢々、出て來るからである。上下現象において、一方の有力者が肯定するのに對し、相手たる無力者が、最初それを否定しながら、態度を變更して肯定にいたる際、相手の力に壓倒され、是非に及ばず態度を變へる場合が、もちろん多いのであるが、その他、相手の力を尊敬し、進んで態度を變へるといふ場合も、あるであらう。前の場合は、聴かされば、その害身にいたるのを考へてのことであるが、後の場合は、斷り切れぬ感情が、支配するのである。背に腹は換へられぬとは、前の場合のことであるが、後のそれは人生意氣に感じてといふ場合である。前の場合は、消極的なある利益を目的とする意志のはたらくのを見るべく、後の場合は、相手の力に魅されて、去り難い感情が作用するといへよう。それ

であるから、前の場合は、武力、權力、財力等の非人格的力が中心であるが、後の場合は、知識、道徳、藝能等、人格的力が、多く物をいふのを見出すであらう。上下現象に、この基本的二種類の存することは、制壓現象と、承服現象とを區別する十分の理由を供するであらう。

制壓現象は、暴君と臣下の關係や、征服現象を、その例としよう。支配者が、被支配者に對し一方的に命令する關係であるから、その意志通りのことが行はれ、強制的同化、すなはち、適合作用が行はれるのである。これによつて、生活及び文化の普及がなされる點は、否定し得ない。強國の國旗にしたがひ、貿易と文化の擴張されること、強權のもとに、民衆生活の規律化と、風俗・慣習の固定するを見るであらう。しかし、この適合作用は、ただ、支配的有力者の強壓によるのであるから、一種の不自然性をふくまぬわけに行かぬ。被支配的無力者の怨恨感情や、消極的抵抗のつものるのを考へのうちにおかねばならぬ。

承服現象にあつては、支配者の精神、乃至人格が物をいつて、被支配者の承服を見るのであるから、これは、上下現象といつても、和合現象に接近したものである。たゞ、支配者の精神力が存しなければ、被支配者が離れる點に、なほ、上下現象たる特徴が残る。理想的な支配・被支配は、この承服現象であるべきであるが、この關係によつて、被支配者は、支配者の意志にしたが

つて動くのであるから、社会的には、同化作用が行はれるのである。この同化作用は水の流るゝ如く、自然に、行はれ、前の適合作用の如き、強壓的な點がない。精神的な人格者の支配に、容易ならざる長所のあることが分からう。しかし、承服現象の行はれるためには、被支配者が、支配者の精神・人格を理解することが前提であるから、如何に精神・人格のすぐれたものでも、無理解者に承服されるといふことはない。現実的な力をもつて、先づ、制壓し、しかる後に、教育と宣傳によつて、相手の承服を待つより他は、ないであらう。

第三節 つゞき

こゝに、上下現象に關する、二三の誤解を匡さなければならぬと思ふ。支配・服従といへば、マルクス主義者の如きは、これを、直ちに、搾取であるといふのであるが、これが、先づ、誤りなのである。搾取とは、支配者のみが利益し、服従者が損失を被る場合の上下現象の意義である。なるほど、制壓現象などにおいて、搾取は容易に成り立つ事實であるが、こゝにおいても、搾取ばかりであるとは、斷言できない。歴史上の強權者についていふも、自己の利益と、民衆や、服従者の損失のみを計つたと斷じ難いであらう。況んや、家長的支配などでは、一族郎黨の保護や

生活の保障といふ如き觀點が大に行はれる。教育なども、一種の上下現象として行はれるものであるが、教師は、児童や、生徒の利益のみ、念頭におくはずである。承服現象の種類においては、搾取は、つねに、少く、搾取とは正反對の指導や、保護がつけ加はる。かくて、上下現象と搾取との同一視は、明らかに認識不足に基づくのである。そこで、上下現象において、服従者の側が、利益を被る場合が考へられてよいのであつて、それを、一般的には、扶掖と稱することができらう。指導や、保護は、みな、扶掖現象である。はたから助成を要する未熟者や、未完成者があり、それを、當人として必ずしも喜ばないのを、指導・保護してやるのは、一種の上下現象となるも、これは、極めて必要な事柄だといはねばならぬ。

ところで、ニーチェは、人間社會生活を、たゞ強者の支配のみであるとした點で、上下現象の一般的事實であるのを力説する思想家であつた。ニーチェのこの見方に、十分の眞理のふくまれるのは、認め得られるところであらう。しかし、社會生活が、單に、上下現象であることが、殊にニーチェの口吻の如く、制壓現象のみとするのは、正しくない。社會生活には、他に、和合現象もあれば、敵對現象もある。且つ、また、上下現象においても、一見支配、服従と受けとれない、心からの承服を基とする、承服現象さへ存するのである。ゆゑに、ニーチェの如く、社會生活は

たゞ、強者の支配であるといふ、制壓現象中心の、上下現象観は、誤つてゐる。

況んや、その制壓現象を禮讚する如きは、最大の誤謬であつて、われわれは、上下現象を認める場合においても、その自然的な形である承服現象を、制壓現象以上に、價值づけなくてはならないであらう。

和合現象は、人々互に、相手を肯定する現象である。共存共榮や、相互扶助や、協力、分業等の現象、みな、しかり。和合現象においても、注意せねばならないことは、當事者双方が、この現象をいとなむ際、意志的協同によつて相手を肯定するか、しからずして、感情的融和によつて相手を肯定するかであらう。

會社における事務處理といふ如きは、前の適例であり、家族の親和生活は、後の好例であるとするを得よう。

前の種類を協力現象とすれば、後の種類は、親和現象といひ得る。

金儲けなどのように、なんらかの生活目的を追求する意志をもつて、他人と力を合はせるところに、協力現象の事實を見る。會社、組合、協會、學術・藝術諸團體の活動は、みな、協力現象をなすであらう。現代大都會生活の如きもまた、協力現象たる面が、壓倒的にひろいといはな

ればならぬ。とにかく、協力現象は、相手との間に、なんらか新事實を目指し、それを實現しようとするのであるから、事物の革新・創造を生み出す傾向にあるものである。

親和現象は、相手を感情的に好み、その相手に近づいて、一體となつて生活しようとするところに生ずるのであるから、眞に融和現象をなすことはもちろんである。これは、相手の存在、態度、主張等を、全體的に認めて行くものであるから、一般に、相手の全人格や、乃至その一部をそのまゝ、保全し、擁護する傾向をもつといへる。夫婦が、互に、相手を庇ひ、相手を助け合ふこと、親子の間に、同じ關係の成り立つこと等は、そのよい例であらう。そこで、相互扶助といふことに、この現象の特徴が認められる。それも、ひとり、家族生活のみでなく、感情的融和關係に基づく、すべての生活に、この特徴ある相互扶助の、ひろく認められるのは、もとよりである。民族、村落、友人仲間、戀愛關係等に、それを見出すであらう。和氣霽々たる生活、安心のゆく生活、よい相互扶助の生活等が、それであつて、かゝる親和現象は、それらの點で、社會生活中最も理想形態だと考へられる。「和を以て貴しとなす」との、十七條憲法の第一條が、國內生活として、親和現象の第一義たるべきことを指摘せられたのは、偶然のことではない。上にあげた諸集團のみならず、あらゆる集團生活が、親和現象を理想的目標たらしむべきは、至當のこと

とである。

親和現象は、相手の人格、或はその一部を肯定することになるから、あるがまゝの状態に、社會を止める作用を演ずる。家族生活において、馬鹿でも、惻口でも、子弟を保護し、援助するのは、その一例であつて、その結果は、子弟の性質、傾向の保全となり、ひいて、その行ふ生活形態までを、存続せしめることにならう。村落を支配する親和現象の結果とても、しかり。現代農村が、保守的だと稱せられる理由も、また、そこに存する。要するに、親和現象は、生活墨守と保存の現象だといはなければならぬ。そこで、親和現象の融和性は、たしかに、高く買はなければならぬところであるが、その効果が、かくの如く、事物の保全原理としてはたらく點は、少しく警戒の要ありとなすべきであつて、保全に配するに、革新の原理をもつてしなければならぬことは、明らかであらうと思ふ。しかるに、必要な改革原理となるものは、實に、協力現象以外ではない。現代大都會を支配する意志的協同關係によつて、協力現象が旺んでゐるのは、農村地方の保守的停頓状態に比較して、進歩的流動状態にあることを示す。古代社會が、相互扶助的であるのに對し、現代社會が、分業協力的であるのは、同じやうに、現代社會の發展性を結果するのである。かくの如く見れば、協力現象には、親和現象に見られない特別効果があるのであ

つて、このことをよく把握し、利用することを、必要とするのである。

周知の如く、社會思想家クロボトキンは、理想生活として、親和現象をあげた特色ある人であつたが、彼は、生物一般を通じて、親和的相互扶助の事實が支配し、したがつて、生物生活の原理が相互扶助にありとすることから、この説をなしたのである。人間の場合、もちろん、この相互扶助こそ、最も理想とすべき生活形態であるが、たゞ眞に相互扶助の精神を實現すべき生活場面として、あまりにひろい集團規模は不適當である。人々の自然な、自由生活を拘束する、種々な權力統制の發現を見るからである。そこで、國家の如き權力團體を否認し、相互扶助のよく行はれる聚落形態の團體のみを認めようといふ、彼獨特の無政府主義が結論された。クロボトキンの説において、生物生活一般が、相互扶助のみとすることは、恐らく不當の説であらう。それはあまりに樂觀的にすぎる。人間社會生活の一面をとり上げたのは、多とするに足り、また、相互扶助の力説は、それ自體として、正しいであらうが、國家の如き團體生活を否認するなどは、大いに誤つてゐる。すべて社會集團は、別に詳論する如く内部の生活の安定のため社會統制をいとなむものであつて、國家の統治權力といふのも、その顯著な現はれに他ならないのである。クロボトキンの説は、この社會統制事實を否認する結果に陥り、事實上、社會生活一般を、認めない

不幸な結論となつたのである。彼の無政府主義説は、社會生活の本質を、誤解してゐるのであつて、その採るべからざることは、もちろんであらう。

第四節 社會的距離

社會關係現象について、基本的種類をあげたが、かゝる基本的種類を、或は、基礎的社會關係と稱する。社會關係とは、この場合、社會關係現象の意味であるが、元來、社會關係といへば、この關係現象を演ずる集團の人々との間の、關係状態だと解すべきであらう。かゝる關係状態としての社會關係もまた、關係現象の種類にしたがつて、基本的に、三種類となる。敵對關係、上下關係、及び、和合關係が、それであつて、少し詳細にそれを分ければ、それらの基礎的社會關係のうち、それぞれの反撥關係、抗争關係、制壓關係、承服關係、協力關係、親和關係等を、數ふべきである。これらの社會關係の全種類は、實際社會生活を行ふ集團人相互間の間柄として、ひろく行はれてゐるのであるが、その間、また相互的推移がないわけでない。一度敵對關係に立つものが、永くその關係を持続して、雌雄を決することもあるが、雌雄が決せられて、一方が支配し、他方が服従するといふふうには、上下關係に變つて行く場合が少くない。敵對關係の如きは

上下關係への過渡的關係であるとさへ、普通には考へられてゐる。しかし、敵對關係から和睦して、和合關係に入ること、屢々ある。逆に和合關係にある人々も、時あつて、敵對關係に入つたり、上下關係に轉ずることも、少くないのである。一方、上下關係に立つものが、服従者の反抗等によつて、敵對關係に移り、支配者の立場の變化から、普通の和合關係に化したりすることもあるであらう。次にかくの如く、社會關係は、空間的にも並存するのみならず、時間的に、一から他へ、變遷・推移する、繼起關係を示すであらう。

社會關係が、時間的に、一から他へ變遷することに關して、一定した法則は存在しない。例へば、敵對關係は、必ず、上下關係へ轉ずるかのやうに思つたり、上下關係が、つねに、過去における敵對關係の結果であると考へるものがあるが、決して、さうとは限らない。敵對關係の當事者が、雌雄を決するまでにいたらず、物分かれとなることさへも、往々、見られるのであつて、物分かれとは、この場合、社會的に無關係状態に還元することを意味する。また、敵對關係の多くの歸結の一つとして、上下關係をもたらしものと思惟しなければならぬ。逆に、上下關係それ自體もまた、敵對關係の多くの歸結の一つとして生ずるばかりでなく、和合關係から一足飛びに、招來されることすらある。夫婦關係が、いつとはなしに、一方的支配となり、友人關係が、借金

などから、支配・被支配關係を生ずるが如し。殊に、それまで無關係のものが會して、即座に、上下關係を生ずるやうな場合さへも想像される。「來て、見て、勝つ」とは、シーザーの偉力が、双に軋らさずして、敵側を降服せしめた事實であつたではないか。

それであるから、社會關係の諸種類の間には、一定した、必然的推移の順序はない。種々の事情によつて、その推移には、端倪すべからざる變化が現はされて行く。社會現象は、それだけの複雑さをもつてゐるから、階級的支配などについても、階級的諸存在が、會ては、敵對關係を有してをつたとか、その支配關係が、必らず、敵對關係に入つて行かなければならないとかいふ如き、簡単な判斷を下すべきではない。階級間に、上下關係のあることは事實であるが、この上下關係は、敵對關係を経ずに成り立つ場合が多い。また、階級的上下關係は、適當なる政策を用ひれば、敵對關係を要せずに、諸階級を、平等の基礎の上に協調せしめ、十分なる和合關係に引き直すこともできるのである。その政策を、社會政策とするのであるが、社會政策の極く必要なことは、何人にも、わかるであらう。この點から、われわれとして考ふべきは、社會關係の種類を見るに當つて、理想上から成るべく止めたい關係と、成るべく持ちたい關係の存すること、そして成るべく止めたい關係を、早く廢して、成るべく持ちたい關係に入りたいといふことである。

る。これについて、われわれは、こゝに、社會關係をめぐる社會的距離 (Social Distance) と云ふ問題を、考へて行かねばならぬ。

社會的距離とは、何をいふのか。よく、甲と乙とは、接近してゐる、丙と丁とは、疎隔してゐるといふが、その接近・疎隔の意味である。社會的接近、疎隔は、空間的な意味で、近くに住むとか、遠くにをるとかいふのではない。社會的距離とは、精神的な近さ、遠さであるといへる。しかも、この精神的距離が、精神的なものとして主觀的任意に流れず、社會關係の種類にしたがひ、客觀的に正確に表示されるのである。すなはち、社會的距離は、敵對關係において、最大の疎隔を示し、上下關係において、なほやゝ疎隔し、和合關係にいたつて、眞に接近を示すのである。換言すれば、敵對關係は疎隔、和合關係は接近であつて、その中間に、上下關係が存する。敵對關係の社會的距離は大で、和合關係は小、上下關係は、兩者の中位に位する。そこで、いまままで敵對關係にあつた人々や、上下關係にあつた人々が、和合關係に入れば、人々は接近して來たといふ。敵對關係の人々が、上下關係に轉ずる場合も、人々は、一步、接近したといふことができ、それらの關係が逆行するとき、人々は疎隔したと稱するのである。

基礎的社會關係内の、細かな諸關係についていつても、同様の社會的距離を考へることができ

る。すなはち、敵對關係内部の反撥關係と、抗争關係とを比較すれば、前者の社會的距離は、後者の場合よりも大きい。反撥關係は、全社會關係中極度の社會的距離を示すものである。上下關係内部の制壓關係と、承服關係とでは、前者は後者に對して、社會的距離がより大である。しかし、抗争關係よりは、より小である。また、和合關係内部の協力關係と、親和關係とでは、前者が後者よりも、社會的距離を大ならしめてゐる。しかし、協力關係は、承服關係よりも小である。そして最後の親和關係こそ、あらゆる社會關係中、最も社會的距離の短縮された場合となるのである。

さて、しからば、社會的疎隔・接近、すなはち社會的距離は、如何なる標準のもとに、決定されるのであるか。それを検討するとき、われわれは、社會的距離に關する、重要な實踐的觀點をも得るやうになるから、そのことを、いま、説明しておきたいと思ふ。社會的距離とは、集團的存在の強固化、弱體化を目安とするものである。社會的距離の大であることは、人々が反團結化の傾向にあることをいふのであつて、集團は解消途上にあるわけである。これに反し、社會的距離の小であることは、人々が團結強化の態度にあるといふことであつて、集團的存在を増進する状態である。かくて社會的距離は、集團の團結關係に照らして、測定され、社會關係の種類によ

つて、團結化に參與する程度が異なる、その異なりにしたがつて、距離の大小が區別されるのである。そこで、社會的距離は、團結安定の問題だと、換言することができるであらう。

集團安定度として、如上の社會的距離を取り上げれば、社會範圍たる集團を安定せしめることが、社會生活の要義と思惟されるかぎり、でき得るだけ、集團人相互間の社會的距離を、短縮することを、心掛けなければならぬ。すなはち、成るべく反撥關係から遠ざかり、親和關係に導くやうに、計らねばならぬ。人々の疎隔を、接近によつて置き代へなければならぬのであつて、國家、民族、農村、都會等の全體社會にあつては、このことが、特に、切望されよう。もとより、部分社會のうちには、無用のものや、不正のものも存するのであるから、すべての集團を安定化する必要はないのであるが、こゝには、確立・強化を要する全體社會や、その他の集團を眼中において、いふのである。かゝる觀點よりすれば、集團内の人々の社會的距離を、短縮することが、何より肝要な政策であつて、社會政策は、その一端に他ならず、ひろい意味での社會的政策が、問題をめぐつて構想されてよいことが、分からう。

その意味での實際政策としては、社會關係の種類による、社會的距離のスケールを、一步一步、短縮するといふ方策が、考へられなければならぬ。一舉にして、親和關係の理想状態を招來しよ

うとするのは、多くの場合、困難である。いま、われわれの前に彷彿する、國際社會の團結化についても、そのことが考へられてよいのであつて、諸國家は、なほ、多少とも敵對關係にあるものもあり、上下關係にあるものも存するが、かゝる社會的距離の存在が、不可避の實狀であることを認めるとともに、今後、その距離が短縮されて、協力關係や、特に親和關係にもち來たされるところに、國際社會の建設と、その安定が成ると、思はれるのである。

第五章 社會團結

第一節 團結關係

集團人は、相互に、社會關係に立つが、そのうち、敵對關係では、普通、積極的な團結をなさぬ。敵對する人々は、互に、排斥・拒否といふ否定的關係にあるのであつて、相寄り、相組んで、積極的に生活する關係をなさない。相寄り、相組んで、積極的に生活するのは、和合關係や、また、上下關係において見られるのであつて、それを團結關係だとする。そして、かゝる積極的團結から成る集團形態をもつて、社會團結だとする。人々の接觸や、交通だけによつて成る集團範圍も、ある意味からしては、すでに、團結形態をなすといへようが、それは、まだ、外觀的な團結たるに止まり、人々の態度そのものにおいて、積極性が認められないのであるから、ひろい意味では集團であるが、こゝにいふやうな、深い團結に立ちいたつてはをらない。すなはち、接觸、交通によつて成る、外部的社會集團のうちに住む人々にして、さらに、それ以上、積極的な團結態度を示し來たるときに、始めて、眞の社會團結が生ずると、いはなければならぬ。

かように見做して來れば、所謂全體社會と、部分社會との關係が、根本的に、理解されるやうにならうと思ふ。全體社會とは、接觸・交通によつて成る、外部的集團範圍たることを特徴とし、部分社會とは、そのやうな範圍のうちに、人々の積極的な團結態度を盛り上げて成る、特別な生活分野としての、集團範圍である。全國、地方、村落、都會等は、本來、全體社會、すなはち、外部的集團であり、そのうちに成る會社、組合、協會等々が、部分社會、すなはち、社會諸團結をなす。しかし、全國も、地方も、村落も、都會も、もし、全體として、單なる接觸・交通關係による、集團範圍たる以上に出でて、そこに住む人々が、積極的團結態度をもつていたる場合は、どうであらうか。事實、さういふ場合が、少なくないどころか、壓倒的に、多いのである。例へば、全國が政治的に統一され、地方が行政的に區劃され、村落・都會等が、經濟的に緊密化する事實を見よ。すなはち、かゝる場合においては、單なる外部的集團もまた、廣大な、積極的社會團結に立ちいたるのであつて、國家、民族の如きは、就中その顯著な形態である。そして、そのやうな場合、全體社會と部分社會は、全體團結と部分團結の關係を現はすことにならう。

積極的關係のあることにしたがひ、社會諸集團が、大小種々の形をとつて、外部的集團のうちに構成される。全體社會を掩ふ大きな團結もあるが、その範圍内に、部分社會が、無數に成り立つのである。

前にあげた各種團結の外にも、數名のものが友人仲間を作り、異性二人の間に、戀愛關係の生ずるが如きは、その例であつて、もつと、もつと、一時的な團結形態さへもあらう。送上に下駄の緒を切る甲と、それを助ける乙、車中に懇意となる旅客間の關係、出火その他の出來事に、急遽、指圖をするものと、その指圖のもとに働くものとの間柄、さては、強盜と被害者との關係、等々。袖すれ合ふも、他生の縁とか、そこに、和合關係や、上下關係の明滅する瞬間であるが、團結關係の存在は、原理的に、認めてかゝらなければならぬはずである。要するに、かゝる場合、團結形態が、それに參加する構成員の数の少いことと、存在の一時性によつて、ハッキリしないといふまでなのである。しかし、路傍の一木一草も、植物學者の認定を受くる如く、微々たる團結關係によつて成り立つ小團結といへども、社會團結たることは、認めてかゝらなければならぬところである。

かゝる學問的態度を貫くところに、科學的社會認識が達成されて來るのであつて、全體社會といふ外部的集團範圍の上に、無數の團結關係がとり行はれ、その結果、各種の團結形態が作爲される。しかも、それらが構成される團結關係の原理は、比較的簡單であつて、人々の和合關係、乃至上下關係を本としてゐることが知られる。換言すれば、人々の間の相互肯定態度によるので

あつて、さらに、その内容を調べるならば、根本的に二種類の人間態度によるものなることを發見するであらう。一は、當事者互に相手に對して感情的に相倚る態度から成る、感情的融和關係であり、その二は、當事互に相手を意圖的に助ける態度をもつて成る、意志的協同關係である。一は、感情の赴くまゝ、盲目的に相手に接近する態度において生じ、他は、目的追求意志から、相手と提携する態度において存する。前の態度による團結關係を、ゲマインシャフト (Gemeinschaft) と稱し、後の態度による團結關係を、ゲゼルシャフト (Gesellschaft) と呼ぶ。

感情的融和態度によつて成るゲマインシャフトといふ團結關係は、和合關係中の親和關係に見られるばかりでなく、上下關係中の承服關係においても、認められるであらう。親和關係は、人々が感情的に相手を肯定し合ふ場合であり、承服關係は精神的威力をもつ支配者の好意に對し、服従者が心服するものであることは、すでに、説いたところである。これら二つの場合は、平等關係と、不平等關係の差はあるが、歸するところ、當事者の感情融和態度が基となり、ともに、ゲマインシャフトとして、包括されるのである。血族や同族者の團結たる親子關係、親戚關係、氏族、部族等の團結から、共同文化を有する民族、村落、地方等の團結、その他、戀愛關係、夫婦關係、友人仲間等々、多數のものが、それに入る。親分・子分關係、主從關係、理想的な君臣

關係、教師と兒童の關係、教祖と信徒の關係、思想家と追隨者の關係等々もまた、それに屬する。眞の指導者と民衆との關係の如きも、また、それであることを見出さう。

意志的協同關係によつて生ずるゲゼルシャフトの團結關係は、和合關係中の協力關係に見られるとともに、上下關係中の制壓關係にも認められよう。協力關係において、人々は進んで相手を肯定し合ふのであつて、目的追求の意志よりする提携態度は、明らかであるが、制壓關係において、一方が、他方を意圖的に利用せんとするに對し、相手の側もまた、躊躇的ながら、一種の意圖をもつて協力して來る點は、見遁し難いのである。こゝにおいても、平等關係と、不平等關係の差は存するが、歸するところ、當事者間の意志的協同態度が、行はれるのは、容認できるところであつて、ともにゲゼルシャフトとして、綜合されてよいことになる。組合、會社、協會等の團結關係や、大にしては、國家的團結、國際關係の諸團體や、小にしては取引關係、交換關係、分業關係等、みな、しかりであり、政黨、官廳、軍隊、訓練所、刑務所等の關係も、それに屬する。

かくの如く、團結關係が、ゲマインシャフトと、ゲゼルシャフトの二種類に、大きく、分かれることは、團結關係といふ要素の問題ばかりでなく、それを基として成る、社會團結の種別を、

示唆することとならう。すなはち、ゲマインシャフトの要素關係をもつて成る團結形態を、ゲマインシャフト團結となし、これに對し、ゲゼルシャフトの要素關係によるものを、ゲゼルシャフト團結とする考へ方である。ドイツの學者、テンニースが、ゲマインシャフト・ゲゼルシャフトの兩概念を、最初提出した際の考が、それであつて、その理論をとり入れた我が國においても、それら兩概念は、團結關係といふより、むしろ團結形態の種別として採用され、その意味から、共同社會・利益社會と譯されたのである。たしかに、社會團結は、要素的關係の如何によつて、ゲマインシャフト・ゲゼルシャフト兩團結に分かれるであらう。家族、村落、民族の如きは、ゲマインシャフト團結に屬し、會社、都會、國家の如きは、ゲゼルシャフト團結に配されよう。一を、共同社會と稱し、他を、利益社會と呼ぶことも、許されるであらうが、しかし、實際上においては、家族が、専ら、ゲマインシャフト關係から成り、會社が、主として、ゲゼルシャフト關係によつて存するとはいへるにしても、家族が、なんら、ゲゼルシャフト關係をふくまず、會社が、全然ゲゼルシャフト關係につきると斷定し得ぬほど、二種の要素關係が交叉して、團結形態が成り立つてゐる。抽象的に、家族のゲマインシャフト關係だけを考へることはでき、會社のゲゼルシャフト關係のみを觀念することも許されようが、事實の取扱が、それだけでは濟まされな

いのは、まさしく、實地の姿だといへよう。

第二節 ゲマインシャフト（共同社會）

接觸と、交通によつて、社會集團をなす人々が、互に感情的融和關係に入ることから、ゲマインシャフトと稱する團結關係が生ずる。例へば、友人關係、戀愛關係、家族關係、民族關係等であるが、かゝる團結關係を基に、成り立つ團體形態が、ゲマインシャフト團結である。友人仲間、戀人同志、家族、民族諸團體がそれである。ゲマインシャフト關係と、その團結は、實際上、ひろく發見されるが、先づ、その要素的な團結關係に立ち入つて、少し詳細に研究して見よう。

人々の間に、自ら、好惡の區別があつて、虫が好くとか、好かないとか、感じがよいとか、よくないとか、同情がもてるとか、もてないとか、いふことがあるであらう。かやうな同情や、反感が、一目見て湧くこともあるが、交際してゐる間に、知らず識らずに、さういふ感情が、生まれて來ることが多い。反感の起る場合は互に離れ去り、或は敵對關係を生ずるであらうが、同情のもてる場合に、感情的融和、すなはち、ゲマインシャフトの團結關係が現はれて來る。こゝに、同情といふのは、相手に對して、倚りかゝらうといふ感じであつて、相手に接近し、ともに

生きたいといふ感情である。強い場合には、離れ難い感情と稱することもできよう。この感情は、始めの間は、自分と相手との區別を、まだ、つけてゐて、自分と相手とが、意識上、分けて考へられてゐるのであるが、やがては、自他の區別を忘れて、自他一體といふ考へにまで高められる。互に同情し合ふことから、進んでは、われわれは、一體不可分の存在だといふところまで達するのである。普通の同情關係は、友人の間に見られ、一體關係は、親友の間に起るのであらう。一體關係は、親子關係、殊に、母子關係に、立證されるものであつて、自分の胎内から生れる子供に對して、母親は、自分と別のものと考へない。子供が相當の年齢に達して、獨立性を高めるときまで、自分と子供とが、一體不可分だといふふうに感ずるのであるから、子供の病氣は、自分の病氣であるかの如く悩み、子供がすこやかに成長するのを見ては、我が喜びとするのである。子供の方からいつても、同じ感情の支配するのは、當然であらう。しかし、この一體關係は、ひとり、母子關係だけのものではない。父親と子供の關係や、仲のよい夫婦の間や、また、よく融和一致する民族構成員相互の間においても、同じ事實に接することができる。

普通の同情關係に行はれる融和感情を、共屬感情 (Gefühl des Zusammengehörens) と稱し、一體關係に進んだそれを、一體感 (Einsfühlung) と呼ぶ。この種の感情を抱き合ふことにより、

感情的融和關係、すなはち、ゲマインシャフトを生ずるのであるが、すべて、社會集團は、この感情のつながりを深くするとき、その存立・結束は固いといはなければならぬ。けだし、利害を超越し、やむにやまれぬ感情のきづなに基づくゆゑである。かくて、國民相互が、感情的融和を強くするなら、それに基づき、國家・民族は、盤石の上におかれる。かの聖德太子が、和をもつて貴しとなすと仰せられたことが、こゝに領づかれるであらう。普通の同情關係において、すでに、個人的利害を超越する、相手へのあらゆる好意がつくされ、當事者は、和氣霽々たる共同生活をいとなみ、理想狀態が展開するのであるが、一體關係にいたるならば、献身・犠牲の現象にまで、發展する。親は子のため、子は親のため、勞苦をいとさる慈愛や、孝行がいたされるのである。大にしては、一體感をもつ國民から成り立つ民族や、國家にあつて、全體のため、喜んで献身し、犠牲とならうといふ、公益優先・滅私奉公の現象が現はれる。時局下、國民の間に、このゲマインシャフト關係を強化する必要に、強く目醒めなければならぬことは、いふまでもないところである。

感情的融和、すなはち、ゲマインシャフトに、それが生ずる原因や、條件の存することが、研究され來たつてゐるのであつて、先づ、その原因について、ギイディングスの同類意識説があげ

られる。彼の説は、同情・一體關係は、人々互に、同類と考へるところに生ずるとしたのであつた。その見方は、常識的にも、古くから存して、類は友を呼ぶといはれ、ギイディングスは、要するところ、それを、學說上に、とり上げたのみに止まる。血液を等しうする國民が、鞏固な民族をなすこと、趣味や、思想の一致するものが、友達仲間を形成すること等は、みな、同類意識説から説明されるであらう。しかるに、同類、すなはち、性質・傾向を等しうするものは、他の一面で、屢々、對立關係を生ずることをも、注意しなくてはならぬ。同類は、利害の衝突をも惹き起こし易いのであつて、經濟競争が、同種類の商人間に激甚であり、戦争が、同一地域の類似國家間に闘はれるのは、そのよい證左であらう。したがつて、ギイディングスの學說は、無條件には採用できないことを、示唆される。また、一方、われわれとして、さらに注意しなければならぬことは、利害の一致が深められるとき、感情的融和關係が、培養される事實のあることである。我が國などの媒酌結婚は、第三者たる仲人が、新夫婦をめ合はせることであるが、新夫婦の家庭生活が、双方の利害の一致をもつて、圓滿に遂行されるところに、かへつて、外國の戀愛結婚以上の夫婦愛が培はれてゆく。これは、家庭生活の利害の一致をよく見通して、新家庭が形成される賜物であることを教へる。

要約すればギイディングスの同類意識説は、完全なる學說とは、受けとり難い。ゲマインシャフトは、利害の一致によつて成り立ち、同類も、利害の衝突なき限りにおいて、ゲマインシャフトを生ずるものと、觀測しなければならぬ。かくの如く見れば、感情的融和は、それ自體として、利害を超越する團結關係であるが、しかし、根本においては、當事者の利害の一致の上に築き上げられるといふ、一種矛盾と見える關係の存することに、氣付くであらう。しかし、これは、矛盾はでないのであつて、人々は生活上大きな利害の一致があれば、互に心を許し合ひ、小さな利害は間はない態度をとるまでである。これをもつても、集團結束のため、構成員の生活關心を、十二分に、調和一致せしめることが、如何に必要であるかが判かるであらう。そして、舉國一致の要望されるときの如き、國民各層間に、利害の一致を築き上げる實際政治の緊急性にも想到しなければならぬ。

ゲマインシャフトの成立條件は、また、その強化の條件だといはなくてはならぬ。利害の衝突なき限りにおける、國民の等質化と、國民各自の利害の一致を、十二分に打ち立てるのが、國家や、民族の團結強化をもたらす所以である。そこで、國民教育が、先づ、劃一主義をもつて、國家民族のゲマインシャフトの強化に役立つのである。我が國は、明治以來、初等教育を、全國的

に劃一主義のもとに行つて來たが、これは、我國の團結強化に、未曾有の好成績を收めしめた。しかるに、専門教育にもまた、この筆法をもつてすれば、忽ち、過ちを生ずる。何となれば、國民教育によつて授けられる、國民たるものの最小限の知識や、道德や、技術は、なんら人々の間に、利害の衝突を惹起しないが、専門的なものになると、それをもつて職業につき、社會的立場を築く手段となるのであるから、各方面に必要以上の等質者を送り、生存競争を激化する恐れを生ずる。今日各方面に分業を必要とする點からいつて、専門教育だけは細まかく、眞に専門化することを要する。詳言すれば、各學校、各學科毎に、それぞれ、他の企及し難い特色を出して本當の専門家を作るべきなのである。それを劃一教育の枠に追ひ込んでならない。かくして、始めて、人々は向々に就職し、社會全體の分業機構によく嵌り、相互に利害の一致を來たし、ゲマインシャフト關係の強化を見るにいたるのである。

ゲマインシャフトの觀點からいふとき、古來、我が國では、牢乎として抜くべからざる君民一體關係が、樹立され來たつてをり、理想的な民族ゲマインシャフト關係が、完成されてゐるが、これは、前記社會法則の實現にあらすして何であらうか。殊に、ゲマインシャフトの深い一體關係についていふとき、人々相互の間の均衡的立場における融和關係があるとともに、一方を中心

點とするそれもまた存し、これが、一體關係をかへつて、促進する顯着な事實があるが、我が國においては、上御一人に對し、國民各自が赤子として歸一し奉る一體感が、それである。皇室中心の民族團結の鞏固な所以が、その點に存する。

第三節 ゲゼルシャフト(利益社會)

接觸と交通による、集團範圍を構成する人々が、感情的融和關係によつて、ゲマインシャフトを生ずる如く、意志的協同關係をなすところに、ゲゼルシャフトと呼ぶ、他の團結關係が成り立つ。例へば、會社、組合、協會、學校、國家構造等。ゲゼルシャフト關係を基として成る團結そのものは、前のゲマインシャフト團結におけるやうに、ゲゼルシャフト團結だが、ゲゼルシャフト關係や、その團結もまた、ゲマインシャフトのそれの如く、實際上、多數に上るが、われわれはこゝにおいても、その團結關係の方の研究から始めるであらう。

人間は、各自、生活上の慾望、すなはち、關心をもつてゐる。この生活關心を、周圍の生活環境に適應せしめ、充足して行くところに、人間生活のあることは、前にも述べたが、しかし、人は、獨力をもつては、關心充足に困難なことが少くない。そこで、關心充足のために、進んで他

人と協同・提携する必要が起るのであつて、他人の側においても、同様の要求があり、自他の要求が相一致して、協同・提携が實現されるにいたるとき、ゲゼルシャフト關係が成り立つ。例へば、甲は金儲けを考へ、乙は名譽を得ようとする。甲は金儲けの目的を達するに、乙の援助を必要とし、乙もまた、名譽を得るために、甲の助力を要するといふとき、甲乙兩者の間に、協同・提携關係が成り立つのである。したがつて、甲、乙それぞれの利益とする目的追求のために、相互援助の關係の生ずるところに、ゲゼルシャフト關係が生ずるといつてよい。甲、乙それぞれの利益や、目的は、かくの如く、別々の立場において考へられ、その内容も相違し得るのである。が、しかし、時には、同じである場合もないわけではない。兩者ともに、公共的利益のために盡さうといふやうな場合に、相互援助の形をもつて、公益團體の成り立つなどは、その例としよう。かくて、當事者が、各自、利益を交換しようといふ意味で、ゲゼルシャフトを作る場合と、相ともに、共同利益を實現せんとして、この關係を作る場合とが、分かれたるであらう。

利益交換の簡単な例は、取引關係に見ることを得ようと思ふ。これに對して、共同利益を實現する關係は、合力關係として考へることができ、それは、力を合はせて同一目的に協力する關係があつて、力を貸し合つて、重い荷物を運ぶ場合や、さきにいふやうな、公共的利益の實現につ

くすといふ如き場合である。たゞ、普通には、この共同利益實現の合力關係とともに、一度、共同利益實現の曉、それを、各自の提供する犠牲に應じて分配するといふ、交換關係を附隨するのであつて、これゆゑ、ゲゼルシャフト團結は、やゝ、複雑なものにされてゐる。例へば、會社や、組合の總體的利益をあげるのに、先づ、力を合はせ、あげた利益のうちから、各自報酬を受取る仕組みをもつて、會社・組合等が、成り立つ如し。そして、こゝに、興味の深い形式として、彼岸ぼた餅配りなどに見られるやうに、一種の交換關係をなしながら、實は、それが共同利益實現を目指すものがある。ぼた餅の交換は、その場合、手段であつて、隣保や親戚間の親善が眞の目的をなすのであるが、これも、また、簡單でないゲゼルシャフト關係の例であらう。公共關係の多くのものは、公共的目的を狙ひとして、その形式をふむのである。

意志的協同關係、すなはち、ゲゼルシャフトにも、それが發生する原因や、條件の存することは、もちろんであると考へなくてはならぬ。經濟學者は、その交換形式の方に着目して、有無相通の關係をもつて、それが成り立つことを觀察して來てゐる。有無相通とは、各自が欲するものを、自己の所有を提供することで獲得する關係をいふ。ゆゑに、この經濟學の見方は、交換形式の外、合力形式にも適用されないわけではなく、自己が、他人とともに實現せんとするものを、

自己の力や、犠牲の提供で行ふ場合をもよくまう。しかし、交換・合力の兩形式をつらぬく理論としては、他人の自己に對する補足性の認識だとする方が、一層適切な説明だらうと信ずる。自己の欲するものを、他人が所有するとき、その所有物が補足性をなし、それを認めることが、ゲゼルシャフト關係の成立の原因なのである。他人とともに共同利益を實現する場合にあつても、他人は自己の力だけで足りない力をもつのであつて、その力が、補足性に見做される。

かくの如く、相互に、相手の自己に對する補足性を認識することが、ゲゼルシャフト關係の成り立つ原因であるが、よくよく考へれば、それだけでは、足りないものがあることが、判からう。例へば、こゝに、相手は自己の欲するものを所有し、或は、授助の力量が十分であらうとも、いざ交換となり、合力となるとき、誠意をもつて、所有物を提供し、或は、誠實に協力する態度が疑はれるならば、人は、決して、かゝる相手を選んで、ゲゼルシャフト關係に入らない。かやうな相手は敬遠し、他のより誠意のあるものを求めるのであつて、經濟學者は、この關係を有無相通とまで見たが、その道德的關係を見通すことができなかった。しかるに、この道德關係こそは極く重要なものであるから、世間にありふれた事實としても、財産あり力量ある人物でも、人格の劣つたものは、仕事の上で相手になるものがなく、結局、成功しない。その反面、財産もなく

力量もそれほどのものでなくとも、人から信用される誠實の士が、かへつて延びるといふ現象を見るのである。

以上をとりまていへば、ゲゼルシャフト團結の成立條件として、二つを數へる。一は、當事者各自の立場から、相手の自己に對する補足性を認めることと、第二に、相手に對する信頼の念である。ところで、相互に相手に對して信頼の念をもつことは、もちろん、相手が信義を守る誠實の態度を存することを前提としてゐる。自己が相手に對して信義を守り、また相手に對して信頼するといふこの關係は、結局、一種の感情的依存關係であつて、社會學的には、ゲマインシャフト、すなはち、感情的融和關係の存在と考へなくてはならぬ。畢竟、ゲゼルシャフト團結の成り立つためには、この程度のゲマインシャフトの存在が、必要條件だといふことになる。しかるに、このことは、さきに、ゲマインシャフト團結の生成を考究した際に、利害の一致の必要なことをあげ、これによつて、ゲマインシャフトの發生に、一種のゲゼルシャフト關係の必要であるのを説いたのと、矛盾するかの印象を與へるであらう。たしかに、ゲマインシャフトの成立に、ゲゼルシャフトを前提する上記の理由の存することは事實であるが、しかし、それは、實際上、ゲゼルシャフト關係の實在を必須たらしめるのでなく、たゞ、利害の一致の見通しだけをもつて

足れりとするのである。且つ、また、特定のゲゼルシャフト關係に必要なゲマインシャフトは、他の種類のゲゼルシャフト關係からして、培養され得ることにもなる。ゲマインシャフト、ゲゼルシャフトのいづれのもが、一般的に先行するかといふ如きは、無用の詮議であらうと思ふ。

さて、ゲゼルシャフト團結は、仕事のための團結といふ性質を具へるものであるから、國家的立場に立てば、國民各自が、それぞれ欲する、健全性をもつた利益を、この團結により充足せしめて行くことが望ましいと同時に、特に、國家的公共的利益をめざす、ゲゼルシャフト團結の發達を庶幾しなければならぬ。國民各自の個人的利益の充足の如きも、それ自體として、窮極の目的をなすといふのでなく、國家目的達成といふ大局高處へのつながりを必要たらしめるのも、もちろんであらう。個人的利益のみを追及するゲゼルシャフトは、闇取引の如く、國家目的につながらないのみならず、それに背馳し、抵觸するものもある。しかし、終局的に、國家目的に一致するゲゼルシャフトであれば、個人主義的であるからといつて、拒絶すべき理由をもたない。そこで、娛樂の享受なども、一概に禁止すべきでなく、それが、かへつて、公共的・國家目的に役立つ點を、考ふべきなのである。

人は、ゲゼルシャフト關係において、廣汎な利益・目的が達成されることであるから、相手に

必要な補足性を自己の身につけることが、必要であつて、世にいふ實力の養成といふ眞の意味が、こゝに存する。そして、信義を守る道德的修養が、所謂實力を眞に活かしてくれる點を思ふならば、この道德的修養の如きも、社會の實際上の必要に根ざすことが、明らかであらう。

第四節 集團構成

われわれは、社會範圍の問題をとり上げ、社會生活の行なはれる地盤を考察したが、その際、人々の接觸・交通の關係が、最も根本的なことをいつた。これによつて、人々の接觸・交通關係が、社會範圍としての集團構成の第一原理となるわけである。全體社會と呼ばれるものの如き、この集團構成の第一原理たる、接觸・交通關係の推し及ぶ全範圍をなすのであるが、しかし、それに對立させる所謂部分社會は、この接觸・交通關係の全範圍をなす外部的集團内に、段階的に成り立つ、一層密な、接觸・交通諸範圍と、特に、ゲマインシャフト、或は、ゲゼルシャフト團結關係から、部分的・局部的に限界づけられる、社會諸團結だといへよう。屢々、ゲマインシャフト、或は、ゲゼルシャフトは部分諸社會を限界づけるだけでなく、全體社會たる接觸・交通關係の存する全範圍に、重複しても成立する。ここにおいて、社會集團の構成原理として、ゲマイン

シャフト・ゲゼルシャフトの兩團結關係もまた、顧慮されねばならない結果となるのである。

社會生活の營みの行なはれる社會範圍としては、如何なる場合にも、接觸・交通關係といふ根本關係を缺くことはできない。これは、すでに、説いたところであるが、しかし、この必要な集團構成の第一原理だけから、現實の社會集團が、成り立つ例は、比較的に少い。僅かに、路傍に作られる群集や、各地から蝟集する人々によつて成る新開地とか、植民地とか、また、同じ意味で見られる現代大都會の如きが、その實例をなすであらう。交通機關の進歩によつて、これまで個々獨立してゐた各地方や、諸民族が、全國的に、或は國際社會圏のうちに統合されて來る最初の段階もまた、注目すべき他の例證をなすであらうが、これらの僅かな例によつても、事實は初期の段階においてしかるに止まり、やがては、なんらか、ゲマインシャフト・ゲゼルシャフトの團結關係が、發展して行くのを見るのである。

群集の人々が、出來事を中心に、興味によつて團結して行くこと、新開地や、植民地の人々が融和し、協同して行くこと、現代大都會の住民が、經濟的に、文化的に提携・一致して行くこと等に、その事實を看取できようと思ふ。交通機關の進歩により、ひろい共同生活に入り込む各地方や、諸民族の如きも、やがては、現實的・精神的兩方面に、ゲマインシャフト、ゲゼルシャフト

の紐帶を、織りなして來るのである。

これを要するに、接觸・交通關係をもつにいたつて、人々は、さらに、ゲマインシャフト・ゲゼルシャフトの團結關係を、種々に作り上げ、それによつて、集團狀態が、複雑ならしめられる。そして、複雑ならしめられる集團狀態は、結局、接觸・交通關係が基をなし、その上に、ゲマインシャフト、或はゲゼルシャフト關係が、添加されることであるが、實際上においては、これらのゲマインシャフト・ゲゼルシャフトの團結關係も、個々獨立に添加されるのではなく、これらがまた、重なり合ふといふ關係を來たす。ゲマインシャフト關係を有する人々の間に、信義・信頼の關係あることにより、ゲゼルシャフト的協同・提携關係の地盤が準備され、一方、人々の間のゲゼルシャフト關係の持続が、利害の一致を證し、感情上においてもお互の融和を來たし、ゲマインシャフト關係が誘發されるからである。

しかしながら、接觸・交通關係にある人々が、全體として、ゲマインシャフト、或は、ゲゼルシャフト關係をもつにいたること以外、彼等が、特殊的・局部的に、ゲマインシャフト、或は、ゲゼルシャフト關係をもつにいたるものも、もちろんである。すなはち、ゲマインシャフト、或は、ゲゼルシャフト關係を有するにいたつた人々が、全體としてまた、ゲゼルシャフトや、ゲマイン

シャフト関係をもつやうになることもあるが、こゝにおいても、特殊的・局部的に、それらの關係を生ずることもある。全國のうちで、地方的なゲマインシャフト團結が見られ、地方的ゲマインシャフト團結内で、さらに、組合の如きゲマインシャフト團結が、部分的に作爲される例や、都會のうちで、特に工場といふ如きゲゼルシャフト團結が作られ、その内部に、また、友人關係といふ如き、ゲマインシャフト團結が、局處的に、形成される例から、そのことを知り得るだらう。

殊に接觸・交通關係といつても、密な直接的接觸的狀態から、疎開した間接的交通關係の状態まで、種々の段階が存し、一方、ゲマインシャフト、或は、ゲゼルシャフト關係にあつても、友人仲間、戀愛關係、家族、民族、階級、職業團體、思想團體、趣味團體等や、また、會社、組合、協會、俱樂部、研究所、事業團體等の、夥しい種類が分れるのであつて、それらの集團諸範圍は、それぞれ、段階的に區劃され、平面的にも交錯するのであるから、尋常一様の考へで臨むわけには行かない。かくて、現實の社會集團は、接觸・交通關係といふ第一原理以外、ゲマインシャフトや、ゲゼルシャフトといふ、第二、第三原理の存在から種々雑多な組み合せで、構成されてゐるのである。

個々の社會集團は、それらの構成原理のいづれのものかを目安として、把握される。一地方といへば、特定の交通關係に基づいて取り上げられ、一家族といへば、特殊のゲマインシャフト關係にしたがつて認められ、また、一會社といへば、特色あるゲゼルシャフト關係に應じて、擷ひ上げられるのである。たゞ、このやうにして把握される一地方でも、一家族でも、一會社でも、それぞれ、交通關係や、ゲマインシャフト關係や、ゲゼルシャフト關係を中心としてはをるが、同時に、それらが、個々に特色ある構成原理の一つのもの以外、現實的には、他のものを隨伴して存在することを見遁がすべきではないのである。

そこで、われわれが、抽象的に一集團を考へ、地方や、家族や、會社をいふ場合と、具體的にそれらの集團を見る場合とが、非常に異なる結果を來たすことになる。抽象的にいふならば、地方とは、一定した交通關係を原理たらしめる集團であり、家族も、一定のゲマインシャフト關係を基礎たらしめる集團であり、會社もまた、一定のゲゼルシャフト關係を根柢たらしめる集團であるが、具體的にそれらのものを見ると、地方とは、住民の郷土愛によつて團結する、ゲマインシャフト關係や、經濟的協同を盛り上げた、ゲゼルシャフト關係をも附帶する。家族は、同じ屋根の下で、密な接觸關係を有するとともに、經濟的協同性をもつ、ゲゼルシャフト關係をも有し、

會社もまた、同じ事務所に密な接觸關係をもつと同時に、社員間の僚友關係といふ、ゲマインシャフト關係をも隨伴する。

かやうに考へて來れば、抽象的集團の取扱ひは、社會集團の特質的な構成原理のある一つのもをとつて、それを把握するのに對し、具體的なその取り上げ方は、社會集團の全構成諸原理を問題とするといふべきだらう。多くの場合に、個々の現實的社會集團は、接觸・交通の第一原理と、ゲマインシャフトの第二原理と、ゲゼルシャフトの第三原理の、三つの構成諸原理を共有することによつて成り立つ。われわれは、かゝる構成關係を、決して、忘却すべきでない。そして、その見通しをもつて、集團内の社會諸原理にも接して行かなくてはならないのである。そして、會で、テンニースは、社會集團が、ゲマインシャフト・ゲゼルシャフトの二種類の團結に分かれることを説いたが、ガイガーは、この説を修正して、社會集團が、現實的には、それら二種類の構成原理を、ともに含むとの見解に出でた。われわれは、さらに、進んで、接觸・交通といふ根本的關係をあげると同時に、それら三つの關係が結びついて、具體的集團構成の見られる所以を説く。われわれのこの理論をもつて、始めて、社會集團の全貌が明瞭ならしめられることは、説き來つたところから、承認されるであらうと思ふ。

第六章 社會形象

第一節 文化の事實

社會と文化とが、不可分關係にあることを、先づ、考へなければならぬ。普通、文化といへば精神的な洗練と、その外的表現の事物と思はれてゐて、道德、宗教、藝術、學問、娛樂等の質的向上と、その所産たる觀念、作品、圖書、施設等が指さされる。就中、純然たる精神生活に限つて、それを考へることが多く、その場合に、「文明」といふものの、對立概念をなすと思惟される。すなはち、その考へ方では、文明とは、社會生活の形而下面の發達と、その表現であるが文化とは、かゝる現實面から離れた、形而上的生活のそれが意味される。そこで、「文明は進歩したが、文化は遅れてゐる」といふやうな評言が、ある民族や、國家などに對して加へられるのである。文明と文化のこのやうな區別は、決して無意味でないのはたしかであるが、兩者を區別するには、單に、社會生活の物質面とか、精神面とかいふ如き標準から出發しては、十分でなからう。且つ、また、それらの洗練とか、發達とかいつても、如何なる觀點のもとでそれをいふか

が疑問となるのであつて、われわれは、むしろ、最初に、文化や、文明といふ事實そのものを把握するを要し、その上において、その向上、發展を、科學的に突き止めて行かねばならぬ。曖昧なる文化の取り上げ方をもつて、早急に文化の價值批判を下すべきではなく、文化の實在形態を吟味して、科學的取扱ひを對應せしめなければならないのである。

文化といふものは、先づ、われわれ人間の生活様式についていふ。人間には、外部に現はれる行動があるとともに、内部の精神的な思惟があるから、生活様式もまた、外部的行動様式と、内面的思惟様式とに分かれたれ、制度や、慣習等は前者であり、思想や、イデオロギー等が後者であるといふことになる。しかるに、人間生活は、同時に、社會生活となるのであるから、制度、慣習、思想、イデオロギー等は、われわれ人間の生活様式であるとともに、われわれ人間の社會生活様式だといふことにならう。原始時代においては、生活が、専ら、現實的なそれに限られ、精神生活の如き、宗教的信仰一色であり、それも、一般的には單純なものであるから、文化も、また、したがつて、幼稚、素朴であることを免れないが、高度社會になると、文化は複雑となり、且つまた、洗練されて行く。量の點において激増するのみならず、質の點において向上するのである。そのやうな量、質兩方面に亘る文化の發達狀態をもつて、文明と名づける。そこで、文明

とは、文化の増加と、その向上をいふことになる。文化は、人間生活を俟つて生成され、それが發達して文明を現出するが、人間生活は、つねに、社會的に營まれる關係上、社會あつて、始めて、文化の事實や、その文明がもたらされるといはねばならぬ。文化は、社會あつての事實であり、文明また、社會あつての現象であるのは、文化の事實と、文明現象とを、社會的に觀察すべきであるといふこと、さらに、これらの事實、現象に對して、社會的對應をゆるがせにできない所以を語るのである。

以上は、文化が、社會的所産である點をいつたのであるが、文化は社會的所産であるとともにまた、社會生活をリードする存在であつて、そのことを考へるとき、われわれは、益々、文化對策の必要性に目醒めることにならうと思ふ。如何なる制度も、慣習も、思想も、また、イデオロギーも、一度、それが社會のうちに存在することとなると、生活様式として集團人の生活型をなし、人々をして、その型通りの生活をなすべく規制する。このことは、制度の場合に、極く明瞭だらうと思ふ。法律制度の如き、確定的な、強い國家的強制力をもつものであるが、儀禮や、時代思潮などもまた、それから逸脱することを許さぬところを見れば、その點は分かるであらう。それから逸脱しようとするれば、強制力として、他人の非難や、世の排斥が起こつて來るのである。

かうして、文化は社會の人々を、一定した型に嵌つた生活に轉するものといふべく、このことは制度の厭力とか、傳説の勢力とかいはれてゐる。フランスの社會學者デュルケムは文化を集團表象と呼んだが、この集團表象と呼ばれる文化が、如上の強制力を發揮することについて、彼は、社會拘束 (La contrainte sociale) なる觀念をたてた。集團人は、文化の強制の下に、社會拘束を受けながら生活するのである。それほど有力な文化であるから、これを正しい形で作り上げ、且つ、その意味で育成するとき、社會生活も、また、正しくされるであらう。これに反して、もし誤つた文化をもち立てるなら、社會生活は、非常な不幸と損失を來たすであらう。文化對策の重要性が、この點から、汲みとり得られるだらうと信ずる。

文化對策のこの重要性を考へつゝ、われわれは、いま、文化の事實を、一層深く、吟味して行きたいのである。文化が生活様式であるのは既述の通りであるが、人間生活、すなはち社會生活には、種々の種類があるから、文化たる制度、慣習、思想、イデオロギーにも、おのづから、各種類が認められる。さきにいつた外面的行動様式と、内面的思惟様式の區別は、根本的のやうであるが、しかし、人間生活にあつては、外面的行動と、内面的思惟とが、つねに、密に連結してゐるのであるから、兩者を對立的に峻別し、制度、慣習群と、思想、イデオロギー群とを分かつた

とするのは、當を得ないのである。すべて、制度、慣習形態は、思想、イデオロギー的要素を伴ひ、一方、思想、イデオロギー形態もまた、制度、慣習的因子をふくむといはねばならぬ。

以上の點からいつて、あらゆる外面的行動様式は、内面的思惟様式を伴ひ、また、すべての内面的思惟様式も、外面的行動様式を随へるとしなければならぬのであつて、これら二種類を、文化に關して分かつたことは、便宜的仕方であると考ふべきである。そこで、文化は、社會的生活様式だといふところから、社會生活の種類にしたがひ、これを區別する方が實際的であつて、そのやうな方針をもつてするとき、文化は、集團人の行爲の種類に基づいて、

一、社會的文化

二、物質的文化

三、超越的文化

の各種類に、分類されることとならう。

文化の取扱に關して、最も注意すべきは、それを生活様式として把握するとともに、この生活様式に附隨する物質事物や、觀念内容等を、文化そのものから、切り離して考へて行くことである。建造物、加工品、繪畫、書籍や、また、觀念、理論、法則、主義等は、それぞれ、制度、慣

習、思想、イデオロギー等の生活諸様式に参加し、その要素たるものであるが、文化そのものたることを得ない。したがって、それらのものを、文化から引離して別に、文物と認める必要を生ずるのである。現実的な生活諸様式から脱落した條件、設備は意味なき物的存在にすぎず、同じやうに、概念、表象等も、精神的な生活諸様式から孤立しては、單なる名辭に他ならないであらう。かゝる無意味の物的存在や、單なる名辭も、それらが参加し、要素となる生活様式の亡びた後まで殘存することはあるが、それらは、過去の遺物といふのみであつて、文化から殘存することによつて、文化の存續を立證する所以とはならぬ。

文化と文物との關係は、右の如くであるが、ある種の文物は、また文化の所産であり、ある種の文物は、文化の表現であり、さらに、ある種の文物は、それ自體、文化である關係も存在するのを注意しておきたい。文物と文化との密なる關係は、たゞ前者が後者に参加し、その要具となる如き場合だけでなく、文物の文物たるは、特定文化の所産ゆゑにしかるのではない。それならば、文化的作物たるに止まり、この文化的作物が、他の文化に参加し、要具となるところに、文物の文物たる特質が認められる。文物が文化に参加し、その要具となることにより文物であるのは、文化を表現し、表徴する文物の場合にも當て嵌まり、さらに、それ自體一つの文化であるものも、

他の文化に参加し、その要具となるもの場合は、たとへ、それ自體は文化であるとしても、なほ、後の關係から、文物と見做されなければならない理由を生ずる。記念建造物が、表徴的文物となり、また物理學説において、相對性原理が、物的存在となるのは、以上の理由に基づくのである。

第二節 文化の生成

文化が、生活様式たる意味をもつて、社會の所産なることをいつたが、社會のうちに、文化は、そもそも、如何なる手続きにより、發生するものであらうか。このことを問ふことは、同時に、また、文化が、社會の生活様式として成立しつゝ、逆に、社會生活をリードする關係をも明らかならしめるであらう。文化は、さきにいふ如く、人々の生活様式であり、人々は集團をなし、社會生活を送るのであるから、その生活様式は、社會的生活様式をなす。かゝる社會生活様式が、如何にして作られるかといふことを、分析して行かねばならぬ。先づ、こゝにいふ生活様式とは如何なるものであるかといふに、集團をなす人々が、社會生活をなすに當つて、表現する、一定した型の謂である。文化的な生活様式とは、かくの如く、人々が社會生活をいとなみつゝ、現はし

來たる型的事實であるが、そのやうな型的事實が、如何にして現はれ來たるか、すなはち、文化の生成問題となるのである。

型的事實たる文化の生成を鮮明するためには、人々の生活現象が、つねに、恣意的になされるものでない點から、注意してかゝらなければならぬ。しかし、この點については、われわれは前に社會生活を論じて、それに一定の原動力が存し、この原動力が周囲の環境に適應して發動するところに、人々の生活形態の定まることを説いてある。そこで、それぞれ異なる生活原動力をもつて、それぞれ異なる環境條件の下にある人々の場合においては、生活狀況が差異せざるを得ぬことを豫想しなければならぬとともに、もし人々が同じやうな生活原動力を有し、略ぼ同一環境條件の下に存する場合には、生活狀況も等しく、生活形態も同一化するのを想像してよいであらう。事實は、たしかに、さうであつて、居住の慾望に發する極北嚴寒地方のエスキモ種族は、半穴居生活を送るのに、娛樂慾望に基づく南方熱帯地域のビルマ人は、終夜、戸外の舞踊を樂しむ。しかし、同じく極北嚴寒地方に住むエスキモ種族は、居住の慾望に發するかぎり、みな等しく、半穴居生活を送り、同じく南方熱帯地域のビルマ人は、娛樂の慾望に基づくかぎりみなこそつて、終夜、戸外に舞踊するのである。要するに、生活條件の差異と同一との組み合わせによ

つて、人間生活形態は異同を生ずるのであるが、ゾーゼはその關係を、さきにあげた如く、次の簡単な公式で示したのである。

文化の生成

かくて、生活原動力等しく、環境條件もまた等しいならば、人々の生活形態も、また、一定化するはずであつて、生活様式たる型が定まるわけであるが、およそ、同一社會集團であれば、人々は人種的性質において一致し、生活環境において、また、同一なことが多いのであるから、個々の生活面、例へば、居住、娛樂等々に、一定の生活様式が歸結される傾向にあり、集團毎に、諸種の生活様式、すなはち、各般の文化が成り立つこととならう。

以上は、文化生成の原則であるが、この原則は、次の如き、一層細かな社會心理の手續きをもつて完成されるのを、注意しておきたい。

一、衝動模倣 同一關心をもつて、同一環境下にある人々は、他人の、その場合適する行爲を認めるや、なんら深く省察することなく、衝動的にそれを真似る傾向に支配される。このことは欠伸の感染といふやうな瑣末な現象にもあらはれる。失火に當つて、劇的の觀客が先を争つて出口に殺到する例などが、それである。

二、試行錯誤 始めの間は、如何なる行爲をなすべきかに迷ひ、暗中模索的に種々の試みをなすのであるが、遂に適當なものに落ち付く過程である。個人の問題としては所謂「經驗を経る」手続きであるが、個人でも、集團でも、なるべく速やかに、この試行錯誤の段階を通過し、事情に適する行爲や、生活に入らねばならないのは、いふまでもないところである。

三、合理的模倣 他人の行ふ行爲を鑑別して、適當ならざるものは措いて問はず、適當なるものをつつて實行することをいふ。これによつて、自ら試行錯誤をなさずとも、適當する行爲に赴き得るのである。さきの衝動模倣は盲目的で、ときに誤まることがあるが、これは、合理性の鑑別によるのであるから、その鑑別さへ誤まらなければ、最も頼りになるはずである。外形は模倣であつても、自主的精神に基づくことが指摘される。よつて、このことを「人の振り見て、わが振直せ」とか「採長補短」とかいふわけである。

四、雷同現象 集團の大多數が行ふ行爲を、個人として、就中、少數者として、そのまま眞似る傾向である。この手続きによつて、ある程度まで普及した生活形態がさらに一般化して行く。集團の多數のものの意見が輿論となつて行くことなど、その顯著な例であり、その他、流行現象や、傳統生活の如きも、しかりである。政治上では、それがデモクラシーの「多數決原理」となる。

五、指導現象 一人或は少數であつてもその人々に權威があれば、よく、多數者の行爲を率ゐる。指導現象が、それであつて、よい場合の獨裁現象は、その好例である。眞の指導者は、民衆に一步先んずる。事情に適する行爲の發案者であり、實踐者だと考へねばならぬ。このやうに見做して來れば、多數決原理も、指導者原理も、結局は、集團人のまさになすべき思惟や、行動の選擇手続きであるにすぎない。選擇される思惟、行動が、一般民衆の判斷能力範圍のものであれば、多數決原理に頼れるが、しからずして、それを立ち越す如き複雑微妙のものであれば、その選擇能力を具へる適格者に俟たねばならぬ。緊急を要する場合などでは、殊にしかりであり、指導者原理が、そこに成り立つやうになる。

文化的生活様式が、集團人間に發生して來る手続きは、右につきるが、こゝに注意すべきは、集團人がこぞつて採用する一定生活様式は、單に實際生活上にひろく實踐されるだけでなく、實は、一種の強制力をもつことである。その強制力は、それ以外の生活行爲を營むことが不適當であるとの判斷や、さうせねばならない衝動や、さらに、さうさせられる集團的壓力や、乃至、指

導者の牽引力の総合的結果である。これは、永年、集團的に行ひ來たつてゐる生活様式や、確定的に示されてゐる生活型の場合において、殊さら顯著なものがあらう。前者を傳統と呼び、後者を制度となすが、傳統や制度の社會的存在性がこれによつて基礎づけられ、それら以外の慣習、思想、イデオロギー等も、大なり小なり、それに等しい存在性——客觀的存在性——を認められるといふ結果を生ずる。そこで、傳統、制度、慣習、思想、イデオロギー等が、強制力を具備して社會的に儼存し、人々がそれを生活上實踐すると見られるのである。この關係では、文化的生活様式は、個人の實踐する行爲そのものに實現されながらも、集團的に支持されてゐる標準性をもつ生活型だといはねばならぬ。

各集團毎に、それぞれこの意味の一定した標準的生活型の多くのものが作られ、それが文化であるから、社會學的には、文化を社會の構造物たる意味で、社會形象 (Social Structure) と稱すつて存し、各階級、學校、組合、會社、家族にしたがつて、違つて發見されるのは、當然なのである。大きくは、東洋文化が、西洋文化と對立することも、領けるであらう。しかし、文化は集團人の生活狀況の變化にしたがひ變遷すべきであるから、同じ國家、民族でも、時間的に歴史

的變化が文化の上に現はれて來る。特定各時代の文化がそれであるが、時代々々によつて移り變る文化といへども、それぞれの時代の集團生活狀況に應ずるものであるのは、決して忘れてはならない點である。文化は、いはゞ、社會的生活狀況の鏡であつて、生活狀況に一致する生活々動の行はれる結果、その様式や型たる意味で文化が生れる。集團間に生活狀況の差のあるゆゑに、個々の集團に、異なる文化が生まれ、個々の集團においても、その生活狀況が時間的に變つて來るところに、舊生活型が新生活型にとつて代はられ、文化の歴史的變遷が惹き起されるのである。そこで、われわれの文化に對する任務は、つねに生活狀況に適する文化を作り、生活狀況の變化に應じて、それを改めて行くことにあるのである。

第三節 文化の變遷

文化と呼ぶ社會形象は、如何に變遷するであらうか。およそ、すべての文化が固定して動かす一定形態を持続するのは、たゞ例外の場合にだけ止まるであらう。文化は、既述の如く、集團人の生活様式であり詳しくいへば、その標準的生活型であつて、集團内外の狀況を、經驗、流動し變遷するのであるから、その條件に左右される生活様式たる文化もまた、その流動、變遷にした

がつて變化の一途を辿るのである。文化が相當長期に亘つて變化を來たさず、一定形態に止まる
ことがあれば、それは、必らず、集團内外の狀況が固定し、變遷を生じないといふ事情に基づく、
封建社會の例など、しかりであらう。しかし、これは生きた社會のこととしては異數であつて、
集團内外の狀況が流動、變遷するところに、文化もまた、變化の姿をあらはす事實に接するので
ある。文の化歴史、すなはち、文化史が、そこに、書き綴られるのであるが、いま、われわれは、
この文化の變遷機構を立ち入つて、分析して見たいと思ふ。

文化の生成手続きを論じた上において、その變遷機構を説くことは、一般的には、極く容易の
ことである。文化は集團人の生活様式であり、この生活様式は人々の關心と環境の關係によつて
定まつて來るのであるから、文化の變遷は、集團人の關心に變化が起るか、或は、彼等の環境
に變化が起るか、或は、また、これら兩者のいづれにも變化が起るかによつて想起されよう。
永い間、封建社會で生活慾望を抑制して來た人々が、その制度の崩壊とともに、自由な新社會狀
態に入つて活潑なる生活々動に出づるところに、資本主義的文化が現はれるであらう。かゝる資
本主義的文化も、集團人の活動が、なほ、前時代の制度や、舊慣や、古い思想や、イデオロギ―
が生活環境として殘存する間、十分成熟した形をとる由もないが、それらの桎梏がとり除かれる

にいたるならば、純然たる開花期を迎へるであらう。また、集團人が相率ゐて郷土を後に、新天
地に移住するなら、新しい自然の地理的環境の下で、彼等の生産活動からして建直しを行はねば
ならぬ。内地の小農式稲作は、大陸の大農式麥作に轉換し、氣候、風土の差は、ひとりかくの如
き生産様式のみならず、衣食住、社交、道德、娛樂等、各般の文化の更新を迫らすには措かない
であらう。廣漠たる新天地は、人々の生活慾望の上にも若干の感化、影響をもたらすべきであつ
て、コセ／＼した島國的の考へ方が、大まかな大陸的氣風に改められて行くであらう。そこに、
文化の變遷が、關心、環境における變化を契機たらしめるのが理解される。文化の變遷はかくの
如く、關心、環境の變化に發することは、一點疑ひないところであるが、これに關聯して、二つ
の事柄を、特別、注意しておかねばならぬ。

一つは、人間の關心は、表面上から見れば、變化し易いやうに見えて、實際には、さう簡単に
變化するものでもなく、根本的にはつねに固定し、不動であること、他は、生活環境のうちで、
自然の地理的環境は、集團人が、特にその居住地を甚しく移動せぬかぎり、殆んど變化せぬこと
である。最初のものから説明して行かう。人間の關心は、人種により、時代によつて、大いに異
る如くであつて、それは、關心そのものの差異ではなく、生産條件の差異に基づく、關心發露の

相違なのである。根本的に關心は大體一定してをり、人種や、時代によつて變る如くに見られるのは、生活環境のもたらすその表現にすぎないから、われわれは、文化の變遷する原因を、専ら環境條件のうちに求めなければならぬ、しかるに環境條件についていへば、移動の頻繁な未開社會や、また文化社會における、例外の事實を除けば、社會集團の居住地移動、特に、自然的地理環境が一變するやうな居住地移動は、殆んど起らぬ稀少の事實であるから、文化の變遷を惹き起す環境の變化を、その方面に求めることは困難となる。それで、殘る生活環境たる社會的、文化的環境の方に尋ねるを要することとなるのである。

文化の變遷を惹き起す契機としての社會的、文化的環境の變化とは、何を指すのであるか、先づ、當該集團に對する外部的關係である。他集團に接觸しなかつたものが、交通機關の發達によつて新關係を生ずるとか、集團關係が平和的であつたものが、對立、鬭争状態に入るとか、支配關係を生ずるとか、支配關係が撤廢されるとかいふやうな、對外關係の變化である。對外關係が、如何に集團内部に文化の變遷をもたらすかは、徳川時代の鎖國生活が、一度、海外に門戸を開くや、明治維新の一大文化變遷を招來したことによつても分かり、現在の國際間の對立、鬭争によつて、各國文化があらゆる點で、非常時や、戰時體制におかれて來たことによつても知れよう。

かくの如く、集團間の環境的變化は、集團内の文化の變遷に對して極めて重要因子であるが、それよりなほ一層大切なのは、内部の文化状態の變化だといへよう。文化は、集團人の生活様式であるが、單なる生活様式以上に出でて、標準性をもつ生活基準として人々の行爲を拘束する。畢竟、標準的生活型として客觀性を取得し、人々に對して一種の環境的役割を演ずるものであつて集團人は、自然環境や、外部の他集團以外、内部の文化を環境條件たらしめて生活するのである。こゝに、文化は、文化の環境的變化に應じて變遷するといふ、文化相互間の變遷上の規定關係を見るであらう。例へば、宗教思想が變化すれば、經濟制度や、衣食住の慣習も變化し、法律制度が改められれば、道徳思想や、社會慣習も變遷することになり、生産制度が激變するなら、政治制度も家族慣習も變化を餘儀なくされる結果を見よう。原則として、あらゆる制度、慣習、思想、イデオロギト相互の間に、循環的規定關係が成り立つのであるが、しかし、集團により、時代によつて、人々が最も力を入れる生活面の文化は、それ以外の部面の文化に對し、能動的な規定作用を行ふことを注目しなければならぬ。かくて、歴史的にいふなら、古代では、概して、宗教思想が支配的役割を演じ、中世では政治制度が壓倒的な地位を取得し、近代にあつては生産制度が

樞軸的偉力を示すといふことになる。歴史的時代のみならず、集團々々によつて、以上の中心的文化が差異することも、忘るべからざるところである。

さて、文化の變遷の理論は、一應、右様のものであるが、文化は、たとへ環境上の變化がなくとも、自動的に變遷する點のあるのを附言しなければならぬ。すなはち、文化は生活様式であるが、人々の生活は繰り返して行はれる間に、つねに、經驗により、よりよきものとされて行く傾向を有し、その結果、生活様式の向上するのが認められる。益々合理的に環境に適應し、愈々無駄を省いて目的なものにされ、次々に彫琢を加へられ、層一層レファインされて行くのがそれである。適應化、目的化、醇美化がそれであるが、結局、眞髓化といふ二つの傾向に要約されるであらう。しかしこれらの傾向は、環境の變化の慌しい間は、現はれ難いものであつて、同一環境條件がしばらく續くところに、文化は始めて、以上の進展を示すといはなくてはならぬ。社會の進化も、そのとき、漸く考へられるであらう。しかるに、環境條件が變化するとき、文化の進展は、一應停止されて、新環境に大まかに適應する新興文化の發生によつて、事柄が再出發するのである。その際、舊文化は、存在理由を喪失して没落するが、新興文化の發生と相俟ち、文化混沌期が現はれざるを得ない。新興文化は先づこの混沌状態のうちに芽生える。それは、環境に對して

大まかな適應性を盛り上げるが、やがて、徐々に、この適應性を大ならしめ、向上、進歩し、或る程度の確立を來たせば、ここに、文化安定期を出現するのである。この文化安定期は、いつの日にか、環境の變化の再度の到來により破壊され、文化混沌期を通じて、文化の安定期へと推移して行く運命にある。

第四節 文化の集團的特性

文化、すなはち社會形象は、集團的生活様式、特に、標準的生活基準型たる意味において、各種集團内に生成、存立するのであるが、これが集團毎に行はれる生活活動に即して存する關係から、集團的特性を有するものなることを注意したい。この問題は、先づ、文化を總體的に運載する集團が、全體社會といはれる人々の接觸であること、また、文化は、集團毎に、特性を異にするのみでなく、時代的にもその性格を變へること等にも觸れて行かなければならぬ。文化は集團人の生活様式として生成される。それであるから、集團の異なるにしたがひ、人々の生活に差異あることによつて、そこに生ずる文化にも、差別が起こる。これは、ひとり、全體社會といふやうな特殊の集團だけの問題ではなく、ひろく部分諸社會のそれについてもいひ得られる。全體社會

とは國家や、民族であつたり、地方、都會、村落等でもあるが、國家、民族、地方、都會、村落の各々のものが、それぞれ構成員の素質を異にし、なかんづく、その環境を異にする結果として、政治生活においても、經濟生活においても、衣食住の生活においても、大なり小なり、差異を來たし、それに應じて、生活様式たる文化の上にも、個々の特質が浮び上がる。後にいふ如く、それが國民性であり、民族性であり、地方氣質であり、都會、村落それぞれの氣風だといへるのである。かゝる特質や、性格は、部分社會であるところの家族、會社、組合、協會、研究所、病院、學校等においても認められるところであるが、部分社會の場合にあつては、文化の特質、性格の差異以外、個々の團結の特殊機能のあることにしたがひ、生活々動が分業化してゐる關係上、生活様式が、特に、種別的に異らざるを得ない。會社では、經濟文化が、學校では、教育文化が、研究所では、學藝文化が、といふやうな、種類上の對立が起り得るのである。部分社會の諸種類に應じて、文化の専門的存在といふ事實の見られることを、先づ、考慮のうちにおかなければならぬ。もちろん、全體社會においても、かゝる文化の種別的對立が皆無であるといふを得ないが、そして、その例として西洋社會の基督教的文化と、東洋社會の佛教・儒教的文化の對立的存在や、高度國家の科學的文化と、初等國家の神秘的文化的對立的事實が與へられてよいであらう。同じ

く民族、地方、都會、村落といつても、生産、經濟、道德、言語等の點で、著しい相違が示され、それが、文化種別の相違だと考へられてよい點があるであらう。しかし、われわれが、民族と村落とを比較したり、國家と都會とを對質したりしないで、民族と民族、國家と國家、地方と地方、都會と都會、村落と村落といふ如く、同種類の全體社會を比較對質するかぎり、そこに營まれる生活々動は基本的に類似のものであり、ただ示される特質、性格が異なるだけになるのであつて、そこに文化の集團的特性が認められよう。かゝる性格が、部分社會の場合においても、會社と會社、學校と學校、研究所と研究所といふ如き、同一種類のもの間において、顯著に看取されるといふことになるのである。こゝにおいてもそれぞれの性格上の相違は、氣質の差とか、氣風の差とか、生活傾向上の差とかして受け取られ易いが、眞の相違は、社會過程たる生活々動の差異といふより、それをして差異せしめる、標準的生活様式、すなはち文化的社會形象の特質に求められる。畢竟、文化の集團的、性格が物をいふわけである。

文化の、こゝにいふ集團的性格は、實際の事實であるが、文化は、もとより、内容からいへば多種類に亘つてゐる。そのことは、全體社會の文化についていひ得るのみならず、部分社會のそれについても、ひろく、いひ得るところである。會社は、經濟慣習のみをもつだけでなく、道德

思想も所有すれば、服務規律をも有するであらう。全體社會にいたつては、文化内容はありとあらゆるものとなる。それであるから、これらの内容をなす個々の文化が、性格的にバラ／＼であるならば、如何に同種類の集團を比較するとも、文化の集團的性格の如きは、認められないはずであるが、しかし、文化は、實際からいつて、たとへ内容的に多くの要素に分かたれるとしても、統一的性格を呈するやうになり、それによつて、集團間の比較が、この統一的性格の捕捉を得しめる。文化の集團的性格のあり得ることは、集團内部の各文化要素を通ずる統一的性格の存在を前提としてゐる。

しからば、この意味の、文化の集團内部における諸要素間の統一的性格は、如何にして成るかといへば、われわれは翻つて、文化生成の理論に、その答を求めなければならぬ。すべて、文化は、人々の關心と環境との相關々係からの所産であるが、一の文化が、一定關心を基に生じて來る場合、その環境のうちには、自然環境や、外部の他集團といふ如きものもあるが、最も重要なものとして、集團内部の既存の文化要素があるのであつて、これに對して適應する意味においてのみ、新文化要素は生成される。それであるから、一の文化要素は、他の文化要素に一致することによつてのみ、實際に存在し得るのであり、しかも、この一致は、一の要素が、他の要素の

つ性格に一致するといふ一致なのである。何故であらうか。そもそも、文化は生活様式として、人々の支持、採用にその存在理由を有するものであるが、人々の側は、二つ以上の異なる性格文化要素を、同時に支持、採用するといふわけに行かない。人々が假に、資本主義的經濟慣習を支持するときは、同時に、それと性格を異にする封建的道德思想を採用することを得ない。もしあれば、それは人格の分裂であつて、人々はそれをよくせぬのであるから、人々の人格統一の深い根源からして、同一集團内の文化諸要素間に、その性格上の統一化が歸結されて來るのである。これが、文化に種類多きも、集團毎に統一的性格をあらはし、それが對外的比較によつて、顯著に認識されて來る所以となるのである。

文化の集團性格は、以上の如きものであるが、文化は、同一集團内においても、歴史的に變遷し、各時代特有の性格を呈するであらう。前にあげた、文化が、混沌期を経て安定期を迎へることは、時代的な統一的性格の出來上るのを意味し、各時代の統一的性格の間に、時代性格が認められるといふことになる。徳川時代の文化と、明治時代の文化の間に、封建的たると、自由主義的たるとの差のあらはれるのが、それである。文化の集團的性格は、この場合には、時代性格となるが、そもそも、歴史的に時代の分かれたれるのも、文化の如上の統一性格の變遷に基づくも